
まさかの転生先！？

西木さんの大貝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの転生先！？

【Nコード】

N9495V

【作者名】

西木さんの大貝

【あらすじ】

転生だ！テンプレだ！でも普通の転生先は、他の転生者が邪魔だ！なら、普通は選ばないところする〜！

というコンセプトで始まる、執事物語。興味がある人は寄って行ってください。（原作知らない人はきついですが…）

初心者なので、きついことは書かんでください…でもコメントは欲しいです！

1話 とりあえずの始まり

「知らない天井だ。」

言ってみたかったから言ってみたけど、実際は天井なんかありません。

「おや、目が覚めたようですね。」

声の主は…見知らぬ男性。見た目は普通。どんな感じかということ、「田中太郎」という名前が似合いそうなぐらいに個性のない人物。恰好はいわゆるサラリーマン？

「あなたは、だれなんですか？というか、ここはどこなんですか？とりあえず、最初に持った疑問をこの男性にぶつける。」

「まあ、あなた方、”人間”でいうところの、天国…といったところでしょうか。そして、私は神といったところでしょうか。」

神はテンプレなら幼女かジジイの二択ではないのか？まあ、どうでもいいか。

「ということ、俺は死んだということなんですか？」

「死んだということには、間違いはないんですが、寿命だったわけではないのです。」

意味が分からない…これはテンプレな感じに、神の暇つぶしの転生

フラグとかなのか？

「え〜とですね。転生はしてもらおう予定ですが、暇つぶしではないということは知っておいてもらいたいですね。あ、すいません勝手に心を読ませてしまいました。」

まあ、神なら心も読めるか。なら、なぜ俺は死んだのだろうか？

「死んだ理由についてはですが、これはどうしようもない世界のバグのせいなんです。確率でいうならば、数千分の一といったところなので、早めに正常化したいと考えているのですが…申し訳ありませんでした！」

まあ。前世に未練は…それなりにあるが、愚痴っでもしょうがない。

「なら、転生時にオプションなんかはあるんですか？」

「もちろんです。あなたの本来の残りの寿命をオプションに変える…3つまでなら願いをかなえることが可能です。」

願いか…その前にいろいろと確認することがあるな。

「さっき、”数千分の一”の確率といましたが、他にも転生者がいるということになるんですか？」

「そうですね、転生先がかぶることは、ありえます。例えば、ネギまの世界には今だと5人いますし、とあるの世界なら4人といったところでしょうか…」

なら、他の転生者と同じ世界を選ぶのは損になりかねんな。フラグ

(恋愛とか死亡)的な意味で…

「なら、身体的特徴は願いいに入りますか？」

「いえ、願いととは普通ではありえないことや、特別な願いのことですから、よっぽど変わった条件を付けなければ、カウントされません。」

「だったら、条件は？アンサートーカー？ネギまのラカンなみの身体能力及び気？執事としてのありとあらゆる才能 の3つにしてください。」

「??はよく頼まれますが、?は初めてかもしれません… もちろん問題はありませんが。」

だろうな〜 しかし、?は俺の野望に不可欠な重要ポイントだ!!

「で、身体的特徴は、175cmぐらいの身長細マッチョ。顔は上の下ぐらいのレベルでお願いします。あ、もちろん日本人で。」

イケメン過ぎると逆にデメリットが大きいらな、上の下がベストだ!

「日本人…ということとは、”日本”という国のある世界に行きたいということですか？」

「ええ、俺が希望する世界は…これだけxばと…の世界だ!!」

「…そうですか。了解いたしました。」

あれ、予想外にも反応薄くないか！？もしかして他にも前例がいたとか？そ、それはやばい（汗）

「もしかして、他の転生者がいたりします？」

「いませんが、そのせいで新たに世界を創るのが少し面倒なので、反応が薄いのです。心を読んでいるので、驚きもありません。」

そういえば、最初に言ってたな〜忘れてたわ〜 でも、これで俺の予定通りだ！些細な問題は捨ててよしだな！

「世界創造の面倒くささは、些細な問題ではないんですが…これも仕事なので、やらせてもらいますが。」

頑張れ〜！応援だけはしてるぞ！

「もういいです。余計なお世話です。ささつと逝ってください。」

あれ、最初に比べて言葉がきつい…怒らせたか？

と、考えているとききなり、地面？の感覚が無くなった。

「行ってらっしゃーい（棒読み）」

「テンプレすぎやろ〜」

こうして俺の転生物語が始まった…

1話 とりあえずの始まり（後書き）

出来れば、次の更新も頑張っ
て早めに出します。

2話 やっぱりこつなつた幼少期…

うん。テンプレだね。赤ちゃんスタート…

「いない、いない、ばあ。うん、可愛いですね。しん君」

死んでいいですかね？一回死にましたけど…恥ずかしいです。この世界に転生しての、俺の名前は「栗須 真二」（くりす しんじ）
現役バリバリの赤ちゃん（笑）です。

「おしめ、替えますね」

や、やめろ。いや。そこは堪忍して

こころ辺の、羞恥プレイはキンクリ決定だ（泣）

小1だ。誰がなんと言おうと小1だ。その前など存在しない…

「1年2組か」

誰か原作キャラに遭遇したい今日この頃です。

「では、今日からこの組の先生になる、田島たじま 優香ゆうかです。みなさん

よろしく願いします。」

「「「はい」「」」

面倒くさい。前世だと大学生まで行った俺からすると、小学生のテーションはきつい。うん、いつの間にか自己紹介が俺の番になる？

「栗須 真二です。よろしくおねがいします！」

もう、これでいいだろ？だって、小1だもの。というか、本当にこは、れでい×ばと の世界なんかな？少し疑問に思う… あ、でも基本的に登場人物は、セレブの子だから、いわゆる普通の子の俺には遭遇機会がないのか…
と、無駄に考えていると、なんか見たような顔が…？しかし知り合
いではないな。

「鈴橋 朋美です。よろしくおねがいします。」

うん。誰だっけ？……お！鈴橋っていうからしっくりこなかったけど、腹黒お嬢様だ！そうか、彼女は、確か最初は一般人だったな。うん、さっきの疑問は解決だな。

「日野 秋晴です。よろしくおねがいします…」

野郎はどうでもいい！原作キャラだけど、どうでもいい！主人公だ
けども、どう…（以下同文

これは、苦節6年、やっとの原作介入の開始だ〜！

ども、またキンクリだよ。数週間だけ。

にしても、あの腹黒さんは原作通りの腹黒ぶりだね。あ、また秋晴がいじられてる。まあ、大体の男子は彼女の言いなりなんですけどね。うん、俺？俺は、見た目は子供、頭脳は大人な子供だから、基本的にスルーだよ。なんかね、原作介入熱冷めちゃった。だって、小1とかレベル的にね。

「それで、栗須君はどうして帰ろうとしているんですか？」

スルー失敗しました。腹黒が現れた！

「放課後だからですけど。何か用があるのか？」

「いえ、でもみんなと遊んでいかないの？」

なんか、遊ぶってという言葉は男子と遊ぶっていうことじゃなくて、男子（主に秋晴）で遊ぶっていう感じに取れるな。

「まあ、いいけど。」

「よかった。」

この後？それなりにして遊びましたよ？秋晴をかばってたら、秋晴に懐かれたけど、野郎のフラグなんざ、いらんのじゃ〜。

2話 やっぱりになった幼少期…(後書き)

やっぱり、初心者にはきつい…

3話 いい加減ネタが尽きたから、本編に入ろうか？いや、まだ早い！（前書き）
まさかのシリーズ！！
本編にどうぞ！

3話 いい加減ネタが尽きたから、本編に入ろうか？いや、まだ早い！

どうも、みんな元気ですか？俺は今日も元気です。

あれから、3年間…長いようで（作者の気分的に）、短かった（文章量的に）な〜

キンクリしすぎ？しょうがないさ、原作では触れてないんだから…

なんか変な電波拾ったな。まあ、今、俺はアメリカにいます。理由は、オプションのアンサーカーです。だって、一般的に見たら、神童じゃん。ということで、親バカもとい、バカ親に連れられ、海外留学ですか… これって、下手したら白麗陵に入学する前に、就職とかになる？ せつかく他の転生者がいないのに、意味ないじゃん！！orz

まあ、悩んでもしょうがない。親の期待に応えつつ、原作介入の道を模索していきましようかね？

「ところで、母さん？俺はどこの学校に行くの？」

実際、大学に入ってもやっていけますが、まあ最初は小学校に行つてスキップを繰り返すんでしようかね？

「え〜とね。しん君が通う学校はここよ！」

うん。普通の学校だ。こんなところに原作キャラなんかいないから、さっさと卒業しちまうか！！

作者さんよ。ネタがないからって、1話の中で2回もキンクリしたらあかんやろ…

うん、また変な電波を拾ったが、今は、本来なら中3という原作開始一年前！

そして、本来なら中3の俺だが、マサチューセッツ工科大学卒という、はつきりいつて執事には必要ない学歴を手に入れた！今、日本に戻る途中だけど、原作介入出来んのかな？

飛行機の中は暇だ。しかも、チートなラカンの身体能力は手に入ったのに、耳が「キーン」とする…なんだこれ？ラカンは以外に雑魚なのか？

うん？なんか飛行機内に怪しいという一言に尽きるバカが何人かいるんだけど？テロ？うわ、もうちょっと、警備を頑張れよアメリカ

「Shut up! Don't resist us!」(黙れ！抵抗するな！)

うわ、どうしようか？はつきりいつて、抵抗すれば2分以内に制圧できるけど、逆に言つと、二分以内は危険が倍増ということなんだよな…ここは、様子見がベストだな。

まあ、会話の内容や要求を聞く限りはテロ組織の仲間の解放が条件みたいだ…テロリストの数は見える限りだと7人。コックピットも占拠されているだろうし、予想だと10人程度かな？アメリカも無能ではないだろうし、何とか無事に帰れるはず。

あれ？女性が一人立たされてる？やばくないか、あれ？アメリカは何してるんだ〜！！あ…撃たれた…これは、まずいな。下手したら自爆も辞さない雰囲気だし。しょうがない…小を切り捨て大を救うしかないようだな…

まずは、アンサートーカーで敵の人数と場所の把握。敵は予想通りの10人。コックピットに2人、客席にバランスよく7人。一人足りない？なんでアンサートーカーを使ってるのに、分からない？今まではこんなことはなかった…でも、しかたがない。実行開始だ！

まずは一人目。ラカン並のチートボディーで背後に回り、首に水平チョップ。首への当身って素人がやっても効果は薄いらしいが、この体に不可能はほとんどないと思ってる！

この調子で、静かに、しかし確実にテロリストを制圧していく。コックピットにも気配を消しつつ、忍び込みなんかリーダーっぽい人+1人の意識を刈り取る。ようやく、ミッションコンプリートかな。これで、解放されるは……

「パンツ。パパパパパ…」

乾いた銃声が客室から響きます。しまった、一人だけ居場所がつかめていない奴がいたんだ…こんな単純ミスをするだなんて、緊張してるとはいえ情けないぞ、俺！！

客席に戻ると、そこは血の海であった。おそらく最後の一人が自棄になって乱射したんだろう。急いで、最後の一人に思いつきり、ラカンパンチ的な何かを食らわせます。

両親が心配でならない。この体になってから、第六感がよく働く。席に戻ると、父は血まみれ。残念ながら間に合わなかったか。くそ、何で、こんなことに…

母さんは、まだ意識がある！旅客機内放送によると、到着まであと30分ぐらいで到着するらしい。なんとか、母さんだけでも…！

「しん君。しん君はね、母さんたちの、最高の宝物だったの…」

「母さん、しゃべらないで！血が止まなくなっちゃう！」

「大丈夫よ。なんとなくわかるの、お父さんと同じところに逝くんだった…」

「そんなこと言っちゃダメだ！あとたったの30分なんだから！」

「しん君はね、とてもいい子だったよ。でもね、いい子すぎるの。わがママは言わないし、つらいはずの勉強に文句も言わない。母さんたちは、しん君にもっと、わがママ、うっん、自分でやりたいことをやってほしかった。言っただけだった。だからね、母さんがいなくなったら、好きなことをしなさい。これが、母さんとの最後の約束よ…」

何も言えない…。確かに精神が大人の俺は、わがママなんか言ったことがなかった。両親は、この世界での両親は、俺の、大切な人たち…。その二人のわがママ、言うことならききたい、叶えたいって

考えてきた… なら最後は、家族みんなの“わがまま”を叶えたい
！！

「分かった…俺は、日本で自分でしたいことをする。だから、母さん
も一緒に…」

母さんは笑顔だった…笑顔のままだった。

俺は、自分のしたいことをする！そう、強く思った。この事件が自分
にとってのあり方を決めるものになったのは、皮肉なことだった…

3話 いい加減ネタが尽きたから、本編に入ろうか？いや、まだ早い！（後書き

なんで、こうなったし？

自分でもわかりません…

ちなみに、テロリストが一人わからなかった理由は、次で明らかに

！！

4話 事件後とこれから…

事件後…

事件後に改めて、アンサーターカーでテロリストの場所を確認してみた。残りの一人は客席だった。俺の先入観が、テロリストの“立ち位置”の答えを探していたから、見つからなかったのだろう。これでは、客席に“座っている”犯人は見つかるわけがない…

空港に着陸後、警察の事情聴取を受け（事件を解決した人物は不明ということにしたが…）、その日は、警察のところに厄介になる。（悪いことはしていないが）その後、念のための検査を病院で受け、小さいころに離れた我が家に戻る。出発前には、思いもなかった、一人きりの帰宅…

一人きりで、考える。自分のやりたいこと…それはもちろん、原作介入だ。でも、両親の死後に不謹慎じゃないだろうか？両親の望むこととは違うんじゃないだろうか？そんな、とりとめのない考えが自分の中で、めぐり続ける。

厳しい冬の最中、俺は受験会場にいた。受験する学校は白麗陵。悩

んだ結果、俺は自分のやりたいことをすると決めた。受験会場は、もちろん、白麗陵…なわけがない。原作内では編入試験は白麗陵で行われたらしいが、多数の外部の人間が受ける試験の開催は安全面において、問題があるんだろうな。というわけで、都内の某会場で受験中だが…なんだこの簡単な課題は？課題は全部で3つ。

? 知識問題（高校受験レベルと同じか低いくらいだな）

? 料理課題（家庭料理より少し高いレベル）

? 面接

の3つだった。??はもらった能力で楽勝のクリア。これから、面接だが、これが一番の難所かもしれない…なんせ、会場には見た限り、20人ぐらいの男子がいたように感じたが、原作では3人しか合格していない。エロかったから落とされたわけではない（轟は受かったから）だろうが、ここで落とされた奴も結構いたはずだ…

「受験番号、52番」

どうやら、俺の番のようだ。

コンコン ドアをノックする。

「入ってください。」

「失礼します。」

両手で扉を開け、礼をする。部屋に入ると両手でドアを閉める。もちろん原作の秋晴みたく、後ろ手に閉めたりはしない。

「そこに、座って下さい。」

席に腰を掛け、試験官に顔を合わせる。…あ、深閑さんだ！原作キヤラとの遭遇は何年振りだろうか？10年ぐらいかな？

「あなたは、この私立白麗陵学院の従育科を受験なさいましたが、どのような理由で受験なさったのか、お聞かせください。」

「私が、貴校を受験した理由は、貴校の教いく…」

「そのような、建前の理由ではなく、できれば本音を語ってもらえませんか？失礼ながら、あなたの個人的な情報がある程度は、調べました。マサチューセッツ工科大学卒という学歴ならば、就職先は引く手あまただったでしょう。それを蹴って、ここを受験した理由が聞きたいのです。」

まあ、原作で秋晴が調査されてたみたいに、調べられてて当然か。お嬢様方の安全確保は重要だろうし。

「ということは、“あの”事件もご存じですよね？」

「ええ。ある程度までのことなら知っています。」

「あの事件の中で、母が遺した言葉が、『自分のやりたいことをしてほしい』という言葉だったんです。私は、望まれるままに、才能で大学を卒業しました。でも、自分でやりたいと思ったことはありませんでした。だから、ここで、みつきたいんです！自分のやりたいことを！」

「分かりました。これにて、面接は終了です。お疲れ様でした。」

…拍子抜けがするくらいに簡単な面接の後に、受験者全体に伝達が伝わった。まあ、事務連絡的なもので、合格発表は、郵送をもって知らせるという内容だった。

その数週間後、一通の封筒が届いた。もちろん、受験結果だ。転生直後は、欲まみれだったような気がするが、今は単純に一人の受験生として、緊張する。恐る恐る、封筒の封を切る。封筒の中から、一枚の紙を取り出す。祈るように見たその紙には、

「合格」

の二文字があった！

4話 事件後とこれから…(後書き)

というわけで、次から学園に向かいますが、秋晴は遅れて転入してくるので、原作の話はもう少し先になります。

5話 入学しているいろいろと大変だよね（前書き）

アンケート協力お願いします！

（詳しくは、ひとつ前の所で…）

5話 入学つていろいろと大変だよ

合格した場合は、本来なら、制服の入手とか教科書の購入とか意外とやることが多いはずだが、入学金、学費、寮費がすべて無料のこの白麗陵においてはあまり入学前にすることは無い。よって、暇を持てあました俺は、すっかり忘れかけていた、オプシヨンの“執事としてのありとあらゆる才能”を試してみようかと思いついた。

「ところで、執事つて何をするんだ…？」

執事という特殊な仕事にこれっぽっちも縁がなかった俺は、出だしから躓いていた…

「とりあえず、紅茶をいれるとかなのか？」

しかし、この家に紅茶なんか存在しない…我が家はバリバリのコーヒー派だった。つ、次だ、次！

や、やばい…全然わからない。原作だと、肉体改造から入っていたがそんなのはラカン並の体には不要！（というか、執事にはもともといらないような…？）あとは……そういえば、原作つて一年生だったから、いまいち深く習ってなかったんだっただよな…

無駄な時間が過ぎ、とりあえず家事の真似事をしてみたら良くないかという結論に至った。そうだな、料理は試験においてぶっつけ本番で普通にできた。（手際、味付け、見た目などすべてにおいてポイント以上だったが、料理経験0の俺は入学するまで、気づかなかった。）

なら、掃除能力はどうだろうか？基本的に、親任せだったが、この才能があれば特殊な掃除も可能になるはず！！

…さすがチート能力。母さんが落ちなくて諦めた汚れを普通に取り去ることができた！でも、これって執事というより、家政婦のような…？

まあ、ある程度確認できたし、これ以上試す方法が思いつかないから、入寮のために荷物でもまとめましようかね？…チート能力を使つて。

入学式当日… 正門をくぐった先にはバカげた空間が広がっていた。でかい…しかも、デイズーランドが霞むくらいにファンタジー？だ… これから三年間通う学校にしては、集合は10:00に講堂前らしい。下手すると迷子だな…

講堂前についたが、あれが従育科の集団か？タキシードと、メイド服…間違えようがないな… しかし、男子が見当たらない… き、気まずい。… あ、あれは原作でいうところの三家ミヤっぽい！とりあえず味方がほしい。

「あの、従育科の男子ですよね？」

とりあえず、話しかけてみる。男友達は宝だ！そう強く思った、今日この頃…

「そ、そうだけど、君も？」

「よかった…なんか、この空間に居づらくて、困ってたんですよ…これから、同じ従育科の男子としてよろしくお願いします。」

「うん。よろしくね」

男子なのに、男子なのに、なんでこんなにかわいいんだ〜？女装する話があったが、確かに女装したらやばそうだ！む、なんか邪な視線を感じる！！

「おつ、なんやなんや？男子二人して何しとるんかいな？」

でた、セクハラ大魔王こと轟… 三家だけで十分だったのに。

「えらいぎょうさん女の子がおるのに、何で男同士で話合つとるんやねん？もう、戦いは始まつとるんやで！」

しらんわ！！というか、初対面なのにドンドン話しかけていたら、気持ち悪がられるだけだろ… まあ、轟ならそんなもんか？

あ、深閑さんだ。入場開始みたいだな。どうやら、従育科は先に入場して何かしらの説明があるらしい。

先に従育科だけでの式が始まって、10分ぐらいかな？理事長の話が始まっていた。

「え、みなさん入学おめでとうございます。…あれ次はなんだつたっけ？…」

グダグダだ… 天壤慈 てんじょうじ 楓さん かえで… 理事長としてのしごとを全く果たせてない…もう聞き流すことにしよう。

「では、次に従育科教師長からのお話です。」

「皆さん、ご入学おめでとうございます。これから、簡単ではありませんが本校、従育科のガイダンスを行います。従育科の男子は執事、女子はメイドを目指して教育を受けるーでは、執事とはどんな役職なのでしょう？本来の執事を英訳すればバトラー…その語源は『ポトラー』つまり役割は、酒類の管理をする使用人です。」

あゝ原作でもそんなこと言ってたな。豆知識だけど、あんまり必要な知識ではないかな？

「バトラーは重要な役割です。酒蔵の管理はもちろん、様々な雑務にも従事し、他の使用人を使う立場でもありました。ディナーの席においては、食卓の配置、装飾ワインを注ぐ際の気配り、紳士らしい振る舞いなどが求められる、それなりに責任のある役職といえま

す。」

「しかし、皆さんに目指してもらおう役職はこれだけではありません。バトラーよりも上の役職のスチュワードやフットマン、ヴァレットなど多くの役職を兼ね揃えた、私的秘書に近い管理職を目指してもらいます。使用人のまとめ役でもあり、主人の要望に出来る限り応え、時には公私に渡り助言もする。広い知識と教養、細かな配慮、健康で強靱な肉体が要求される大変な仕事です。」

なんか、すごい仕事だな。深閑みたいな人ならOKっていうことしか分からない。

「貴方達は、身体だけではなく、精神も含めて成長期を迎えています。この時期に鍛えられた若人は世間一般における、“不可能”を可能にするだけの能力を得ることができます。」

うん、すでに“身体”だけならクリアできてるはず…。

「最後にはなりましたが、貴方達は将来、主人を決め、仕えることになります。その時にどのようなことが必要になるかわかりません。いざという時に自分の無力さを感じることがないように、この学園で学べることを全て吸収してもらいたいと考えています。当然、私達も全力を尽くしますので、貴方達もより一層の努力で応えてください。応援しています。これで話を終わります。」

さすが、深閑さんといった感じのあいさつだった。楓さんと比べるまでもないな… 比べるだけ失礼か？

でも、今の話は、楓さんの話みたいに聞き流していいものではなかった。これから三年間における最初の指針みたいなものかな、これは。

「これで、私立白麗陵学園従育科の説明を終了します。引き続き、上育科と合同で入学式を行います。しばらくお待ちください。」

さて、真面目な考えはこれくらいにして、原作キャラを眺めてみま
すかね！

5話 入学しているのと大変だよね（後書き）

原作一巻までもう少し、かかります…

あと、何話ぐらいかな？

6話 大地のフラグの立て方ってどうするの？(前書き)

あと、1話ほど書いたら原作に!!!

そう思う作者です…

6話 大地のフラグの立て方ってどうすんの？

……結局、原作キャラは見つからなかった……
高等部は総勢150人程度といえ、式典中にきよるきよるする訳にはいかないから、横目で見たりしたけど、見つからなかった……まあ、後々、出会えるさ！

クラス分けは、1-Cか…原作だと、だいちかある大地薫、セルニアいおり伊織さいきょうともみレイムハート、ひのあきはる彩京朋美と主人公の日野秋晴ひのあきはるがいるはずだよな？秋晴は後から来るけど。

教室に入ると、お嬢様方の雅な会話？が一瞬止まる… やっぱここでは、男子って珍獣扱いなのね… 席は決められているみたいだし、早めに座ろう…

「はい、私語をやめて、席について下さい。」

担任らしき先生が教室に入ってきて、そう発言すると、お嬢様方は急ぐことなく、ゆっくりと見せること重視で席に戻っていく…そこは、急げよ！

「まずは、私の名前ですが……。」

知らん。原作にこんな名前はなかったから、モブキャラだな。俺の心の中の名前は「モブ1」に決定。いつの間にか、先生の紹介から生徒の紹介に移ってる？しかも、どうやら俺の番だ。なんかデジャブ？

「栗須 真二といいます。去年までアメリカに留学していたので、

つい最近の日本国内の話についていけないかもしれませんが、よろしくお願いいたします。」

うん、腹黒さんがなんか思い出したっぽい。うわ、秋晴みたいにならなければいいな…でも、絶対何かしらのアプローチはあるよな…できれば回避したいけど、具体的なプランは…

うん、考えすぎてたみたいだ… もう大地の自己紹介まで行ってる…orz 二人分を聞き逃した〜

「大地 薫だ。よろしく頼む。」

短かつ！しかも無愛想すぎるやる… ちょっと待て、寮の部屋割りを考えたら、秋晴 俺で、大地と同室？早めに、コンタクトを取らないと気まづいまま、俺の新生活がスタートすることになるのか？どうにかして、悪くないようなコンタクトをとるべきだな。それと、注意点は… ISのシャルルみたく早期に男装がばれることは避けるべきだな。下手したら、物語から退場？うわ、ない、ない。少なくとももある程度の関係を築いてから、もう一回考えよう。

〜放課後〜

また、作者がキンクリしやがった… まあ、まずは入寮だな。部屋

はここにだ。

…一応、ノックはしておくか。実際は女子がいるかもしれないわけだし。

コンコンッ

「…ドアは開いてるぞ。」

「ああ、失礼させてもらおう。」

予想通りの大地、もとい薫さんです。しかも、機嫌が悪そうだし、それもそうか、男子と同じ部屋なんだから…

「俺は、栗須 真二。よろしく頼む。」

「…大地 薫。先に言うておくが、僕の生活の邪魔をするな。」

原作通りのお言葉をいただきました… ここまで、邪険にされると結構へこむ…

「そういうつもりはないんだけどな…」

無視ですかね… 鳴かぬなら鳴くまでやろうつホトトギス!!

「ある程度の決め事をしたいんだが、いいか？」

う？反応ありですね！

「…なんだ？」

「まあ、基本的には生活リズムの話だな。就寝、起床時間とか、風呂とか…。相手の生活リズムを知っておくのは、ルームメイトとして必要だと思っただけで、どうか？」

「…基本は早寝早起きだ。風呂は自室のを使わせてもらう。時間については、迷惑ならある程度都合しよう。」

「いや、構わない。俺も基本はそうだしな。」

「…もういいいか？」

「え〜と。あ、あと、お前のことを何て呼べばいい？俺のことは、クリスって呼んでくれたらうれしい。アメリカではずっとこう呼ばれてたんでな。」

「…大地で構わない。もう用はないだろ？……クリス……」

「一歩前進といったところですかね？まあ、原作の秋晴よりもうまくやった自信はあるがな！」

「じゃあ、荷解きが終わったら、飯食いに行こうか？腹が減ったよ。」

「…ひとりで行け。」

「まだ、先は遠い…」

6話 大地のフラグの立て方ってどうすんの？(後書き)

ふと思う。セルニアとESのセシリアってキャラがかぶりすぎじゃないか？

もうまとめて、セルリアでいいかな？

7話 腹黒さんっていじられたことあるのかな…？（前書き）

腹黒さんをいじってみたw

7話 腹黒さんっていじられたことあるのかな…？

あれから、早いもので、原作開始まであと数日ってところかな…
もちろんあの後で、腹黒さんに問い詰められました…

「あの、すみません。」

「なんででしょうか？」

聞くことなんか、一つだろうな… 分かってはいるんだが、できる
ことなら避けたかった。

「私の名前は彩京朋美というんですが、鈴橋朋美という方をご存知
ですか？」

ストレートにきたな… しらばっくれても意味なさそうだし、降参
しとくか

「答えはわかってんだろ？ わざわざ、言わせようとして… YES
だよ Y・E・S！」

「ふん。そういう態度とるんだ？ あんたぐらいだったわよ、最後
までそんな風に接してきた男子は。で、なんでこんなところに居ん
のよ？」

本当の事情（事件）はあんまり触れたくないな… これは俺にとっ
てもだし、あいつにとっても今はまだ知りたくない内容だろうな…
知人の不幸話なんざ…

「なんとなくだ、なんとなく。そういうお前は、……再婚相手が、
こういう感じのレベルだったんだっけか？」

そっぴいなから、軽く回りを見回す。

「そっぴよ。あと、言うておくけど余計な事しゃべったら……」

「分かってますよ〜」

「それならいいけど……いやに殊勝な態度ね？」

「お前に無理に逆らって、おいしい目にあつた男子は今まで一人も
いなかったと、記憶していたが、気のせいか？」

「自分のことは以外にわからないものですね、栗須君？」

なんか腹黒いオーラが漏れてる……一応、謝つておくか？

「すみませんでした。（棒読み）前言撤回します。（ますます棒読
み）」

「本当にいらつく存在ですよね？あなたって？」

“自分のことは以外にわからないものですね、彩京さん？”

「……」

黙って、オーラ倍増！別に怖くはないがな。秋晴と違って弱みは握
られてないから

「まあ、勉強などで困ったら頼ってもらって結構ですよ?」

ここで、貸し(弱み)を作っておこうってか?腹黒を15年間もやってきただけのことは、あるが… 残念ながら情報収集が足りないかな?

「勉強で困ることはないかな?一応、大学は出たし。」

ありゃ、腹黒さんの驚いた顔…レアだな(笑)

「そ、そんな冗談を言うような人でしたっけ?あなたは?」

「おい、先生来たぞ。席に着かんでいいのか?“優等生”さん?」

おゝ、品のある歩き方でゆっくり戻っていったな…
あの感じだと、小学生の時よりも腹黒猫かぶり具合は5割増しってところかな?知らんけど…

授業は、はつきり言って、退屈の一言だった… まあ、当然といえ
ば当然か?大卒だしww

深閑特製、肉体改造トレーニングもラカンボディー(チート)の前

には、「いい運動だったな。」という感想しか出ないし。ちなみに、大地と俺以外は、立つのがやっとな…ぐらいにまで追い込まれたな。

轟については、少し邪魔してさらにきつくしてやった！楽しかった！後悔も反省もしていないし次もやる予定だ！

三家ことミケ（あだ名はもちろんミケ！）には少しコツを教えたりした。話の分かる友人って重要だよな… いまだに、好感度が5/100ぐらいしかない大地ともうまくやれているのは、ミケのおかげかな？好感度が上がらないのは、あのバカのせいだとも分かっているが… あの時に余計な事を…… よし轟を、殺っちゃおうか？

そんなこんなで、秋晴の転入前になったわけだが… 秋晴パニックはどう対処すべきなんかね？いまだに、結論が出んよ。まあ、どうにかなるか？

7話 腹黒さんっていじられたことあるのかな…？（後書き）

次回から、ようやく本編に入ります!!

よって、一回当たりの長さが伸び、更新が遅くなると思います。

気長に待ってください〜 m (——) m

1話 秋晴パニック!? (前書き)

ようやく、原作一巻です。長かった…
それでは、本編どうぞ!

1話 秋晴パニック!?

そろそろ原作第一巻の開始時期だな？と悠長に考えていた、とある昼下がり。今日の授業は何故か半ドンだったし、奉仕活動の予定も入っていない。のんびりした一日になる予定… だった。いつもは優雅という一言が似合うような雰囲気の学園内が騒がしいように感じた。

「……不審者…どこに…。」

「こつちには…いない…。」

どうにも、秋晴が来たと思えないような会話が聞こえるんだよね。ここは、直接情報収集するのが手っ取り早いな。

「すみません。」

同じクラスの上育科の生徒に声をかけた。それなりに面識はあるつもりだ…

「なんででしょうか？栗須さん？」

「なにやら、とても騒がしいように感じますが、どうかなさったんですか？ああ、余計な事を聞いたようなら、申し訳ありません。」

「いえ、どうにも不審者がこの学園内に入り込んだらしくて…。」

「不審者ですか？どのような感じなんででしょうか？」

「話を聞く限りでは、不良のような格好だったと聞いております。」
「ビンゴー！秋晴君じゃ、あ〜りませんか！つまりは、ようやく原作開始ということですかね。」
「なら、まずは秋晴の身柄確保に動きますかな〜！」

…で、どこにいるんだろうかね？あの、見た目ヤンキーは。時間的には、そろそろ女子軍団に包囲されてる頃のはずだが？

「変態発見ですわっ！」

「あれが性犯罪者ですね！？」

うん、見つかった。あれに間違いないな。

「いた、奸賊！」

「…見敵必滅。」

しかも、左は長刀の武装集団、右は和弓の武装集団に囲まれてる…
ちよつとまずい雰囲気だけど、なぜかあそこに入っていけない。
なぜだ？第六感的に危ないという判断が出ているが、この程度の武

装ならたやすくクリアでき……！

「待ちたまえっ！」

こいつがいたか… バカナルシスト…

かさまつりとついでしろう

白い鳩を大量に放出させながら現れたのは、風祭灯一朗：本名大吉

だいきち

だ… 服装は真っ白な袖口や襟首が妙にひらひらしている開襟シャツ…それを、第二ボタンまで閉めず、大胆に胸元を露出… 下は下で、白のベルボトムにエナメル靴という、ある意味個性的なファッション… バラがアクセント！

誰得なんだ？この説明…

「君達。何を騒いでいるのかは知らないが、冷静になりたまえ。」

以外にまともな発言。しかし、彼を舐めてはいけない。

「…原因は、知らない。その粗野な外見の彼がしてかしたことに興味はない。大切なことは、ただ一つだけだ…」

事件の当事者に対して興味が無いとか、なかなか頭に悪い発言だ。そして、早くセリフを言って、退場してほしい…

「この学院で——いや、この世界で、この宇宙で！最も注目されるべき麗しい存在は、この僕！風祭灯一朗ということだよ！」

帰りたい、頭が痛い… どうしてこども痛い発言をここまで堂々と言えるのか…すごいと思うが見習うところは一つもないな。

「——僕が言いたいのそれだけだ。それでは諸君、またいずれ。」

僕の美貌を是非見たい、その美しさを堪能したい時はいつでもそう
言ってくれたまえ。」

ようやく帰ったな… これで秋晴の援護ができるわけだが… 一気に
やる気をそがれたな。もう原作介入なんかしなくてもいいかな？

「ちょっとすみません、通してください—— はい、ありがとうございます
います。前へ……」

おう、腹黒さんが参戦だな。なら俺も行きますかね〜

「ああ、すみません。ちょっと前を開けていただけませんか？」

「朋美かつ！？それと、あんたはだれだ？」

「これは悲しいですね。6年ぶりになる旧友の登場に、“だれだ？
”と言われるとは… 久しぶりですね、秋晴君。」

「この感じは、栗須か！？なんで、お前もここに居やがる！？アメ
リカに行ったんじゃないかったのか？」

「その話は後でいいでしょうが… 犯罪者として疑われているのに、
なかなか余裕がありますね。」

「しまった、そうだった…」

「…ちょっと目を離しただけなのに、どうしてこんなことになって
んのよっ。」

まあ、腹黒さんの意見も当然といえば当然だが、この元お嬢様学校

の男に対する偏見はある程度、考慮してあげようぜ」

「…色々あつたんだよ。」

「その、あなたが抱えている桜沢さんは？」

お、気づかなかつたけど、学園内の合法ロリスのうちの一人…みみな先輩だ！初めて見たな… 意識はないけど。

「あ？この小学生のこと、知ってんのか？」

「や、小学生じゃないから。小学生にも見えるけど、彼女は歴とした高校生だから。」

うんうん。確かに高校生には見えんな。とあるの小萌先生並のミニマムさだし、言動が子供っぽいし。現物の言動はまだ見てないけど…

「…マジか？」

「マジよ。信じられないのも仕方ないけど…って、それどころじゃないわね。そして、栗須君はなんで出てきたんですか？」

いや〜。よく考えてたら、俺ってマジ空気だったね。よし、会話に参加するか！

「秋晴の援護、…もとい弁護ですよ。」

「なら、やるからには、しっかりしてください。」

「はいはい、分かりましたよ。」

「彩京さん、と…栗須さんでしたか？これはどういうことですか？
そこの不審者は貴方達の関係者でして？」

「俺はっ——朋美？」

秋晴の反論は腹黒さんにすぐ遮られたな。いい判断だと思いますよ。
どうせ、不審者（仮）の言うことに耳を傾ける気はないだろうし。

「彼は従育科に転入が決まっている、今日入寮の生徒です。昔、多
少の縁が私たち三人ともありましたので、一応知古ではありません
が…彼がどうかしましたか？」

「そこの愚民、私を侮辱した挙句に痴漢行為を働きましたの。他に
もお二方、可哀相に気を失って…桜沢さんもひどい目に遭わされ
たに違いありません。例え本当に転入生だとしても、所詮は従育科
ですわ。一刻も早く警備部、いいえ警察に突き出すべきですわ！」

「そうですね、しかし先ほどの“所詮は従育科”という発言は、全
従育科生に対する侮辱としてとらえてもよろしいのでしょうか？も
ちろん我々従育科生も人間です。尊敬に値しないご主人に仕える気
はさらさらありませんので、ご了承ください。」

「そ、そのようなつもりは…」

「そのように聞こえただけなので、お気になさらないでください。
知らない間に、そのような評価がつかないよう、発言には十分お気
を付けてくださいませ、“お嬢様”？」

「え、えくと、本来の問題に戻りますね？」

おっと、少し熱くなりすぎたな… 腹黒が少し困った風に割り込んできたし（といつつも、セルニアがいじられているのを見てご満悦なのか、少しにやけてやがるが。）

「それにしても、それが本当なら大変な事態ですね？」

それから秋晴に振り向いて、俺たち以外には聞こえないくらいの声で、

「…ああ言っているけど、本当にやったわけじゃないでしょうね？」

「痴漢行為は事故だ事故。不審者扱いに腹が立って、髪型をからかったら襲いかかってきやがって… それで結果的に押し倒すような形になったんだよ。」

「気を失った二人は？」

「…至近距離で目が合っただけで…倒れられた。」

ドンマイ、秋晴！きっといいこともある…はず？

「…桜沢さんは？」

「成り行きとしか… よくわからんが倒れちまって、放置もできないからこうなっただよ。」

「まあ、嘘ならもう少しマシなことを言っか。いいわ、ここは私たちが何とかしてあげる。」

私たち？俺も入ってる？

「なに突っ立ってんのよ。栗須、あんたも参加よ。交渉とかいやみは上手いんだから、期待してるわよ？」

「…へいへい、分かりましたよ。」

「話を聞いてみましたが、不幸な事故みたいですよ（ね）」
なぜにハモる？

「ッ、そんな戯言を信じるつもりですか！？現に私は胸をつ、誰にもあのように乱暴に扱われたことなどなかったというのに——」

秋晴、うらやましいわ… あんなでかい胸を… ゲフン、ゲフン…
話に戻る。

「——襲いかかってきた、ということですが、その辺りはどうなんですか？」

会話が進んだ。俺って要らない子？

「それでも、その男が不埒な男といことに変わりはありませんわ！疾しいことがないなら、逃げずに堂々と振る舞うはずですね。逃げたという事実が何よりの証拠ですわ！—」

じゃあ、ここらで口を挟みましょうかね？

「ふむ、それも一理ですね。しかし、見ず知らずの方に在らぬ疑いをかけられ、追われるようなことがあれば逃げ出しますかね、私だったら。なにせ、怖いですから。」

ありゃ、周りの生徒がクスクス笑ってるよww お、セルニアの「にらめつける」攻撃！生徒たちは、静かになった！

「私も、栗須君も、秋晴君のこの数年に関しては、何も存じていません。」

「ならっ——」

でも、そうじゃないんだよ。人間の“芯”って奴はそんな簡単に変わるもんじゃない。

「ですがね、小さいころのあいつは、とても優しく、親切で、さっき言ったみたいなの不審者みたいな悪とはかけ離れた子でした。なら、“俺”は無実だと信じます。」

感情的になりすぎだな… 大勢の、しかも上育科生たちの前で“俺”なんていう言葉を使うとは… いつも気を付けてるんだがな。

「当然、私も信じてますよ、秋晴くん。」

腹黒は表面上は優等生だったし、これである程度の信頼が…

「——納得できませんわ。」

「あの辱めは簡単に納得のできるものではありませんわ。」

「おや、フレイムハートさんは責任を取って、婚約しろとおっしゃりたいんですか？申し訳ありません、察しの悪い従育科生で。」

「そんなはずあるわけないでしょう！？私が言っているのは、謝罪と――」

「――あれは俺が悪かった。済まない。」

「なんっ…?!」

ふむ、しっかり謝罪できるあたり、やはり根は変わってない。見た目は激変だが…

何とも言えない空気が流れる中、この状況がまたややこしくなる人物が目覚める…

「……………ふ、にゃ…?……………」こは…?」

なんだ、あのかわいい生物？持ち帰ってもいいんですか？は〜う、かわいいよ〜 お持ち帰り〜 …自重しろ、俺！！

「お、良かった、気が付いたか。」

「桜沢さん、桜沢みみなさん」お目覚めですか？」

腹黒が以外にも本心から安堵してるっばいな。

「にゃ…あ、朋美ちゃん…?」

「はい、彩京です。具合は大丈夫ですか？」

「本当に大丈夫か？急に気絶するから、驚いたぞ。」

うん、このままならすんなり済んだんだろうね… 分かります。

「そっ、そのっ…みみな、男の人に抱き付かれたのは、初めてで、びっくりしてっ…」

……

「……………ロリコン」

秋晴「やっちまったのか！！ 紳士の掟「YESロリータ、NOタツチ」を破って、手を出したのか！？でも、合法ロリータはセーフなのか？いや心が子供なら……」（以下妄想中）

まあ、この会話が全員に聞こえてなかったのは不幸中の幸いって奴だな……

「良かった、フレ임ハートさんも理解してくださると思ってました。」

ああ、この後は… 秋晴の黒歴史発表か… 助けてやりたいが、手段は…ない

「何しろ秋晴くんは小さい頃から素直ないい子でしたから。再会した時は雰囲気が変わっていて驚きましたけど、従育科に入ろうというのです。将来の夢もかわらないままだと思いましたよ。」

「——待て。」

「待ておい、何でそんなこと言い出す必要がある!?!」

あ、秋晴。こっちを見るな。助けようがないんだよ……俺は腹黒に弱みは握られてないが、握ってもないんだ。諦めて、成仏してくれ!

「でも、皆さんの誤解を解くいいチャンスですよ?秋晴くんが無害だと証明するためにも、ここは一つ暴露しておこうかと。」

うわ、どす黒い笑顔。心底から楽しんでやがるな……

「ここにいる日野秋晴くんの、小学生の頃の夢は、」

「待っ——」

「『可愛いお嫁さんになって、幸せな毎日を送ること』なんですから」

……

しばらくの沈黙の後、

「……………ですって」

「……………まあ。」

「……………新妻……………」

「……………お見送りの……………」

「……………愛妻弁当……………」

「……………エプロンで……………」

「……………夫は栗須さん……………」

おい、最後の奴！！なに妄想してやがる。俺にその気はない！！アイ、アム、ノーマル！好きなのは、女の子、かわいければ、なおのことよし！

秋晴が、生暖かい目で見守られる中、「俺って、今回、何かしたか？」と反省していた…

そんなこんなで、事件はとりあえずの解決？を見たわけだ。

その後は、秋晴の入寮を手伝ってやった。さつき助けられなかった、罪滅ぼしに…寮の部屋は、原作と違い秋晴は一人部屋（サイズは他と同じ二人部屋サイズだが）まあ理由は、言わずもがな。俺と大地が同室だからだ。

本人いわく、

「……………人生決めんの、早まったかな……………」

「いろんな事がありすぎて疲れた… 安息の地はここだけかもしれん…」

……………だそうだ。哀愁漂う秋晴の背中を見て、できる限りのフォローを誓った。

「じゃあ、荷解きが終わったら、飯食いに行こうか？腹が減ったよ。」

大地の時と同じセリフを言ってみる。

「いいぞ。で、どこで食うんだ？」

ノリのいい友達だ。ヤンキーみたいな雰囲気さえなければ完璧だったな。

1話 秋晴パニック!? (後書き)

これで、一巻の1話が終了です！

ちなみにアンケートはまだまだ募集中です。よろしくお願いします！

(アンケート以外にもアドバイスなどの感想待ってます！) 作者
のやる気の元w

2話 食事中は騒がしくし過ぎない！これは最低限のマナーだ！（前書き）

忙しい…

ストックを作ってから投稿始めればよかったと、後悔する今日この頃…

開始からたった4日で、お気に入り登録が263件…

こんなになるとは予想してなかった… 精々、10件ぐらいだと…

2話 食事中は騒がしくし過ぎない！これは最低限のマナーだ！

朝だ。俺の朝は早い。事件の後、自分のチートボディーがあまり有効活用されていないことに気が付き、自分の身体能力を把握する意味で始めた鍛錬。これは、いつも早朝（5時くらいから）にやる。

「今日は、5km走の後に何をしようかな？」

常にやるのは、5km走ぐらいで後はその日の気分だ。アンサーカーで自分に合った武術、剣術などの修練方法の答えを出して、実行しているが、本当に必要か、これ？

「キックボクシングあたりの練習…いや、居合抜き…」

節操ないな… せめて武術なのか剣術なのかくらいは決めておくべきだろ…

「う、…うん。」

どうやら、大地も起きたっぽい。大地も朝は早い。原作では、同室に男子がいるために寝不足になっていたが、そこら辺には変わりはないようだ… どうにかしてあげたいが…

…といっても約2か月は同室だったので少しは慣れてきてはいる…はず。それにしても、それでも尚この時間に起きるとは。

「おっす、おはよう大地。」

「ああ、おはよう。」

この2か月でなんとか普通の関係を築けたと思う。自分の頑張りを評価したい！

「じゃあ、俺はトレーニングに行ってくるから。」

「…行って来い。」

次は、もう少し優しい言葉をかけてもらえるように頑張るかな…

トレーニングの内容？企業秘密だ。ただ、言えることは、俺の肉体はチートだということぐらいだ。（フルマラソンでも1時間はかからないかな？）

部屋に戻ろうとすると、扉の前に秋晴が。何の用だ？

「おつす。どうしたんだ、秋晴？」

「いや、このネクタイだけだよ、どうやって結べばいいんだ？」

「ああ、アスコットタイか。結び方なら後で実演しながら教えるから、あと20分…いや10分後にまた部屋に来てくれ。」

「分かった。」

さて、急いで準備しますかね？大地に気を遣いながら。

「で、ここをこうして…ほら完成だ！」

「なるほどな。いや、ありがとう。お前のおかげで助かった。」

「良いつてことよ。で、朝飯は食ったのか？」

「まだだけど、時間的に厳しくないか？」

まあ、授業開始20分前だと少し厳しいな… しょうがない食パン
でいいか。

「こんなものでよければ、出せるが？」

「十分だ。お願いします。」

「ならさっさと食って、行こうぜ。」

— 食事中…

「ところで、お前の部屋って誰との相部屋なんだ？」

「『大地』っていう、俺と同じ1-C所属の生徒だよ。少し無愛想だがいいやつだぜ。」

「へ。そういえば俺はこのクラスになるんだ？」

「いつしよなら、いいな。」

「だな。」

おっと、ゆっくりしすぎたか？あまり時間に余裕がないな。

「っと、こつゆっくりもしてられないぞ。お前は、職員室行きだろう、秋晴？」

「そうだった。で、どこにあるんだ？」

「それぐらい確認しとけ。職員室は、こつから見える、ほら、あそこの一階だ。」

「ありがとよ。じゃあ、先に行くわ。」

「行って来い。」

さて、俺も教室で秋晴を待ちますかね？どうせ原作通りに1-Cだろっし。

予想通り、秋晴は1-Cだった。クラスの大半（特に上育科生）は怖がっていた…

午前中はつまらない一般科目の授業。世界史とか数学とか… 知ってるし、はつきり言って先生よりもうまく教えられる自信がある。

（アンサーカー、万歳！）

で、その昼休み。飯は秋晴と食べる予定だったので、同席した。（周りの席に誰も寄り付かなくなったが…）

「……肩すかしもいいところだ」

少し、気の抜けた秋晴。

「どっついう意味だ？」

おそらく、普通の授業に驚いたんだろうが。

「……執事の道はどこ行ったんだっつーの……」

「さあ、果てしなく遠くにありそうな気がするけど……」

セリフを取られた… 腹黒、おい！

「あ…？…って、お前かよ。」

4人掛けの席だったが、隣に座ってきたぞ。距離は結構あるけど…

「何度見ても意外ね。その制服、割と似合ってるじゃない。」

「ちつとも嬉しくねえ。」

「だろうな… 普通の意味で、制服が似合ってるなら問題なかったんだけどな。」

「いやいや、本当に似合ってるわ。どこの安物フィルムから出てきたのかわかってくらい、三流のマフィアの子分っぽいもの。」

「例えがうまいし、辛辣だな… せめて、もうちょいオブラートに包んで… 無理だな。さっきの表現が、ピツタリすぎる。色あせた茶髪と、ピアス代わりの安全ピン×3。左まぶたの上の小さな傷痕っていう危ない風体に、ウェイターみたいな服のコラボは、ある意味では完璧だな。」

「何の用だ、この疫病神。さっさと俺の前から失せる消える成仏しろ。」

秋晴。そんなこと言っていると、逆襲食らうぞ。

「うーん、疫病神って言いながら成仏しろなんて言葉を使うのは頂けないわね。減点よ、ボンクラ執事候補生の日野秋晴くん。」

「ケンカ売ってるのか、おい。」

「あら、売ってきたのはあなたでしょ？わたしって買い専門なのよ。安い女じゃないから。」

いい加減にしてほしい。空気になってるのもつらいとこだが、この上なくうっとおしい。

「はいはい、お二人ともそこらへんになさったらいかげすか？ 公共の場でこのように醜い争いを続けるのは、淑女としても、執事候補としてもとても残念な行為ではありませんか？ それとも、それを差し置いてもすべき内容でしたでしょうか？」

「……………」

ようやく静かになったか。食事の場ぐらい穏やかな会話をしろっつーの。

「に、にしても拍子抜けだな。普通の授業だなんて……………」

「当然じゃない。午前中は上育科も従育科生も一緒に、普通授業。そうしないとちゃんとした高校の習得科目が取れないじゃない。」

「……………」

まあ、この学校は私立とはいえ“学園”だもんな。専門学校とは違う。普通の学校ともかなり違うが……………」

「それにしてもあなた、どうして時間割も知らないのよ？ 深閑先生は教えてくれなかったの？ ルームメイドの子は？」

「……………」あのメイド服の先生は無能事務員に訊けって言うていたが、昨日は色々とありすぎて聞き忘れちゃったんだよ「誰かさんのせいだな。」

“誰かさん”っていうところがいやに強調されてたな。また言い争いでもするつもりか？ よろしい、なら私が、テーブルマナーというやつを直々に恐育してやろう！

「あら、痴漢扱いされてた不審者を救った女神様しかいなかったはずだけど？」

「…ところで、お前らは、俺の話を、しっかりと、聞いていたのか？」

少し怒気を含めて低い声で話す。

「…すいませんでした。」

「飯を食うところにまで、もめ事を持ってくるな。ご飯は楽しく食べる！これが基本だ。」

「はい。」

ホントに反省したんかいな？ 母さんはこういうことにはうるさかったな…

「でだ。ルームメイトはいない。男子が奇数だから必然的に後から入った俺が一人になったんだよ。」

「それもそうか。まあ、困ったときはここにいる栗須くんに頼りなさいな。」

「そこは、『私に』っていうべきだろ… まあ、言われなくとも秋晴は友達だし、助けられるところは助けるさ。」

これは、本心だ。秋晴は見た目は悪いし、ぶっきらぼうなところはあるが、いい奴だからな。

「ああ、すごく助かる。やっぱり頼りになるな、栗須は。小さい頃も助けてもらってばかりだったっていうのに… ちよっと申し訳ねえな。」

「お互い様さ。その代わりに困ったときはHELPを出すかな。」

「お前が『助けてくれ』っていうセリフを吐く場面が想像できない無理だ。」

「まあ、基本的なスペックは悪くないと自負しているが？」

「そつえば、聞きそびれていたことがあったんですけど。この前、栗須君は大学を卒業したって言ってましたが、流石に冗談ですよ？」

ああ、そんなこと言ったな。確かに… あん時は、確か先生が来て話が途中で終わったんだっただか？

「いや、留学先のアメリカでスキップして一応大学卒の資格は取ったぞ。」

「「なっ！！」」

「まあ取ったのは、13歳の時か？研究してたから、帰国が少し遅くなったが。」

「なんで、就職とかしないんだよ！というか、何でこんなところで学生をやり直してんだ！？」

秋晴、おもしろ。驚きすぎだろww まあ、理由はぼかしておくか
： まだ事件の説明は早い気もするし。

「周りが、年上ばかりで研究詰め。まともな学生生活なんか送ってないんだよ。人生経験も足りないし、ここで特殊な体験をしておくのも俺の将来のためになるだろう」ということにしておいてくれ。

「？」

いまいち納得してないな。当然か。

「フフン、貧相で粗野な転入生と話をしている物好きな上育科生がいるかと思えば：彩京さん、貴方でしたの。」

あ~~~~~！何でこうもうっとうしい奴が来るんだ！？俺に静かに飯を食べる権利はないのか？まだ、注文したカレーは来てないが。

「あら。」

「誰かと思えばフレイムハートさんでしたか。わたしよりも先に教室を出て行ったので、もう食事中かと思っていました。もう食事は終わったんですね。お腹を空かせた犬や馬じゃないんですから、早食いはよくないと思いますけど？」

「ッ、誰が犬や馬ですって！？まだ食べ始めていませんし、そもそも注文した料理は届いておりませんわよ！」

「あら、それじゃあフレイムハートさんは食事前に欠食児童のように物欲しそうな顔でうろつくと彷徨っていたんですか？あまり行儀が良い行動とは言え…！」

懲りないあほに、さらに怒気を込めた視線を送る。次やったら、何をしてあげましょうか…？

怒りと若干の疑問（腹黒の言葉の最後が引つ掛かるらしい）が入り混じったような雰囲気のセルニア。その怒りの矛先は、秋晴へ。

「ちょっと、そこのボンクラ庶民！」

「なんだよ…。」

「貴方、この私が中傷されているというのに、何をのんびり傍観してるんですの！？」

「いや、んなこと言われても。というか、栗須も傍観してただろ？」

「そ、それは…。……あなたは口答えするんじゃないですわ！」

俺に対して話しかけるのを、少し躊躇してるみたいだな。主に昨日の失言が原因で。

「うっわ、物凄い無茶言うなあ前…。」

「従育科生にお前呼ばわりされるほど、私は気安い存在ではありませんわ！セルニア様と呼びなさい！」

もっと深い仲だったら、この二人みたいに注意（という名の脅し）するんだけどな…

「うっわ、お嬢様とは言え、様付けとか痛々しいな。」

「なっ、私のどこが痛々しいというんですの?!」

「あー、はいはい……………ったく、うるさいドリルだな。」

「誰がドリルですって!?!言わせておけば、粗野な下人の…『いい加減にしてくれませんかね』なっ!」

ドリル…いい加減うるさい!

「先ほどは、秋晴君にも言いましたが、このような場所で罵り合っのが淑女としての務めとでもいうつもりですか?ミス、フレイムハート?」

「い、いえそのようなつもりは。」

「でしたら、席でおしとやかに、歓談を楽しみつつ料理を待つのが普通ではありませんか?間違っても、憤怒を表して、罵詈雑言を言い合っるのは頂けませんね。」

「わ、分かりましたわ。今日のところは、席に戻らせてもらいますわ。」

「そうなさるのがよろしいかと。お嬢様。なんでしたらエスコートいたしますしょうか?」

「結構ですわ！」

うん、ようやく帰ったな。早く静かに飯が食いたいよ…

「栗須… お前の毒舌はいつからなんだ？小さい頃はそんなこと言
つてなかったはずだが…」

意味が分からん。正論を言っているだけのつもりだが？

「正論を言っているだけだが、何か問題あったか？」

「いや、正論なんだがな… まあいいや。」

ふむ、これで安心して飯が食えるな。

そう、俺はこの安心で、次に起こることをすっかり忘れてたんだよ
… 原作と結構違ってたし。確かまだ、セルニアVS秋晴の言い合
いは続いていたはずだったから…

― 続く。

2話 食事中は騒がしくし過ぎない！これは最低限のマナーだ！（後書き）

この後続きますよ〜

ぶっちゃけるとカレーです。エロが少し入れればいいな… 書けるかな？

ヒロインについてですが、大地&深閑は仮決定しました！

まあ、一人ヒロインなら「アンド」ではなく「オア」になるんですが（^ー^；）

それと、ドリルと腹黒は扱いに困るので秋晴に丸投げします。というか、あの三角関係を崩して、いい内容が作れる自信が…

すみません、なんせ自分、初心者ですから。…反省してます！

それ以外のヒロイン希望はまだまだ受付中です！よろしくお願います！

3話 保健室って聞くと、いやらしいことを連想する作者は、ダメ人間だと思

初めて主人公の栗須以外のSideをやってみました。

初の試みなので、改善点があればコメントしてください！

3話 保健室って聞くと、いやらしいことを連想する作者は、ダメ人間だと思

前回のあらすじ：主人公の栗須は、食卓で騒がれるのが大っ嫌いな子でした。

…おい、あらすじ適当すぎだろ…？

ん？なんか変な電波を拾ったな…　ところで、そろそろ飯は来ないかな？だいたい15分以上たつたんだが…

ちよつとイライラしつつ待っていると、ようやく頼んだ料理が来たみたいだ。…運んでいるのは、四季鏡じゃないか？死亡フラグか？

「きゃうあ~~~~っ!？」

やっぱりこけた！そして飛び立つスープカレー＆ナン。原作ではカレーが1皿とナンが2つだったが、秋晴が俺に合わせて注文したのでさらに倍！カレー2皿とナン4つ…　いやこつちに飛んできたけど、そこは原作と同じように秋晴に飛んで行けよ!？

「くっ…　しょうがない。」

まずは人外じみた速度でナン×4を右手の人差し指の先に重ねる。次に、左手の掌の上と腕の上に、遠心力を利用してつつスープカレーを一滴もこぼさずにキャッチ！

…決まった！完璧だ。これでカレーの熱さで苦しむことはな…

「ど、退いてくださ〜い!？」

「ゲフツ。」

変な声が漏れた。どうやら四季鏡トラップは二段トラップだったらしい。

こけてカレー＆ナンが飛ぶ 俺が見事にキャッチ その間に四季鏡が立ち上がる 再度、派手に転ぶ（というか飛ぶ） 俺に直撃 俺が押される形で飛ぶ

…こつという経緯で、俺は空中にいた。いつもなら1回転して着地すればいいのだが、不幸なこと空中に浮いている現在でもカレー＆ナンは手の上でキープした状態… ここで回転しようものなら、周りに被害が出る。流石にこぼさないぐらいに回転すると着地が… 下手したら、頭からドーンかな。 しょうがない、このまま落下して受け身で衝撃を弱めればなんとかなるは…

…なんで落下地点に大地がいる？ 気配察知は得意のはずだが？ 気付いてないみたいだ。これぞ、四季鏡クオリティー！ というか、ギャグ補正の一種か？ そうか俺はギャグ要員だったのか… って、ぼけてる場合じゃない！ どうやらようやく気が付いた大地が回避するのは不可能。俺も軌道は変更できない。つまりは、衝突ですね

ドコン、ピューン、ゴロン、ペチャ、バシャーン…

アツ~~~~い！！！！ いや〜背中が、背中が焼ける~~~~

一応、上の音を解説すると、大地に衝突（地面という意味ではない）、カレー＆ナンが発射！、転がりあう二人、俺の背中にナンが到着、カレーもついでに到着！

「ぐ、ぐあ……」

「お、おい。大丈夫か栗須？」

「あ、秋晴……冷たい水を背中にかけてくれ……」

「お、おう。ほら、これでどうだ？」

「あ、あ……。……た、助かった……でも、これは着替えないとまずいな……。午後の授業にも出れない。」

あ、深閑だ。どうやらこの騒動を聞きつけたみたいだな。行動が早いな。

「何があったのですか？」

「いつもの四季鏡のドジの結果です……」

これで深閑には通じるはずだ。というか学園の高等部の1年ならほとんどの奴が理解できるはず。すでに割った皿の数とか半端ないから……

「そういうことですか？しかし、なぜ大地さんがあなたの下敷きになっているんですか？」

へ？そういうえば大地を下敷きにしてしまったが……！！

「わ、悪い大地！悪気があったわけではないんだ……っておい、意識あるか！？」

「ちょっと見せてください、栗須さん。これは、単なる気絶ですね。すいませんが、栗須君は大地君を保健室まで運んでくれませんか？」
男子生徒として学校に通っているとはいえ、俺に頼むか、普通？性別上は、女子だろ？」

「ええ、まあ一応背中具合を見たかったのちょうどいいですが… 本当に俺でいいんですか？」

と、深閑以外の周りの人に聞こえない程度の声で話す。

「？…！もはや、気づかれたのですか？大地君の秘密に？」

「…。ええ、まあ。でも、本人には内緒にしといてください。何か特殊な理由でもあるんでしょうから。彼女が、俺に打ち明けるまでは。」

「分かりました。生徒自身に関する隠し事を本人にするのは、あまりよろしくないのですが、今回は例外ですね。」

「ありがとうございます。じゃあ、運んできます。」

「お願いします。」

よっこらせつと。む、軽いな。この低体重からどうやってあの運動能力が…？鍛錬の結果だろうか？

—— 大地運び中

失礼な話だが、女子をおんぶしたのに役得感が薄いな… 真っ平ら

な上にさらしを巻いているんだっただか？男の子をおんぶしてるみたいだ… やめよう、この話題は… 本人が一番悩んでるかもしれないし…

「お、ここか？保健室は。」

いや、間違いなく保健室だ。そうプレートに書いてあるし。

「よいさ〜！」

足でドアをスライドさせて、部屋の中に入る。

「あれ、保健室の担当はいないのか？」

どうやら無人のようだ…

保健室に男と女が2人つきり… やめよう… 言ってみなしくなってきた。気絶した女子を襲うほど落ちぶれてないし。

「よいしょっと。勝手にベッド借りたけど問題ないよな。大地は単なる気絶らしいし、今のうちに火傷になってるか確認でもするか？」

… 大地は多分起きんよな？

S i d e : 大地

……。ここはどこだ？確か僕は食堂で奉仕活動をしていたはずだが……？何でこんなところで寝ているんだ？

……。ボンツ！

そ、そ、そういえば……！く、栗須がいきなり飛びついてきて、そのまま押し倒されて……！

く、栗須はどこだ！？もしかして、僕を無理やりベットで……！！！！

……。いない？というか見当たらない……

冷静になってみると、栗須は僕のことは男だと思っているはずだ。そんな気があって人の前で襲ったのではないはずだ……

それは2か月も一緒の部屋で過ごして感じたことを考慮しての結果だ。栗須は、気が利く。僕のプライバシーに必要以上に関わらないし、裸同然でうろついたりなんてしない。そうだ……栗須はなかなか良い奴だ。それでも、慣れるまで布団の中で眠れない日々が続いたんだが……

「あゝ、やっぱり赤くなってるかゝ。」

む、栗須の声だ……どうやらあのカーテンの向こうにいるらしい。とりあえずの事情でも聞いてみるか？

サツとカーテンを横にスライドさせ開ける。

……!!!

な、なんで栗須は上半身が、は、は、裸なんだ〜!?

S i d e : 栗須

火傷していないか確認するか… 一応、カーテンだけはしておこう。
気絶しているとはいえ、女子に半裸を見られるのは俺も恥ずかしい
し。

いいところに、鏡があるじゃん。えっと、まずは服を脱いで… く
そ、えいっ!濡れた執事服は脱ぎにくいな、おい。ようやく脱げた。
えっと、もろにカレーがかかった部分は… っと。

「あゝ、やっぱり赤くなってるか〜。」

というか、ラカンのチートボディは?アンサートーカによると…
ラカンの身体能力って頼んだけど、運動能力って意味にとられた?
いい加減だな、神様って…

しょうがない。そこまでひどくないし、オロナンでも塗っておくか…

シャツ

ん？か、カーテンが…　もしかして、いや、もしかしなくても大地が起きたのか？

Side：大地

栗須の半裸に悲鳴を上げなかった僕は、なかなか耐えたほうだと思う。

「な、なんで貴様は服を脱いでいるんだ！？」

「い、いやこれには理由が…」

「それに僕のことをいきなり押し倒しただろう！？どういつつもりだ！？」

「だから、それにも理由が…」

……

「…説明しろ。」

「押し倒したようになってるのは、四季鏡にふつとばされて飛んだ先に大地がいたからだ。服を脱いだ理由は、火傷の治療だ。」

火傷だと？本当なのか？

「…火傷？本当か？見せてみる。」

「分かったよ。」

そう言つて、栗須は反対を向く。…確かに背中の一部が赤くなつてゐるな。栗須を疑つてしまった…。いい奴だつてわかつてたのにな…

「で、なんで早く治療しないんだ？」

「背中に薬を塗ろうと思つたんだが、手が届かないんだ…。」

「なら、僕が塗つてやろう。」

僕は何の気なしにこう言つた後で、これからする行為について考え、すぐに後悔した…

.....

「大地、まだなのか？」

「い、今やろうとしていたところだ。」

「そうか、なら早くしないと授業に間に合わなくなる。急いでパッパと終わらせようぜ。」

手に薬を付けて、ベッドにうつぶせになる栗須の背中の火傷に塗る。う、かなり鍛えられているな。授業でも、栗須は僕よりもいい動きをしている。何者なんだ、こいつは？と思った時期もあったが、おそらくは生まれ持った才能と努力結果なんだろう。こいつが朝、静かに部屋から出てロードワークに出る姿を毎日のように見ているからな。

「大地？まだ塗り終わらないのか？」

ハッ！僕が薬を塗るのに夢中になってる！？いや、そんなわけはない！絶対はない！

「こ、これで終わりだ。」

「ありがとうよ。」

「別に、大したことをしたわけではない。」

「礼は素直に受け取れよ。」

！！いきなり頭をなでられた！何をするんだこいつは。でも以外に気持ちいいかもしれない…

「おっと、急がないと間に合わなくなるぞ。急げ、大地。」

む、頭をなでるのは終了か…　って僕はいったい何を考えているんだ！？

「……あ、ああ、そうだな。僕は先に行ってるからな。」

「分かった。」

その日から数日の間、栗須の半裸の姿や頭をなでられたことを思い出して、顔が赤くなったり、また寝不足になったりしてしまったのは、女として仕方のないことだと思う。

S i d e : 栗須

…よく考えると、俺は女子に半裸を見せて、それどころか触らせたのか。大地に恥ずかしいことをさせてしまったな。まあ、あの雰囲気

気ならあまり気にしてなかっただろうけど。おっと、早くしないと次の従育科の授業に遅れてしまう！！

従育科の授業は、念のために見学という形になったが、いつもより大地の動きにキレがなかったように感じた。寝不足か？原作の寝不足を知っているからいつも心配だ。原作通りなら、時間がたてばましになっていたはずだから、おそらく問題ないか？

今日のこと、まともになりつつあった睡眠がまた悪化したことなど、全く知らない栗須であった…

3話 保健室って聞くと、いやらしいことを連想する作者は、ダメ人間だと思

初の主人公以外のsideは大地でした。

∴口調とかキャラの崩れ（おもに大地）は作者の全責任ですorz

でも、書きたかったんです。

後悔（公開）はしているが、反省はしていない！ すいません、寒いギャグで∴

次の更新は、木曜までにしたいですね。プール内での授業をメインで。

あくまで予定なので、曜日も内容も責任はとれません∴（^| ^ ;
）

4話 バタフライってきついよね…（前書き）

更新遅れました…

昨日は家に帰ったら12時前で、疲れていたなので更新をあきらめました。

今週、来週は忙しいけど、極力頑張ります！

4話 バタフライってきついよね…

俺の朝は今日も早い。原作によると腹黒は低血圧なのに無理やり起きているらしいが、そんなことせずとも勝手に目が覚める。いつも通りのトレーニングだ。

ん？なんでラカンボディーなのにいまだにトレーニングをやっているのか？確かに最初は確認だったんだよ。つい最近は、体の動かし方の勉強中だ。せつかくの能力も使い切れなければ、何の意味もない。

午後の授業だ。昨日は見学だったが、いつものヘンテコ授業ではなく、執事としての正しい動き方の説明というまともな授業だった。話は聞いていたから何の問題もなかったが。

今日は元通りのヘンテコ授業… 火傷は一日でほぼ完治。プールに入っても問題ないという判断を、保健医からもらった。まあ、今日も頑張りますかね。

「——ちょっと待ってくれ。」

秋晴がなんか不満そうだな… まあ、昨日がまともだったせいで面喰っているんだろう。しょうがないと思うが、諦める。それしか言えない。

「……説明してくれ。意味不明すぎるぞ、これは。」

まあ、執事服を着てプールに集合。普通に考えたら、意味不明すぎるな。深閑さんは何をやらせるつもりなのか、予想はついているがな。

「昨日ガイダンスを受けたと思いますので、その言葉を思い出してみてください。それでは、これから授業内容を説明します。」

深閑さんの言葉から察するに、秋晴の代わりに俺がカレーを受けたから、秋晴はガイダンスを無事に受けれたのか。まあ、さっさと本題に入ってもらいたいな。

「本日からの内容ですが、題して『困った時のいん・ざ・ぷーる初級編』です——総員、そのままプールに入りなさい。」

「なんだそりゃあつつつ!?!」

「服着たままプールに入るって……それとあのガイダンスとどういう関係があるつつーんだ?!」

「従育科の授業は、座学も実技訓練も制服のままで行うのが基本です。いざという時に、一々着替えてなどいられないでしょう? 示現流の修練にも似たような逸話があります。」

示現流なら、開祖が平服での修練を推奨したんだっただかな? まあ、

執事にとっての平服は、執事服か？それにしても、秋晴のつつこみが長くて暇だ… 空が青いな…

「つまり、です。大切な主人がクーラーザーから落ちるようなことがあったとしましょう。テロリストによって船が乗っ取られ、やむなく脱出するシチュエーションでも構いません。共通するのは一秒を争う事態――その時に脱衣の暇など無い、ということです。服を着たまま泳ぎ、安全な場所まで運ぶなり救助を待つなりできなければ、その時後悔するのは貴方ですよ。」

「いやそんな時来ないだろ普通!？」

うるさいな… あ、鳥だ。平和だな」

「普通でないことが起こる、それが上流社会です。常識に囚われていては成長はなく、またいざという時に備えてこそ一流の執事、一流のメイドです。」

「けどよ――」

「さあ――』いざ』という時です。」

秋晴は、プールめがけて高々と放り投げられた。

「それと貴方もです、栗須さん。先ほどは、呆けていましたね？」

俺も発射された… 空中で三回転しつつ半ひねりを加え着水。完璧な着水は水しぶきがほとんど飛び散らない。自己採点は100点中95点だな。マイナス5点は少し余裕がなかったところかな？秋晴は、0点つと。美しさのかけらも感じられないな…

「おい、秋晴。大丈夫か？」

「な、なんとかな。お前も投げ込まれたのか？それにしても平気そうだな。」

「まあ、これくらいは余裕だったな。あと15mくらい高くからだつたらもっとナイスだったかもな。」

「な… やっぱりお前はおかしい奴だな。」

「？」

意味が分からん。

「では、各自思つのように鍛錬を始めてください。勿論、準備運動を怠らないように。」

深閑さん、優しい。俺ら以外には…

「じゃあ、俺は泳いでくるわ。じゃあな、秋晴。」

S i d e : 秋晴

やっぱりあいつは変だろ… 何でこんな泳ぎにくい恰好でバタフライなんだよ… しかも俺の本気のクロールより速そうだし…

「まあ、俺も頑張らないとな。」

……ちつ、歩いているだけで辛くなってきた。あれから10分…ただ歩き続けるだけでこんなにつらいとは。下手な筋トレより地味にキツイ。まだあいつはバタフライ… っておい!!あの速度なら世界新が狙えるだろ!??どう考えてもやっぱりおかしい。

「そんな気張ってもじゃ、ないで?適当なところで休まんど。」

「……なんだ、お前?」

「いやいや、あやしいモンとちゃうで?ほら、一緒に整列してたやん。すぐ後ろにいたやんか。もしかして気づかんかったん?うわあ、そいつはシヨックや……!まだオーラが不足してるなんて!」

なんだ、この違和感のある関西弁をしゃべる奴は？小物臭がするな…

「そんな怖い目えせんでもちゃんとして紹介するわな。オレは轟慎吾、八月八日生まれのナイスガイや。身長は…ゲフツ！」

なに！轟だったか？まあ、あいつが飛んでった。横から何か来たが… っておい、栗須かよ！？

Side：栗須

「なんか大嘘をついている奴がいる気がした。具体的には、全くナイスガイでもないのにそう偽った奴がいたような気がする。」

「そ、そうか。さっき飛んでった奴が自分はナイスガイだって言うてたか？」

おお。予感的中したな！

「それだな。あいつは、轟。変態、バカ、カスと三拍子そろったゴミだ。変態という名の紳士ともいう。」

「……。お前、あいつのこと嫌いだろ？」

「生理的に無理だな。あの関西弁キャラは作りものらしいぞ。オーバックスに、銀縁メガネ… すべてキャラづくりだそうさ。そういう本来の自分に自信を持ってない奴は嫌いだ。」

俺はありのままが一番だと思うよ。

「まあ、お前の言うことも理解できるな。」

「それと、年中頭の中がお花畑なのも理由の一つだな。下心、特に女がらみだな、これが異常なまでに多い。」

「…。何かいいところはないのか？」

「執事候補としては結構優秀だな。俺には劣るが。」

総合すると、従育科内で5位以内には入るかな？

「栗須君に比べたら、みんな劣っていると思うけど…。」

「おう、ミケか。」

いつの間にかミケが近くまで来てたみたいだな。

「あの、僕は三家満といいます。その…：…よろしくお願いします。」

「ああ、俺は日野秋晴だよろしく頼む。」

常識人ていいな… この学園に来てから、そう思うことが多いのは気のせいかな？

「ところで栗須？もしかして個人の判断で休んでいいの？」

「ああ、そうだぞ。各自思うように……って最初にも言われただろうが。」

納得したみたいだな。

「なら、栗須も休憩か？」

「いや、そのつもりはなかったが。まあ、ちょうどいいし休憩しよう。」

「そういえば栗須君はさっきまでどこにいたのかな？姿が見えなかったんだけど……？」

「こいつはさっき一番奥で、バタフライしてたぞ……。」

「……なんで？」

「知らん。本人に聞け。」

別にいいじゃん。できるんだから。

「まあ、クロールだと少し負荷が少なすぎるからな。バタフライでちょうどいいくらいだ。」

「「……」」

なんだその顔は？人外を見る目だな……

「と、ところで慎吾君はどこにいったか知らないかな？さっきまではいたんだけど。」

…？まだ復活してないのか？あの変態ならすぐ回復だと思ったが。

「さっき、栗須が高速クロールで泳いできて、追突されてどっかに飛んでったぞ…」

そこ！呆れ顔で言わない！

「へ、へへ。そうなんだ。」

あ。あれ轟じゃないか？生きてやがったか…

「おいあそこに轟が…って、あゝあ。」

深閑さんにビート板投げられてまた沈んでるし。ざまあ。

「な、何をやったのかな？慎吾君は。」

「大方不埒な考えか行動でもしてたんだろ。どうでもいいや、あの変態は。」

お、大地だ。って、あれ？いつもの大地らしくないな… 一生懸命というよりは、がむしゃらって感じかな？

大地は前回のことを考えないように、一心不乱に泳いでいます。主人公は気づいてませんが…

それにしても、今日はなかなかいい訓練だ。もう一回泳いでこようかな？と考えていた時に、ドリルと腹黒の姿が見えて残念に感じたのはしょうがないことだと思う。もめ事は起こすなよ……？

次回に続く。

4話 バタフライってきついいよね…（後書き）

ということと特に面白いわけでもない普通の話です。
次回あたりからまたもやオリジナル展開の予定です。
四季鏡は次もフラグ誘発剤として使われます（たぶん）。…便利だ
な。

土曜までには必ず更新します。今日できればいいな。

5話 轟はとりあえず殴っておこう(前書き)

前回のあとがきの約束を破ってしまいました…

四季鏡を使ったフラグ立ては次回に延期です。

すいませんm(――)m

5話 轟はとりあえず殴っておこう

前回のあらすじ：服を着ながらバタフライ。いい運動になるな。

あらら、やっぱり原作通りにドリルと腹黒はプールに来るのか。そのほかにも数人ほど上育科生がいるが、モブキャラだな。お、秋晴が露骨に嫌な顔をしたな。

「朋美に、ドリル女……。」「

「どうした、秋晴？あの二人に何か問題があるのか？」

少しにやにやしながら言ってみる。

「お前、分かって言ってるだろ。一人は因縁つけてくるし、一人はからかって楽しんでくるんだぞ！？逆に問題ないところがないぐらいいだ！」「

「そうか。頑張れ！秋晴」

「……。」「

いや、腹黒さんが秋晴をからかうのが好きな理由が少しわかったかもな。楽しすぎる！リアクションがいいからか？

「私たち、授業の様子を見学に来ましたの。別に、構いませんですよっ。」「

「勿論です、フレームハートさん。他の方々も、どうぞ氣を楽に。私は監視の役目があるので案内等は出来ませんが、ご自由になさって構いませんので。」

「……なんや、氣に食わんな。」

「貴様いつの間に復活した……？もう一度、はるか遠くに逝きたいのか？」

「……。シヤレにらんで、それは。栗須の能力ならしっかり逝けるやろうな。」

「大丈夫だ、問題ない。苦しいのは一瞬だけらしいからな。」

……。轟が静かになった。なんて幸せなんだ。ところで、よく苦しいのは一瞬だけって言うけどいったい誰の体験談なんだろう？死んだ人しか苦しさは分らないか？

「栗須、落ち着けよ……俺は轟の気持ち分かるぞ。」

「そ、そうや！こんな口惜しいことがあるかいな！？」

秋晴……。これにまともな思考を期待するのは無駄だとおもつぞ。

「なんで水着とちゃうねん！？上育科生のお嬢なんやから、こっ、隠す氣があるのか無いのか分からんギリギリ感漂う水着での登場ち

「やうん、ゲフ!? くほはあっ?!」

「まずは、俺のアップパーパンチ! 轟の体が宙に舞う。さらにそこに追撃のビート板アタック! (by深閑) 決まったな... そしてグツジヨブです深閑さん!

「で、秋晴は轟の気持ちができるらしいな... 残念だよ、本当に。親友をこの手で恐育しないとイケないとは...」

「ち、ちよつと待て! 全然理解できない! だから、恐育の必要はない!」

「そうか。なら、いいんだ。で、轟のカス具合は分かったか?」

「ああ。なかなかカスだな。それにしてもお前のアップパーの破壊力、高すぎだろ...」

「そうか? これでも死体が出たらまずいから手加減して9割9分殺しにとどめておいたつもりだが?」

「ほとんど死んでるじゃねえか!? 轟は大丈夫なのか?」

「ギャグ補正があるから、おそらく明日にはピンピンしてるだろう。たぶん。」

「おい、現実世界にギャグ補正なんか存在しないからな...」

「まあ、あんなアホは放置してもOKだろ? というか、あれらが来たぞ。」

「……はあ。」

「ごきげんよう、秋晴くん、栗須くん。少し見学しに来てみたんですけど、休憩中ですか？」

「あー、そんなところだ。だから見て楽しいようなことはないから、さっさと帰ってお茶でも飲んでるほうがいいと思うぞ。」

秋晴よく。奴はそんなこと言っただけ、はい、そうですか。』って言うようなたまではないだろ…

「忠言はありがたいんですけど、お茶はもうしてきたの。まだ授業はしばらく続くみたいですし、いつまでも休憩している訳ではないでしょう？だから少しぐらい退屈でも平気だから、気にしないでね。」

ほら、顔に退屈させんなよって書いてあるぞ。

「フン…彩京さんがどうしても言いますので来てみれば、プールで水遊びなの？それも服を着たままだなんて、正気を疑いますわ。」

毎回、言い方がカチーンと来るやつだな、ドリル！

「セルニアさん？勘違いがありますが、服を着たままプールに入り水難事故に備える訓練が、普通の小学校で行われることもあるらしいですよ。そう考えれば、この授業はいたって普通の授業とも言えますが。何か問題でもありましたでしょうか？」

正気を疑うとか言われたが、俺は別にこの授業はそこまでおかしい

と思わないんだよ。第一、真面目に授業内容を考えてくれた教員に失礼だろうが。本当に真面目だったかは置いておくが…

「そ、そう言われればそうですね。」

なんか、苦手意識でも持たれたか？まあ、別にどうでもいいが。

「話は変わりますが、それ以上こちらへいらっしやらないほうが賢明かと存じ上げます、お嬢様？」

「…どういう意味ですか？」

分かってないのかよ、おい！

「だからだな、栗須は善意でそう言ってんだよ。従ったほうがいいと思うぞ、ドリル。」

「あつ、貴方またしても私の髪をつ——」

今のは、秋晴が悪いな。いくらドリルを装備してても、本人の前で言ったらダメだろ。

「お前、俺等がどこにいるかわかってんのか？」

「……何を言ってますの？」

「はっきり言いますと、私たちは貴方の足元より更に下の位置にいますので、スカートの中を見せつけることになりましたが、構わないのでしょうか？ということですよ。」

「なっ——！？」

お。ドリルの羞恥心メーターがMAXまで行ったかな？これ以上ないってくらい真っ赤だな。しかも、怒りも入っているか？理不尽だな。しかも怒りの矛先は秋晴っぽいし。秋晴へ向けたほうが都合がいいんだろうな、俺のことは苦手だろうし。

へんな間が空いた後、いきなり空中に赤いバラの花びらが舞った…
またあのナルシストかよ！？

「……これは……。」「

そっだよ、秋晴。あの風祭だよ…

「ふふふ。何か揉めているようだね。しかしこの風祭灯一朗が来たからにはもう安心だ。見よ！この完璧すぎる美を！この完璧な美の前には、すべての醜い争い、揉め事は霞み、消え去るだろう！」

……早く帰れよ。すぐに帰ってくれたのは、不幸中の幸いだと思っ。

「…じゃあ、俺は練習に戻る…。」

「…はい、頑張ってください。」「

うわ、秋晴と腹黒のテンション低いな。まあ、一部（灯一朗ファン）を除いてほとんどの人が低いんだが…

「それで、栗須くんはどうされるんですか？」「

「そうだな、次はクロールで楽に泳ぐ予定だが？」

「クロールって… 皆さん歩くだけでも辛そうですが、平気なんですか？」

「いや、さっきまではバタフライだったし。じゃあ、行ってくる。」

「え！あのちよっと、バタフライってどういうこと…って聞いてないわね。うわ、服着ているはずなのに速いわね。」

若干呆れ顔だったような気がしたのは、気のせいだと思う。

うん？なんか深閑さんがレバーを持つてるな。あ、レバーおろしたおゝすげえ！大量の水が流れ込んできた。水道代もばかにならないと思うが、この学園なら今更な話か。

「おいつ、これはどういうっ…?!」

秋晴、必死さが伝わってきたよ。でも、俺はかなり余裕があるんだよな。ガンバ！

「『氾濫した川で溺れてしまった主人を助ける』というシチュエー

シヨンの、第一段階です。」

「これがかよ!? しかも第一って?!」

うむ、もつときつかったら楽しいな。早く次の段階になってもらいたいものだ。

「次の段階では実際に人形を抱えて岸に上がるまでを行ってもらいます。まずは、一人でプールから出る、このミッションをクリアしてください。」

じゃあ、さっさとクリアしますかね? もちろんバタフライで

「栗須さん、何故あなたはあの激流の中でバタフライで泳ごうと考えたのですか?」

深閑さんに呆れられたぜ。でも、楽勝過ぎてね。

「いえ、ただ岸まで付くだけなら楽すぎると思いましたので、負荷のかかるやり方にしただけです?」

「貴方は一段階上のカリキュラムを行うべきですかね? 考えておき

ましよう。」

きつくなるのか？来るなら、どんと来い！

あ！まずいな。四季鏡が秋晴にしがみついて二人ともおぼれかけてるし… しょうがない、ヘルプしますか。

「深閑先生、流石に四季鏡と日野の状態はまずいのではないでしようか？水は止められないんですか？」

「水は止まるまである程度の時間を要します。そうですね。では、私が四季鏡さんを救助しますので、貴方は日野さんを救助してください。皮肉にも貴方は一段階上の人形の救助よりも難易度の高い、本当の人間の救助をしてもらうことになります。頑張ってください。」

「分かりました。」

じゃあ、サクッと救助しますかね？

また次回に続く。

5話 轟はとりあえず殴っておこう(後書き)

次回こそは必ず、必ず、オリジナルでフラグ立て的なことをやる…はず。

自信なくなってきた…

打ってたら、長くなりすぎると思い切ってしまいました。

次で原作一巻終了かな？もう一話足すかな？未定です。

今回の更新は、土曜日までにはしたいです。(あくまで希望ですね

…)

それと、いつもコメントありがとうございます！

以上、作者でした。

6話 二次災害にはご注意ください！（前書き）

少し短めです。それとキャラ崩壊、口調の違和感は作者の技量不足です。
すいません！

6話 二次災害にはご注意を！

前回のあらすじ：秋晴がおぼれた。

あらすじ適当！？やる意味なくねえか？作者…

「おい、秋晴！大丈夫か？今そつちに行くから、あわてずに待つてろ！」

「そつ言っても…ブハツ。後ろのやつが離してくれないから、沈む！」

ある程度頑張ったおかげか、岸に近づいていたので俺と深閑さんはすぐに到着した。

「だから四季鏡は深閑先生に任せろ。お前は一人で大丈夫だったか？一応救助に来たが。」

「いや、すまん。さっきので体力が…」

「なら後ろにつかまっつけ。行くぞ。」

流石にバタフライは自重。平泳ぎに近い形で秋晴を岸まで運ぶ。

「すまん、栗須。助かった。」

「友達なら当然だろ？というよりお前は被害者のような気がするが… 一応説明しとく。さっきの女子は四季鏡。ドジすぎるのが特徴だ。しかも悪気なく回りに被害が出るから、かなり厄介だ。昨日の

カレーもあいつのせいな。」

「昨日のか… それにしても、そいつが上がってくるのが遅くないか？」

「そうだな、いつたい… っておい！深閑ですらおぼれかけてる！？なんで?!」

あの超人がなぜ…？あ、四季鏡が無意識だろうが、きれいに関節をきめてやがる。あれじゃあ玄人でも抜け出せん。俺でも無理だ。あんなピンチでどうしてあんな技が出る！

「クソッ！」

もう一回救助に向かう。すでにプールの水は止まって落ち着いているのに、テンパった四季鏡は気づいてない。

「四季鏡、落ち着け！もうプールの水はいつも通りだ。そこで立つことができるぞ！」

「む、む、無理ですよ〜。… 本当です！立てました。」

喜んでるのはいいが、四季鏡の下敷きになっていた深閑がまだに水の上につつ伏せて浮かんだままなんだが… まずくないか？

「おい、深閑先生！大丈夫か？… ちっ、意識がない！」

急いで岸に向かう。大地と違って背中に幸福感を感じるが、今はそんなことどうでもいい。

水を吸った服は重い。さらに人間の体重を加算すると、意識のない人を岸に持ち上げるのには結構な力が必要だったりする。

「よっこらせ！」

まあ、ラカンボディーには関係ないが。一応、中学校の保健体育で習った、救助時のマニュアルを実践するか。

「大丈夫ですか？意識があれば、何か反応してください。」

反応なし。呼吸の確認をしよう。

…！止まってるだ…！

「だれか、AEDを取ってきてくれ！ついでに医者を呼んでくれ！」

「わ、分かった！」

轟が行ってくれた。届くまでは人工呼吸と胸骨圧迫を行う。

まずは胸骨の圧迫。俗にいう心臓マッサージだな。目安は1分間に100回。これを30回して人工呼吸。でも素人が人工呼吸するのはまずい。それと、女性に人工呼吸するときの配慮も必要だな…

「だれか人工呼吸のレクチャーを受けたことのある奴はいるか?!」

…誰もいないのかよ！授業でやらなかったか？あゝ、もう！

まずは、胸骨圧迫。男性の場合、乳首と乳首を圧迫するといいらしい。

「1、2、3、4、……………30！」

次は、人工呼吸なんだが…… 衆人環視の前でキスに近いことをするのは恥ずかしすぎる！でも、呼吸停止後、2〜3分以内の人工呼吸は効果的なのは確かだし。しょうがない！

仰向けに寝かせた状態で片方の手で額を押さえ、もう片方の人差し指と中指で顎を上を持ち上げる（頭部後屈顎先挙上法）ことにより気道を確保する。

「気道確保。フリーー。フリーー。」

約一秒間。胸が上下するぐらいに呼吸を送り込む。これを2回。

「キヤー！」とか「教師と生徒の禁断の恋……」とかいう声は聞こえない。聞こえないいたら聞こえない。ていうか、こんな状況で不謹慎だろ！

胸骨圧迫を30回、人工呼吸2回をワンセットで繰り返す。

…3セット目ぐらいだっただろうか？

「ゴ、ゴホッ！ハー、ハー。わ、私はいったい？」

「深閑先生、大丈夫ですか？体に異常はありませんか？」

「いえ、特にはありませんが…少々、倦怠感があるくらいでしようか？」

「そうですか。では、保健室に行きますか？」

「しかし、授業の途中ですから…」

「さっきまで呼吸が止まっていたんですから、行きましょう！」

少し強めに言うと、

「分かりました。生徒に諭されるとは教師失格ですね。」

「何を言っているんですか…さあ、行きますよ。」

「ち、ちょっと待ってください。」

うん？ああ、どうやら体を起こそうとしているみたいだな。でも少し厳しいようだ。

「やっぱり、ダメなんじゃないですか。よっこらせ、っと。」

歩けなさそうな深閑さんを持ち上げる。いわゆる、お姫様抱っこで。

「キヤッ！」

なんか、かわいい声が… 今の声って深閑さんの？ …やばい。意識せずに持ち上げたけど、ボディーマの接触的にやばい…

「さ、さあ行きますから！」

少しテンパリながら、二日連続で保健室に向かう。後ろから聞こえる声は、聞こえなかったことにした… それよりもこの感触を堪能… って違う！早く保健室に！

「すみませんでした！！！」

ただ今、絶賛土下座中です。

「いえ、それはもういいですから。」

「救助とは言え、教師に口づけなどという不埒な行為をしてしまったのは事実ですから！」

まあ、流れをかつまむと、保健室到着 救助内容説明 深閑の目が潤む 土下座 …っという感じだ…

「しかし…。」

「しょうがない人ですね。では、罰として何か叶えてもらうことで許すことにしましょう。それでいいですね。」

「…わかりました。」

「では。その作ったような敬語をやめていただけですか？違和感はありません。」

ガーン… 結構頑張って敬語使ってるのに、全否定された…

「俺の敬語はそんなに変か…？」

「いえ概ね正しい敬語ですが、貴方自身に合っていないという感じでしょうか？」

…。敬語が似合わない男？それは秋晴じゃないか？

「いやでも、ほかの生徒に示しがつかないだろ！」

「では、二人っきりの時だけで構いません。」

「ならいいけど…。」

教師と生徒が二人つきりなることってあんまり多くないような…？
今までもほとんどなかったし。

「それと…」

「それと？」

「その時は、私のことを深閑と呼び捨てにしてもらって構いません。」

「はあ。じゃあ、そう呼ばせてもらおうよ、深閑。」

心なしか深閑の顔が赤かったのは、たぶん気のせいだろうな。

余談だけど、医者を呼び、AEDを取りに行ったのに肩透かしを食らった轟からなかなかいいパンチをもらった。なぜか腹が立ったので、3倍返しにしておいたが。

Side：深閑

学生時代から今までの人生は、自身の向上や技能の習得に時間を使い続けてきました。勿論、浮いた話一つなかったのは言うまでもありません。

今日、救助とは言え生徒の一人に初めての唇を奪われてしまいました。私はどうすればいいんでしょうか？そして、この心の中があつたかくなるような気持ちは何なのでしょうか？分かりません…

分からないことは、理解できるまで努力するしかありません。今ままでそうしてきたのですから。

「しかし、今日は眠られるでしょうか？」

…この質問の結果は、翌日に小さなあくびを漏らした深閉が発見されたことから推して知るべしだろう。

6話 二次災害にはご注意ください！（後書き）

キャラが違いすぎだろorz

それと主人公がこんなに鈍いのは、アメリカ生活で基本的に同年代の女子と接する機会が少なかったからです。前世でも恋愛経験0でした… 恋愛には憧れてますが、（わざわざ転生した理由です）現実の恋愛はいまいち分からないって感じですよ。

今回は、2巻突入の予定です。あくまで予定なので、保証は0です。日程的には。月曜日までにはする予定です。あくまで…以下同文

お知らせ ヒロインについて

まずは、2回にわたるアンケート協力ありがとうございました。心からお礼申し上げます。

まあ、すぐに本題に入りますと、アンケート結果&作者の独断と偏見で決定したヒロインを報告しようかと思えます。

?ヒロインは3人にしました。

具体的に言くと、大地、ミカン、みみな の3人です。

ほかのヒロインを押していた方々には大変申し訳ありません！

?秋晴は朋美とセルニア

こちらはほぼ原作通りなので、もしかしたらあまり書かないかもしれませんが。未定です。

?ほかのヒロインはどうするのか？

他のヒロインは、結構扱いが酷くなります。(モブに近くなるという意味で…)

本当に申し訳ありませんm(_____)m

となりました。

?の理由は、作者がハーレムをうまく書ききれないと判断したのが理由です。書いて3人ですかね? …という中で、人気の高さと作者の好み混ざった3人を選びました。

?の理由は、二次創作じゃなくて単なる盗作になるからです。

?の理由は、あまり3人のヒロイン以外に構って、仲がドロドロし

ないようにするためです。

以上報告でした！

これからも「まさかの転生先!？」をよろしくお願いします！

お知らせ ヒロインについて（後書き）

勝手に決めてすいません（^ー^；）

でも、この設定が一番書きやすいと思うので、更新しやすいかな
と思ったりもしています。

1話 作者の暴走なんだ、これは！溢れ出すパッションなんだ！（前書き）

なんでこうなった？！急展開過ぎる！

…と書いている作者ですら思ってしまった。

書き直し必要かな？

1話 作者の暴走なんだ、これは！溢れ出すパッションなんだ！

とある夜…

俺は、夜の白麗陵を歩いていて。悪いことをしているわけではない。むしろ逆に悪いことをするやつを捕まえるふりをしている。そう、盗撮事件ですよ…。結論は出入りしている業者に雇われていた犯人による事件で、こんな夜に張り込んで効果はない。しかしこれも授業の一環だから、一応探すふりだけはしている、というわけだ。

「だるいな。これで捕まるぐらいなら警備部が捕まえてただろうに…。」

「栗須… 僕は、貴様がそのような理由で諦めるような輩だったとは知らなかった…。」

「いや、いや。違うから。諦めたんじゃない、やる意味がないからやめようとしているだけだ。」

「結果は一緒だ！！」

大地に怒られました。まあ、あちらの意見のほうが一般的には正しいわけです。まあ、それなりに頑張りますよ？

「って、そんなことはどうでもいいや。」

「どうでもいいことに思えないんだが…。」

「大地、お前どこか調子悪いのか？」

「…どういう意味だ？」

「体の軸が少しぶれてる。いつものお前ならあり得ないことだから、
気になっただけだ。」

「!?!」

「気づいてないとも思ったのか？」

「…いつから気づいてたんだ？」

「そうだな、だいたい1週間前くらいからか？そうそう、あのプー
ルでの事件が起きた時くらいからだな…ってどうした大地？」

「いや、少し苦しくなっただけだ。今はもう平気だ。」

「本当か？無理してないか？」

「大丈夫だ… 少し放っておいてくれ。」

「あ、ああ分かった。」

S i d e : 大地

あの時を思い出す。栗須の鍛えられた体に薬を塗った時のことを……あの時を思い出す。栗須と深閑先生が口づけしていた時のことを……

どちらも、栗須に関する思い出のはずなのに、前者は顔が赤くなりドキドキする。後者は、顔が引きつり心が締め付けられる……この調子が1週間以上続いている。なぜなのかは全く分からない。病気ではなかった。これは学園の医者に訪ねて聞いたことだから、間違いないと思う。

「……本当に僕らしくないな。」

自分自身の心がわからなくなり、栗須から離れる。ただ、逃げているだけじゃないのか？このままでいいのか？深閑と栗須が……

またこれだ……いつの間にか栗須と深閑が深い仲になると考えてしまっている。あれは救助だったの言うまでもないし、僕と栗須の間で何か変わったというわけではない。

嫉妬？違うな……。栗須と僕はそんな仲ではない。羨望？これは近いものがあるような気がする。焦り？これも近い感じがする。

あれから一週間たったにもかかわらず、自分の心はいまだに見えない。その間、寝不足は続いているが、体の調子は悪くないはずだ……少なくとも、体は軽く感じている。

S i d e : 栗須

大地が戻ってきた。でも解決したわけではなさそうだな… 何か手伝えればいいんだがな。

「おい、大地。」

「なんだ？」

「悩み事なら聞くからな？」

「！！い、いきなりなんだ…？僕に悩みはないぞ。」

「それならいいんだ。でもいざという時は頼ってほしい。お前のためなら力を貸すから」

「そうか。ありがとう…」

それにしても、本当に大丈夫なんだろうな？今にも倒れそうになってるんだが。

「大地、やっぱりお前は先に寮に帰ったほうがいいんじゃないか？」

「？…意味が分からない。」

「軸がぶれてるところじゃない。さっきからフラフラしてるじゃないか…」

「さっきも大丈夫だとあれだけ…！」

やっぱりバランス崩しやがった！ギリギリで俺が下敷きになる形で大地を保護する。

「やっぱりな。これでどうするつもりだったんだ？犯人が来てもうまく捕まえられな…！！ 熱があるな… 熱で感覚がバ力になつてたのか…？」

深閑に許可を取って、部屋に運ぶか？

「おい、深閑。大地が倒れたんだが、部屋に運びに行つていいか？」

深閑に話しかける。二人と、寝てる人一人だから約束通り敬語はしやべらない。

「大地さんですか？どうかなされたのですか？」

「熱だな。そこまで高温じゃないから、一晩寝て、大事を取ってもう一日休めば全快だろうな。」

「そうですか、分かりました。では栗須さんには、大地さんの看病もお願いできますか？」

「勿論そのつもりだよ。」

「では、早めに帰ってください。それと風邪薬は、保健室でもらってください。」

「分かった。じゃあ行ってくる。」

「はい、行ってらっしゃい。」

なんか最近の深閑の言葉が柔らかい気がする… 気のせいかな？授業中はしっかり厳しいしな

Iの自室

「ハ―ハ―ハ―…」

「息苦しいのか？」

「……ちよつとだけだ。別にこれで構わない。」

「そうか？まあ、して欲しいことがあつた言えよ。」

目が覚めた大地を看病している。何か飲む物と食べるものが必要か？

「飲み物をとつてくるが、何か食べれそうか？」

「林檎とかなら大丈夫だ……。」

「分かった。」

さて、急いで取りに行きますかね？

「おい、大地取ってきたぞ……って、おい！大地、大丈夫か！？」

また眠っているようだが、明らかに息が荒すぎる。そういえば、男装するにあたって胸にさらしを巻いているんだっただか？それが胸を圧迫して呼吸しづらくなっているのかもれないな？

「やっぱりとるべきか？」

でも女性のそんなところを寝ているからと見ていいんだろうか？

「目隠ししながらならOKかな…？」

「大地すまん！！」

おもむろに服に手をかけゆっくり脱がしていく。そしてさらしを外していく。

「ぐほっ！！」

たまに手に触れる小さな小山が最高だ…って、俺はなんて不謹慎な事を考えているんだ〜！

を伝えるべきだな。

「……すまん。実は最初から気づいていた。」

「どうして気づいた？」

「骨格だよ。姿をある程度似せても、結局は性別とは違う。大地の体は男子の体のつくりとは異なっているんだよ。」

原作知識なんて言えるわけがないし、これならまだ納得できる理由かな？

「…そうか。早くもばれてしまうとはな… これで僕は強制退学かな…」

「？普通は、女子として受けなおせばいいんじゃないか？」

理由は知っているが、知らないふりしておこう。知っているのは不自然だからな。

「父との約束なんだ。卒業まで男装して無事に卒業できれば、親の決めた進路を拒否できたんだ。でも、早くも失敗してしまったがな。」

「…そうか。」

何とも言えないな。というか看病に専念しすぎてそこから辺まで頭が回らなかつた俺のせいかな。なんとかしよう！

「そうか。でも俺が黙っていけば問題ないんじゃないか？」

「し、しかし、それは…」

「今までだって気づいていて放置してきたんだ。あまり変わりはないだろう？」

「そういわれればそうだが… 約束は約束…」

あゝもう！頭が固い奴だな！

「お前が必要なんだよ（ルームメイトとして）！ お前を（父親から）守ってやるから俺（と同じ）のところ（＝部屋）に居ろって！」

言いたいことは言った。あとは大地次第だな。

「……………！！！！」

うるたえすぎだろ… なんか変なこと言ったか、俺？

「…そうさせてもらおう。」

真っ赤な顔で言われたが、どうしたんだ？何か決意したような感じもするし…

.....

「！！！！！！　　ップハー！　　って、大地、い、いきなり何を！」

大地にいきなりキスされた…　　何でだ~~~~~！！

「せ、責任は取ってもらうからな！」

なんでこうなった？ええい、アンサートーカーの出番だ！

A n s w e r　さっきの発言

……！もろに告白だ〜　　確かにこうなる可能性もある発言だったけど、いつの間にかここまで好感度が！まだ2か月だぞ！

男装での学園生活において、頼れる男子はとても好感度が高いし、ばれていたのに黙っていてくれたという事実に加え、あの告白もどき…　　惚れてまっちゃう~~~~~by作者

「でも何でいきなり、キ、キスなんか…？」

「ふ、普通は告白に対する返事はキスじゃないのか？」

「違うと思うぞ… もう少し仲が発展してからが普通のような…」

「！！で、でもあれが僕の正直な気持ちだ！何か問題でもあるのか！？」

若干逆ギレ気味。いや役得だったし、あんな可愛い女の子とキスできたのは『最高』の一言なんですけどね！

「い、いやないけど。でも、こうなった以上は言うべきことがあるな…。」

「な、なんだ？」

こういふことを言うとは思ってなかったな… 言うにしても、もっと先のことだと…

「お、俺とっ、付き合ってほし…い…」

最後までもった。へたれ告白…orz

「…断るわけがないだろう…。よろしく頼む。」

大地のほうが男らしい…って言っても言葉とは裏腹に態度はものすごくかわいいんだが！

「あ…ありがとうな、付き合ってくれて」

「…「こちらこそ…」」

さてさて、これからどうなることやら？というか、恋が芽生えた男
女が同室ってまずくないか？

1話 作者の暴走なんだ、これは！溢れ出すパッションなんだ！（後書き）

書き直して、ゆっくり発展していく恋愛にすべきだと思った人は、
そうコメントしてください。

ゆっくり発展するべきだという意見が過半数なら、書き直します。
というか、この話をIF版にして、続きを書きます。

なんで、こんな内容になったんだろう？作者自身も不明です。

2話 邂逅

∴漢字二文字のタイトルって異様にかっこよく感じるのは作者が

タイトル意味不明ww

タイトルは作者のその時の気分で決めてます。

2話 邂逅

…漢字二文字のタイトルって異様にかっこよく感じるのは作者だ

「……………結局眠れなかった……………」

あの告白？の夜、俺は一睡もできなかった。理由？まあ、この状況を見れば一目瞭然かな……………」

「うみゆ……………ス……………ス……………」

薫が同じ布団の中で寝てるからです。別に何かいやらしいことがあったわけではない。それだけは断言する！ちなみに、二人っきりの時は『薫』って呼べと言われました。なんかデジャブ？

掻い摘んで説明すると、

告白 薫デレる そういえば薫って体調不良 体が寒いらしい 同じ布団に……………」

……………意味不明だよ……………。最後の部分だけは俺自身も理解に苦しむ。布団をかけるとか、いろいろ対処法があるだろうに……………何故、そこで人の熱を使っただよ！

「う……………う……………ん……………？あ……………くりすだ……………」

……………何この可愛い生き物？持ち帰ってもいいんですかね？あ……………！自室にいるんだから、もうすでに持ち帰ったような状況だな……………！愛でてもいいんですかね？

とりあえず、頭を撫でてみる。

「ふにゃあ〜」

グホツ！くそ！寝起きの薫の戦闘力が半端じゃないぞ！そろそろ、完全に起きてもらわないと俺の精神が危ないな…（主に我慢できなくなりそつという意味で）

「おい？薫、しっかりしろ〜」

「？……………！！！！」

お〜、完全に起動したな。現状を確認して、あわてているが…。

「な、なんで、栗須が、同じ、布団の、中に、入ってるんだー！ー！ー！？」

「？覚えてないのか？」

「こ、告白されたところまでしか…覚えてない…」

最後のほうで、甘えてきたのは体調不良によるものなのか？それは結構悲しいな…

「お前が寒いって言って、俺の布団の中に入ってきたんだよ… 覚えてないんだろうけど…」

「ぼ、僕がそんなうらやましいこと…違った！いやらしいことを言うはずがないだろう！」

本音が垣間見えて、満足です！！

「まあ、薫。それはともかく…。」

「ともかくで流すな！かなり重要な話だぞ！」

「このままだと遅刻するんだが？」

「……。もっと早く言え〜〜！」

「だから、今言ったじゃん。」

そこからは、ほとんどいつも通りの朝が過ぎて行ったわけだ。この後で薫がこの話題に触れることはなかった。

その数日後だ。薫とはそれなりにうまくやっているはず… 薫は男子生徒という設定なので校内ではイチャつけない。自室がメインです。

そうそう。あの盗撮犯だが、やっぱり原作通りに腹黒&秋晴が捕まえたらしい。どうでもいいことだったか？

「それにしても、次の従育科試験はどうでしょうか？パートナーカードはもらえるのか？」

「前は、腹黒が面白そうという理由でカードをくれたが、今回は秋晴に挙げる予定だそう。原作通りだな。」

「やばい、腹黒以外に上育科生の知り合いがないぞ……」

「指名がなかったら困るな…… どうしようか？」

「って、うん？あの子大丈夫かな？」

「小っちゃい女の子が、荷物を運んでいるが明らかにバランスが悪い。今にもこけそうだな。」

「……あ！間に合え！」

「案の定、転倒している。距離的にはギリギリだが間に合うか？」

「……フー。なんとか間に合ったな。」

「荷物はダメだったが、本人は間に合った。」

「……！？き、君はだれ？なんでお姫様だったこ！？」

「テンパってますね。どこかで見たような人だと思ったら、みみなだったか。」

「私は、栗須真二といいます。従育科の1年生です。ところであなたは？」

「み、みみなのは桜沢みみなだよ。上育科の2年… ってどうしてまだお姫様抱っこのままなの!？」

「では降ろしますよ。よいせつと。」

物凄く軽いな。本当に19歳なんだろうか？

「それにしても、あのような大荷物を一人で抱えようとなさるのは、あまりよろしくないかと存じ上げますが？」

「……………」

何でそこで黙るんだ？

「…だって…みみなには…そんな荷物を持ってくれるような…人が…いないんだもん…。グスン…」

軽く泣かれた〜!?地雷踏んじゃった?やばい、どうにかしたいと!

「お、俺が荷物を持つから!!大丈夫だから!」

「グスツ?で、でも君のことをあんまり知らないのに、そんなのって悪いよ…」

「じゃあ、交換条件っていうのはどうだ?」

パートナーカードをもらって、従育科試験に出てほしいんだが、欲張りすぎだな…

「？」

「俺の“パートナー”になってください！」

みみながいきなり慌て始めた理由が不明だ？

「まずは、上育科の皆さん」従育科試験のために貴重な休日をご提供頂き、ありがとうございます。理事長に代わりまして私から謝辞を述べさせていただきます。…理事長に代わりまして。」

うわ、深閑が半分以上寝たままの楓さんを睨んでる… 理事長は後でお仕置きなのかな？ご愁傷様です〜

まあ、聞いていた通りの従育科試験（6月）だ。内容は『主人尽くすこと』だそうだ。あいまいすぎるだろ！という突っ込みをしたいが我慢した。

今回のパートナーはみみなだ。あの後OKしてくれたが、『君の言

「一方は誤解を招くんだよっ！」と言われた理由がいまだに分からない。ただパートナーをしてほしいといっただけなのに…

「うう。何をしてもらったらいいか分からないよ。」

隣のみみなが、若干うめくようにそう呟く。

「なんでもいいさ。ついて来い、っていう命令だけでもいいんだろ
うし。」

ちなみに敬語は禁止されました。いわく『似合ってるけど、なんか
いやだ』だそうです。深閑にもそういわれたが、俺ってそんなに敬
語とミスマツチなのか？社会人になった時が大変そうだな…

「じゃあ、みみなが絵を描いている間に見張りをしてほしいかな？」

「？見張りって…絵を描くだけなのになんで必要なんだ？」

「…みみなのはあんまり人と付き合るのが得意じゃないんだよ… だ
からあんまり騒がしいところで絵を描くのも好きじゃないし…」

「そうか。なら大船に乗った気分で、安心して絵を描いてくれ！」

「ありがとう…」

「で、どこで絵を描くんだ？」

「あの…え〜とね。」

まあ原作通りなら、図書館裏かな？

S i d e : 秋晴 & 朋美

「で、俺は何をするんだ？言っとくが、さっきの『女子寮を裸で駆け抜ける』とかはなしだからな。」

「そうね。なにをしてもらいましょ…！」

「あ？どうした？」

「いえ、でも今決まったわ！」

「…なんだ？」

「まずは後ろを見なさい。」

「栗須だな。あとあの小さい女の子は桜沢…だったか？」

「そうよ。それにしてもあの二人に接点があったとは意外ね。だからすこし気になるのよね。そう、尾行するからついてきなさい！これが命令よ！」

「おい！なに人のことを勝手に尾行するなんて犯罪ギリギリな行為を命令しやがる！頭のねじが何本か足りねえんじゃないか？」

「へ〜。そういう態度とるわけね… なら、従育科試験は0点でいいのね？」

「…よろしくないです。あ〜もう、ついていけばいいんだろ！ついていけば！」

「最初からそう言っていればいいのよ。ほら、早く行くわよ。」

「…へいへい。」

Side：栗須

「で、目的地はこの図書館でいいのか？」

「おいしいけど、少し違うかな。正確にいうと、この図書館の裏なんだよ。」

「へ〜。そんな場所があったのか。知らなかったな。」

「あまり知られてないと思うよ。人も来ないし。だからあそこがみ
みなが落ち着ける場所なの…」

「そうかい。じゃあ入るか。」

「う、うん。」

「へえ、結構スペースあるんだな。もつと狭いものかと思ってた。」

「それよりも、見張りお願いなんだよ。」

「…見張りって言っても、人が来ないんだったら意味ないじゃないか？」

「!?!?!」

「今気づいたみたいだな。じゃあ、ほかに出来ることはあるか?」

「絵のモデル… そう!モデルをしてほしいかな。」

「自然体でいいか?」

「もちろんだよ。」

まあ、一応周りに警戒してくかな？

S i d e : み み な

なんでなんだろう？男の人といいつも緊張するのに、なぜか栗須君はそうでもない気がする…。やっぱり緊張はするけど…。最初、こけそうになった時、助けてくれた男の子。話してみるとかなり優しかった。でも、物凄く紛らわしい話をしてきたりした。

小さい頃は病気で友達がいなくて、治ってから自分大好きな『絵』のせいで対等な対場の友達が少ない…。だから、彼は友達になつてくれるのかな？それがとても気になる。

Side：秋晴&朋美

「で、どこに行っただらうな？」

「さあ、分かりませんね。図書館の中に行っただと思っただらう、いませんでしたし……」

「…貴方達何をしていますの？」

「あら、フレймハートさんお出かけですか？」

「い、いえ少し散歩を……」

「で、何か用があるのか？ドリル。」

「キー、また私の髪型を掘削機扱いますのね！…今日という今日は許しませんわよ！…」

「フレймハートさんも落ち着いてください。周りから注目されますよ。」

「…！まあ、粗野な生徒に寛容な気持ちで接するのも上育科生として当然の行為ですわね。」

「ハ……。今は従育科試験中だからまた後にしてくれるか？」

「いえ、秋晴君今は人手は欲しいですから、フレймハートさんにも手伝ってもらいましょう。」

「何を手伝うんですの？」

「いえ簡単な事です。人探しですよ。」

次回に続く。

2話 邂逅

…漢字ニ文字のタイトルって異様にかっこよく感じるのは作者だ

感想待ってます… やっぱり怖い…

キャラ崩壊が酷過ぎる気がする…

ちなみに前回のあとがきでEFにするかどうか質問しましたが、E
Fの方がいいという意見もありつつ、そのままでもいいという意見
もあったので、このまま続けます。

コメントありがとうございました！

3話 主人公、ロリコン疑惑…？（前書き）

ようやく、サークルの仕事終了！

でも、火曜から木曜まで旅行なので、また更新が遅れます。

すみませんm(┆)m

3話 主人公、ロリコン疑惑…？

前回のあらすじ…合法ロリに出会った。

Side：栗須

「で、モデルになるのは決定したが、描き終わるまでにどれくらいかかるんだ？」

「え、え〜と… 簡単なデッサンぐらいだったらそんなにからな
いかな？」

「そうか… あ、そっだ！一つ言い忘れてた。」

「なにかな？」

若干無理やり気味に従育科試験のパートナーになってもらったから、
感謝の言葉くらい言わなくちゃな。

「今回の従育科試験のパートナーを引き受けてくれてありがとう。」

「ど、どういたしまして。」

「ところで、俺なんかパートナーでOKだったのか？」

「み、みみは悪くないと思っただよ！」

なんか強めに言われたな… まあ、いやじゃなさそうだし、問題な
いか？

「だって… みんなのことを『絵を描いているみみな』じゃなくて、『みみな』として扱ってくれてるし…」

「……。似たようなところがあるからかな…?」

「…?どういう意味なの?」

「俺はさ… アメリカ留学している間に本当に友達と思えるような奴がいなかったんだよ。」

「アメリカ留学?」

あ、そつちの単語に引っかかったか。

「ああ、自慢になるかもしれないが俺はすでに大学を卒業してるんだ。」

「!?!」

「アメリカでスキップにスキップを重ねて、神童扱いだったよ…でもさ、日本にいた時みたいに、友達は作れなかった。年の差も理由だけど、自分から作るうとしなかったのが、主な理由かな…?」

「なんで作るうとしなかったの?」

「さっきのみみなと同じ理由だよ。俺の周りには、俺のことを『神童としての栗須』として扱う人しかいなかったんだよ。」

「……………」

みみなが黙っちゃったな… まあ、そんなに縁の深くない奴の暗い話を聞いても、返答にこまるよな。

「でもさ、今はいるから別にかまわないけどな！秋晴とか、ミケとか、まあ、あのバカも含めとくか？」

「…。うらやましいな…。みみなもそんな友達がほしいよ…。」

「俺がその一人目になっても構わないか？」

「！！そ、それは…。」

「だめか？」

みみ나는思いつきり頭を横に振る。

「そ、そんなわけないよ！でも、みみなといっても楽しくないかもしれないし…。」

「そんなのは、俺が決める。第一、俺は今も楽しいぞ。」

「じゃあ、みみなの友達になってください…！」

「もちろん…！」

その時の、みみなの笑顔は最高に輝いていた気がする。

Side：秋晴&朋美&セルニア

「いませんわね…。」

「ああ、こつちにもいなかった。」

「そうですね…。フレームハートさん、秋晴くん、心当たりなどはありませんか？」

「ありませんわね。ところで、どうして栗須さんと桜沢さんを探しているんですの？」

「そうですね…。本音を言いますと栗須くんが桜沢さんと親しげに話していたので、気になった…というのが理由でしょうか？」

「？意味が分かりませんわ。それがどうして理由になるんですの？」

「基本的に桜沢さんは、人付き合いが得意ではありません。学内にとても親しい友人はいないと聞いています。だからこそ、気になったのです。」

「探してどうするんですの？」

「何もしません。私は桜沢さんにいい友人を見つけてもらいたいので。」

で、彼がそうなってくれるのであれば、大歓迎するだけです。」

「…そうですか。分かりましたわ。」

「おい、ところで一つだけ思い出したことがあるんだが？」

「なんですか、秋晴くん？」

「ああ、俺が転入してきて初めての日に、桜沢を抱えてただろう。そいつに出会った場所はどうか？」

「…それはどこですか？」

「確か、こっちだったはずだ…。」

「それでは、秋晴くんに任せます。さあ、早く誘導してください。」

「へいへい。」

あれから、1、2時間後だ… 少し眠くなってきたな…

「みみなく、どれくらい描けたんだ？」

「そ、それなりかな？」

「そうか。ところで、俺にも絵を教えちゃいけないか？」

「べ、別にかまわないけど、みみなは教えるのは得意じゃないよ…」

まあ、名選手が名監督にあらず っていうのはよくあることだよな。

「まあ、本気で絵を始めるわけじゃないしさ。十分だよ。」

「な、ならこっちに来て。」

「ああ。」

さあ、絵を描くなんて小学校以来かな？ 頑張ってみるか！

「み、みみなは味のある絵だと思うよ…。」

「い、いいよ… 自分でもわかるよ…。」

おかしい… 単純な風景画のはずだったのに、なぜ『ムンクの叫び』

みたいなおぞましい絵になる？

「へ、下手っていうわけじゃないし、描くべきものはしっかり描けてるのにどうしてこんな絵になってるんだろう…？みみなにも分からないよ…」

「も、もう一回！今度はしっかりコーチしてくれ！」

「い、いいけど、横から見るとバランスが少し狂っちゃっよ？」

「こつすれば問題ない！」

俺のあぐらの上にみみなを乗せれば、俺が絵を描きながら、みみなが真ん前から見ることもできる。完璧だ！

「！……！」

俺の脚の上で暴れないでほしいな…何か問題でもあったか？

「みみな落ち着け。深呼吸だ。ほれ、スーハースーハ。」

「う、うん。スーハ…って、そうじゃないよ！どうしてこんなことになってるの！？」

「？こつすれば前から見つつ俺が絵を描けるだろ？」

「だ、だからってこんな恰好って…」

別に变じやないだろう？お父さんが自分の子供を相手してる気分だし。

「まあ、描いていくからアドバイスしてくれよ？」

「うん。うん。」

Side：秋晴&朋美&セルニア

「い、いましたわ……！」

「すごいですね……」

「く、栗須……」

「まあ、仲がよさそうなのは大歓迎なのですが…… あれは世間一般
でいう、『ロリコン』という性癖なのでしょうか？」

「おい…… 一応、桜沢は19歳なんだろう？見た目で判断するならま
ずいが、一応法律上はセーフだから、本人たち次第じゃないか？」

「そ、そうですね！さあ、確認したのですから早めに戻りましょ
う！」

「…そうですね。戻りましょうか。」

それから、しばらくの間、栗須への3人の目が少し厳しかったのは言うまでもない。

Side: 栗須

「なぜだ… 今度はみみなのアドバイスを的確に守ったはずなのに…」

「みみな之力不足だね… ごめんね…」

「いや、どう見ても俺のセンスの問題だ…」

重い雰囲気が漂う…

「ウツ、…ウツ…」

泣き始めちゃった~~~~!

「あ、おい、別に大丈夫だから！これはこれでなかなか作品だろ！？」

「で、でも…」

これは、会話が堂々巡りしそうだな… しょうがない、子供をあやすときの方法で行くか！

「?????!?!?!」

なんか、逆効果だったか？おかしいな… 子供をあやすときはギュッと抱きしめてあげると安堵するはず… って！ みみなは子供じゃなかった！！まずいぞ、これは！

「す、すまん、みみな！これはだな、え〜と… そうアメリカ時代のくせで！そう、アメリカだから、ハグも日常茶飯事… って気絶してますか…」

気絶するくらいに嫌だったのか？なんかショックだorz

そのあと、みみなを寮の管理人に預けて帰った。部屋に戻ると、修羅がいた… 大地が誰を従育科試験のパートナーに選んだのか尋問された… 本人いわく「栗須がほかの女といるのは困るが、従育科試験を受けられなくて留年されても困る！どうすればいいんだ〜」。だそうだ。そういうながらベッドの上で転がりまわる大地は、見ていてかわいかったとだけ言っておく。

Side:みみな

「…う、うちは？」

みみなの部屋だよな？いつの間に戻ってきたんだろう？……！

確かあの時に、栗須くんがいきなり抱き付いてきて、で、そのあと……
覚えてない……。

「どうなったのかな？ …あれ？」

手紙だ。出かける前はなかったから今日届けられたものかな？

みみなへ

今日は、従育科試験に付き合ってくれてありがとう。

みみなが気絶した後は、寮の管理人さんに頼んで自室まで運んでもらうように頼んだから、この手紙はみみなの部屋で読んでるのかな？
それと、最後にみみなに抱き付いた件は、すまなかった。落ち着かせようと思ってやったんだけど逆効果だったな。

でも、今日はとても楽しかった。もしよかったらでいいけど、次からの従育科試験のパートナーになってくれるとうれしい。返事は次の従育科試験の時にでも。

それでは、お元気で！

みみなの親友、栗須より

栗須くんと一緒にいると、とても楽しい気分になれたと思う。あたたかい気持ちにもなった…

「もちろんOKだよ。」

誰もいない部屋で一人呟いた。この言葉は、次の従育科試験まで取っておくつもりだけだね。

3話 主人公、ロリコン疑惑…？（後書き）

次は、従育科の料理試験ですね

もちろん主人公と大地は同じ班ですよ。（ネタバレ）

次の更新は未定です。遅くなるかもしれませんが…

ところで、アクセス数~~~~記念！ みたいなのをすべきですかね？

要望があれば、IFでもいいんでアイデアをコメントしてください。とりあえずはアクセス数500000記念かな？当分先だけど。

コメント待ってます！

主人公設定みたいなもの（前書き）

今更ですね…

主人公設定みたいなもの

名前：栗須 真二
くりす しんじ

年齢：16歳

身長：175cm

体重：62kg

体型：細マッチョ

顔：上の下レベル

（ただし、服装や髪型などのおしゃれに興味がないため、通常値は中の中レベルまで落ちている。逆に、しっかりおしゃれをすれば、上の上レベルまであげること可能）

髪の色：黒

髪の長さ：短髪（理由は、長い髪が面倒だから）

目の色：黒（アンサーターカー使用時は少し緑っぽくなる）

学歴：・マサチューセッツ工科大学卒

・ちなみに、博士号持ち

・国際教員免許（高校での情報技術）あり 暇だったから取得した

なおこのような免許は実際には存在しませんのでご了承ください。

趣味：・懸賞のかかった未証明の定理を解いて、一人で楽しむこと。

(発表はしない)

・鍛錬

能力：<アンサートーカー>

言わずと知れた、チート能力。すべての答えが解る。

<ネギまのラカン並みの身体能力及び気
れでい×ばとの世界なら最強決定

<執事としてのありとあらゆる才能>

そのまんま。少しでも執事としての仕事と関係あれば、適応される。

性格：・基本的には陽気な性格。両親の死が関連するときは、シリ
アスになる。

・鈍感。前世も含めて、恋愛経験がないからである。

(相手の方から告白されるまで好意に気が付かないことも
ある。)

・優し過ぎる性格

誰にでも優しい。よって彼女をとて不安にさせる。ついでにフラグも立てる。

・たまにドS

正論で相手を徹底的にいたぶることがある。その時は敬語
口調である。

作者のつぶやき

設定が微妙だな… 何か書き忘れているような…？

というわけで、栗須自身に疑問があれば質問してください。
随時、追加する予定です。

4話 料理バトル！ 前編（前書き）

まあ、2巻の料理試験ですよ。オリジナル展開ですが。

それにしてもお気に入り件数が450件を超えました。

作者の目がおかしいんでしょうか？

投稿開始前にはこんなにも多くの人が登録してくれるとは、思っ
てませんでした。

4話 料理バトル！ 前編

「うっ、秋ですねえ。平和ですねえ……」

「理事長、暇ならこちらの仕事に着手してください。」

「今は昼休みなんで休みますよー。食べたばかりで働くなんて、消化に悪いですから。……ああでも、少し胃のあたりが物足りないよ
うな」深閑ちゃん、甘栗剥いてくれない？」

「あげません。」

「栗須くんには剥いてあげる癖に、栗だけに！」

「ブツ！あ、貴方は何を言ってるんですか！？」

「わ、深閑ちゃんが怒った」

「……………」

「そこで黙られても困るんですけど……甘栗剥くぐらいいいじゃないですか。栗か。栗もいいけど、戻り鰹のたたきに、熟れ熟れの柿梨のリキュール……ぶどう……ワイン……」

「欲望を垂れ流しになさるくらいなら、やはり働いてもらえませんか？」

「やっぱり秋は、食べ物ですよー。芸術やスポーツもいいけど、食べ物が一番お酒と合うんだから。おいしい秋の味覚と、おいしい

お酒のコラボレーション…」

「だから仕事を…」

「ねえ深閑ちゃん深閑ちゃんっ、私ってばナイスアイデアを思い付
いちゃったの！」

「私の話は聞いてないんですね… それで一体何ですか、理事長。」

「こういう訳で、急ぎよテストが始まったのだった…」

「—ということ、従育科の生徒は本日の授業は中止です。先の宣
言通り、これより抜き打ちテストを行います。」

秋だな… どうも主人公の栗須です。あれから数か月後の秋です
よ。番外編だから時系列は無視でOKなんだよ。

…変な電波を拾ったな

「課題は旬の食材を使ったコース料理です。和洋中、エスニックに
民族料理、ジャンルは問いません。制限時間は、九十分、事前のミ
ーティング時間が十五分です。」

うん… アバウトな注文だな。まあ、生徒の自由性が試されるってどこか？

「分量は一人前。ですが審査員は協力を仰ぐ上育科生を含めた三名です。取り分けられるものが好ましいでしょう。そして審査の関係上、料理は別室で一揃え完成したものを選ぶ形とします。冷めでは味が台無しになる品を選ぶ場合は創意工夫を凝らすように。」

いいですか、この試験は技量を見る目的も当然含まれています。ですがそれよりも共同作業を通じてチームワーク、コミュニケーションの重要性を知り…そして何よりも未来の主人に食べて頂くことを想定しているということを忘れないでください。」

やっぱり、深閑の言うことはためになることが多い。しかし“主人”の所になにか違う意味を感じたのは、気のせいか？

「—では、こちらで班分けをは済ませておきましたので、各自掲示板にて自分の班を確認し、指定された教室へ向かってください。以上です。」

さて掲示板を見に行きますかね。

………原作だと、薫&秋晴&四季鏡だったな。それが薫&俺…以上二名！

…って人数バランスがおかしすぎるだろ！なんで二人つきり！？他は4、5人なのに。まあ、文句を言っても受理されないだろうし、薫と一緒にするのは文句はない。むしろ大歓迎だ！！愛してるぞ、薫

「何を言ってるんだ貴様は！！」

振り返ると、薫がいた。顔を真っ赤にしているが、どうしたんだ？

「何のことだ？」

「さ、さっき、あ、愛してるとかなんとか言ってただろう！」

「あれ、声漏れてた？」

「す、少しだけだから周りには聞こえてないだろうが、気を付けてくれ！」

「了解。ところで、言われた感想はないのか？」

「な、な、な！！」

まあ、その態度が感想みたいなものだよな。さっきよりもさらに真っ赤な顔、あわてた仕草。かわいいな。

「そ、そんなことより、早く教室に行くぞ！！」

これ以上からからかうと、可哀相だからやめておくか。

「へいへい、行きますか。」

「でだ、まずはリーダーを決めるか？二択だが。」

「僕は栗須が適任だと思う。」

「なら、務めさせてもらいますかね。じゃあ、次はメニューだな。」

「そうだな、僕が覚えている限りでは旬の食材と言えば、イモ類、キノコ類、栗や柿や梨みたいな果物類、ナス、カボチャ。」

「それと、サンマ、サバ、秋サケ、平目も旬の食材だな。」

「何にしようかね？薫の言った食材はメイン向きじゃないし、魚がいいな。」

「なら魚を使った料理をメインにおいて、前菜は野菜類を中心にしたもの、デザートは果物を使ったなにかだな。」

「僕もそれでいいと思う。」

「メインに何を作ろうか…？」

「ベタかもしれないが、平目のムニエルなんかどうだろうか？」

平目のムニエルか… 悪くないな。

「それでいこう。次は、前菜か… キノコのソテーあたりにしておこうか。」

「いいと思う。スープはカボチャのスープにして…」

「そうだな。スープはカボチャのポタージュスープがいいな…」

「デザートは… 僕は時間の問題があるから簡単なものがいいと思う。」

「いや、お前と俺ならいけるだろ。デザートはモンブランなんかどうだ？俺なら四十分以内で作れるし、その間にほかの料理を同時進行させることができるから、行けるだろ？」

「できるといふのなら、僕が反対する理由はないな。」

「じゃあ、薫がスープとメイン。俺が前菜とデザートでいいか？」

「ああ、問題ない。」

「しかし、これだけだと面白くないな…」

「どつという意味だ？」

ただテストを受けてるだけっていうのも面白さが足りないな。モチベーションみたいなのがほしいな…

「！そつだ。完成までの時間が長かつたほうが負けで、敗者は勝者の言うことを一つ聞く……っていつのはどうだ？」

「いいだろつ。その勝負受けて立つ！」

俺と薫の勝負の火蓋は切つて落とされた！

さて、まずはモンブランの生地づくりかな。といつても普通のスポンジケーキと変わらないし、さつさと作るかな？普通はハンドミキサーを使うんだが、俺の力なら手で混ぜたほうが早い。大体1/3ぐらいの時間で終わる。

さて、生地のもととは完成。暖めておいたオーブンで二十分ぐらい焼く。さすがにここは短くは出来ない。その間に、マロンクリーム作り。渋皮付のゆで栗、砂糖、牛乳、生クリーム、バター、ラム酒などを分量通りいれて、煮ておく。これは、生地を作る前にしておいた。栗をつぶしながら、かきませ水分が飛んでクリーム状になつたらこす。

よし、ソテーの準備だ。0.7秒で素材を切る。できるところは時

間短縮だ。ハーブとかを使いながら、オリーブオイルで炒め、味付け。

生地が焼けたら、少し冷ます。冷蔵庫を利用した。あとは盛り付けをして、俺は完成。大地のほうはどうだ！ちなみにタイムは49：42だった。

S i d e : 大地

この勝負は勝たないといけない……言うことを聞いてもらえる。栗須はなんとなくで言ったみたいだが、僕にとっては重要なことだ。この権利さえあれば、あんなことや……こんなことを……って僕は何を呆けているんだ！勝負はもう始まっているんだ！

僕の担当は平目のムニエルとカボチャのポタージュスープ。ムニエルはまだしも、スープは時間がかかる……しかしこの圧力鍋さえあれば、勝ったも同然！

まずは、スープだ。チキンブイヨンを最初から作っていたら時間が足りない……しょうがないから、直接鶏肉を入れることで代用する。これはこれでまた違うおいしさがある。

カボチャの皮をむき、カボチャ・鶏肉・玉ねぎを、水の入った鍋に

入れて灰汁を取りながら煮込む。勿論、圧力鍋を使うことで時間短縮する。灰汁を取る度に圧力が下がるのは、デメリットだが使わな
いよりはましだ。ある程度煮込んだら、ミキサーで崩し、こす。牛
乳、生クリーム、塩で味を調べ、バターを加えて完成。

煮込んでいる間に、平目を捌く。タイムは4・2秒… 栗須の6倍
か… まだまだ修行不足ということかな。

平目に塩コシヨウをして小麦粉をまぶす。それをバターとオリーブ
オイルの入ったフライパンで焼く。焼き上げたらレモンベースのソ
ースをかけて完成だ！

栗須に勝てたか！？

S i d e : 栗 須

「ほとんど互角だったな…」

「僕の出せる力は出し切った。これで負けたなら悔いはない。」

「「勝負！！」」

「俺のタイムは49：42だ！」

「僕の時間は49：35だ！」

「なに〜！負けただと…！」

「やった！勝った！！！」

「なぜだ…？俺のベストを尽くしたはずなのに… しかし、負けたのは事実。出来る範囲で言うことを聞こう！」

「……本当にいいのか？」

「男に二言はない！」

「……な、なら……！」

「なら？」

「………！」

「？言わないとわからないんだが？」

「へ、部屋に戻ってから言うから、今は保留だ。」

「分かったよ。にしても、時間が余りすぎたな。料理を温めなおすのは確定として、あと残り三十分ぐらいか… どうする？」

「話でもしてればいいだろう？いつもしているが。」

「だな。同じ部屋なんだから当然だが。……そういえば、薫。」

「なんだ？」

「たまに俺の布団に入ってくるのはやめてくれないか？理性的に危ないんだが……」

「ぼ、僕は別に襲われても構わないんだが……」

「俺が構うって。薫のことは大事の思ってるんだから、勢いとかで……言ってる恥ずかしくなってきた！この話はなしだ！忘れてくれ。」

「う、うん……」

微妙な雰囲気だな…… どうにかしないと！

「え〜と…… この部屋でしたっけ？」

だれだ？この部屋は俺たち二人の班だし、まだテスト中だから誰も来ないはずなんだが？

「看板娘の四季鏡早苗、帰還しました！身も心も洗浄完了です、爪の先まで磨き上げて戻ってまいりましたっ。」

うわ、ドジッ娘が来たよ… 原作通りに失敗して汚れたから、洗ってきたんだろうな。部屋を間違えんなよ！おい！

「…って、あれ？部屋を間違えちゃいました。すみませんでし…キヤウツ！」

何もないところでこけた〜〜！生クリーム（モンブランにもスーブにも使ったやつ）が飛んだ〜〜！被弾した… 俺と薫に…

「す、す、すいませ〜ん！ど、ど、どうすればいいんでしょうか！？」

「…とりあえず、正しい部屋に戻れ。こっちは料理が終わってるから問題ない。」

「わ、分かりました！失礼しました！」

「というわけで、きれいにしに行くか、薫？」

「…そうだな（せっかくいい雰囲気だったのに！四季鏡のやつめ…）」

「

薫が怖いです… 魚のオーラが出てます…

まあ、さっさとシャワーを浴びてさっぱりするかな。

次回に続く…

4話 料理バトル！ 前編（後書き）

次回に続きますよ！

そして、主人公… もげればいいのに…

（秋というわけで時系列上は当分先のことです。深閑とみみなとはまだ付き合ってません。二人はほぼ同時の予定です。）

では次回の更新をお待ちください！

5話 料理バトル！ 後編（前書き）

作者の暴走が止まらない今日この頃……

やりすぎだとは分かっているのに止まれない…
なぜだ。解せぬ… orz

5話 料理バトル！ 後編

前回のあらすじ：・料理対決に敗北…

・トラップカード“四季鏡”発動！

「それにしても、四季鏡のドジは治らないな…。」

「僕も少しはましになると信じていた時があった…。」

「ま、文句を言ってもしょうがないな。さっさとシャワー浴びるか？」

「そつだな。」

In シャワールーム

つい最近は薰を女の子扱いしてるから完全に忘れてたよ… 薰は男子生徒のふりをしてるから、女子用のシャワールームを使うのは無理だったな。まあ、この時間帯なら使用する男子なんかいないだろ。

そもそも男子の人数自体が少ないし。

「やっぱり俺がシャワーを浴びるのはやめようか？」

「だ、大丈夫だ！べ、別に見られるわけではないし、一応壁があるから問題ない！」

「そ、そうか。ならさっさと浴びるべきだな。残り時間も少ないし。」

「あ、ああ……」

「なら俺は壁のほうを向くからな。」

「分かった。振り返っても大丈夫になったら、また声をかける。」

「頼むぞ。」

着替え中） 結構制服を脱ぐのって時間かかるんだよな… 普通の制服とは違うからな。ところで、どうでもいいことだが視線を感じるのは気のせいかな？

「薫。こっち見てないか？」

「!?!??そ、そんなことはない…。」

「そうか… なら別に問題ない。ところでまだ着替えは終わらないのか?」

「す、すまない。ちょうど今、終わった。」

「なら、振り返るぞ……………!?!」

な、なんでバスタオル一枚のみ!? もう少し露出を抑えてくれたほうが理性的に助かる… ってシャワー浴びるんだから当然か…? でも……………

と声も出さずに薫の姿について考え続ける。すると次第に薫が不安顔になった…?

「やっぱり似合ってたか… こんなに小さかったら、栗須も興味ないだろう…」

胸のあたりに手をもってきてそう呟く薫。かわいすぎるだろうが!!

「似合ってる! 最高だ! もう、なんて言ったらいいかわからないぐらいだ!!!」

ポフツ。顔が真っ赤になったな。そこも含めて完璧です!

「…は、恥ずかしいことを言うな! ば、僕は先にシャワーを浴びに行くからな!」

「はいよ。じゃあ、またシャワー後にな。」

「わ、分かった。」

さて、本題のシャワーを浴びますかね？

といっても生クリームを落とすのが目的なわけで、男子なら3〜4分もあれば十分だよな？という感じで、薰より先に上がりました。なので、ただいま着替え中です。髪は自然乾燥で十分だな。

「急いだほうがいいと言ったが、結構余裕があったな。ゆっくりしても大丈夫だって伝えに行くか。」

開始までにはのこり15分。そんなに余裕はないけど、焦る必要はないな。

「おーい、薰！無理に急ぐ必要はな……………！！すまん！！！！」

「……………！！キャ〜〜〜〜！！?!?!?（極力小声）」

タイミングが悪すぎる！！ある意味では良すぎるが… 声をかけに

行こうと思っただらちょうどシャワーから上がったばかりで、まだすっかりバスタオルを装備してなかった薫と遭遇。大事な部分がチリズム …… というか結構見えた。目にはうれしいが、個人の信用とか、理性的にやばい!!

「す、すまん!! 覗くつもりじゃなくて、単に時間に少し余裕があるって伝えようと……。」

「そ、それよりも先に後ろを向け……!!」

「本当に、すまん!!」

土下座しながら反省中。土下座ごときで許されるんなら何回でもやっつてやるよ!

しばらくして、薫から声がかかる。

「もういいぞ。たく…栗須。」

「な、なんででしょうか？薫様!」

男としての意地？何それ？おいしいの？

「だから、その態度もやめてくれ。別に怒ってるわけじゃない…ただびつくりしたただけだ…。」

「ほ、本当か？怒ってないか？俺が悪いんだから、煮るなり焼くなり好きにしてもいいんだぞ?」

「だから、もういいと言ってるだろ。くどいぞ。」

「分かった。でも、すまない……」

「そんなに謝られるとは思わなかったぞ…… 湯気もあつたし一応タオルもしてたから、あんまり見えてなかっただろ？」

……。

「……すまん。結構見えた……。」

「……！！そ、そうか……。」

長~~~~い、沈黙……。沈黙を破ったのは、薫だった。

「せ、責任は取ってもらうからな！！！」

「お、おう当然だ！」

責任って言うと、見てしまった責任だから…… 具体的には何を
するんだ？分からん。まあ、後で分かるか……？

その後は何故か終始、薫の顔が真っ赤だった。

試験の審査員は、右からみみな、楓さん、深閑… なんかおかしくないか？

楓さんは当然だろう。文句はない。

おかしな点その？

なんで、みみなが審査員に参加している？こつこつイベントは苦手そうなのに…

おかしな点その？

なんで、深閑が審査員に参加している？もつすでに上育科生ではないじゃん！

……説明がほしいな

「貴方達二人の試験なのですが…」

深閑が説明してくれるみたいだな。助かるな。

「実は班構成を急遽変更したために、審査員が不足する事態に陥ってしまいました。そこで、この教室の近くにいらしゃった、桜沢さんに協力を依頼しました。それでも一人足りませんでしたので代役として私が審査いたします。」

なるほど。でも、よくみみなが審査員みたいなプレッシャーのかかる役を引き受けたな。

（みみなが引き受けた理由は「栗須さん達の作った料理の審査をし

ていただけませんか？」という言葉に釣られたからです。（

「では、まずは前菜の“キノコのソテー”です。どうぞ。」

試験終了直前に温めなおしたけど、またぬるくなってるかもしれないな。そこはもう少し改善するべきだったな。

「次に“カボチャのポタージュスープ”です。」

本音を言うと、手間暇をかけてゆっくり時間をかけて作りたかった… 何倍もおいしいものが作れたはずだ。

「メインの“平目のムニエル”です。」

薫作の冷めてもおいしい平目のムニエル… 俺が食べたいな。

「最後にデザート“モンブラン”になります。」

モンブランは自信作だ。秋だから、栗の味が濃厚だ！

一通り作品発表は終了した。あとは、感想と結果か？

まずは、みみなの講評。

「おいしかったよ。でも出来れば、もう少しキノコのソテーはあたたかいほうが良かったかな…?」 ……だそうだ。

次に、楓さんの講評。

「お酒… お酒さえあれば完ぺきでした…」 知らんがな。

最後に、深閑の講評。

「この時期にここまでのものが作ることのできる生徒は貴方達以外にはなかなかいません。しかし慢心することの無いよう、努力を怠らないでください。」 ……流石のコメントだと思う。

まあ、全体的に好評価を得られたと思う。そこそこの点は取れたんじゃないか？

「と、ところでだ…栗須！」

「な、いきなりどうした？」

「せ、責任はいつ取ってくれるんだ？」

責任か… どうすれば責任を取ったことになるんだらうか？

「そのことなんだが… 責任を取るって具体的にはどうすればいいんだ？」

「……………本気で言っているのか？」

「本気だが… 何か問題でもあるのか？」

「せ、責任っていうのは… 男として…………… やっぱり説明するなんて無理だ〜」

最近よく見る薫の赤面。責任を取るのとはそんなに恥ずかしいことなのか！？それにしても、薫がおかしな行動をとり始めたんだが大丈夫か？しかもエスカレートしてる！？

「お、おい薫！それ以上暴れるとけがするぞ…………… って話を聞ける状態じゃないな…。」

しょうがない。かなり強引だけど、押さえつけるしかないか？

「ほれ、そこまでだ、薫。」

「グワ〜〜〜〜！！な、何をするんだ、栗須！？」

……俺もそういうことをしたいとは思わう。だって、薫のことは好き……というよりは愛しているから。でも、本当にそれでいいのか？ 薫は勢いで言っているだけで後々で後悔したりしないだろうか？ それだけは聞いておきたい。

「ほ、本当に後悔しないか……？」

「するわけないだろう……。」

「な、なら……抱く、ぞ……。」

「あ、ああ…………。」

……ここから先は作者が削除しました。バックアップは取ってません。諦めてください。

——特別編終了！

5話 料理バトル！ 後編（後書き）

というわけで、特別編でした。

やりすぎなのはわかってるんですよ…でも、つい魔が差したんです。

批評が多すぎたら全文削除でも構いません。コメント待ってます…

別の話。

深閑とみみなはしっかり出しますので、心配はしないでください。

旅行疲れた… 旅行先の広島ではもみじまんじゅう（略称もみまん）とか牡蠣を食べてきました…
というわけで記念オリジナルストーリーを”旅行”にしたいと思います！旅行先を募集中です！

では次回更新をお待ちください！

特別編 教師って大変そうな仕事だよね…（前書き）

完全オリジナルストーリーです。面白くないかもね…

特別編 教師って大変そうな仕事だよね…

本編の続きというか、秋晴が編入してきた直後ぐらいの話。

Side：深閑

「……………はい、そうですか。いえ、後任はこちら側で何とか探しますので…はい、はい、…ありがとうございました。」

情報技術担当の教員ですか…。前任の飯田さんが寿退職されたので、急遽、情報系の教員を探していますが、見つかりません…。考えられる筋にはすべて連絡したのですが、いい回答を得られたところはありませんでした。来週からの授業に穴をあけないようにしなければならぬのですが…

「ほかに情報系の教員はいたでしょうか？最悪、私が後任が見つかるまでの代役を… 代役！」

そうです。代役ならば、なにも教員である必要はありません。彼には悪いですが、代役を頼むとしましょう。

S i d e : 栗 須

「……というわけで、貴方に代役を引き受けてもらいたいのです。引き受けてもらえませんか？」

「それは別にかまわないけど、生徒が先生の代わりっておかしくないか？」

「貴方はアメリカで国際教員免許を取得されているのでしょうか？ならば、日本でも教員の職に着くことは可能です。もちろん、貴方は生徒なので正規の教員ではなく、あくまで臨時教員ですが……。」

まあ一応アメリカで教員免許を取ったけどさ。暇だったから。

「まあ、そこまで負担じゃないから構わないけど。で、期限はあるのか？」

「分かりません。後任の教員が見つかるまではやってもらいたいのですが、肝心の後任のめどが立たない状況なのです。」

「ふん。まあ情報系の人是一般企業に就職してるから、人手不足

なのかね？知らんけど…。」

「いえ、女性教員という縛りをかけているからなのです。白麗陵が男女共学になったとはいえ、男性教員は敬遠されがちなのが現状です。しかし、男子生徒が教員になるのであれば、敬遠はされないのでしょう。」

敬遠はされないだろうけどさ… 問題はそこじゃない気がする…

「それと時期も中途半端ですし、後任の教員が見つかってても契約までには時間がかかりますので、最低でも2か月はやってもらいことになりそうです。」

「了解。ところでカリキュラムみたいなのはあるか？」

「ええ、職員室にあります。では、契約の細部を決める意味でも移動しましょう。」

「行きますか。」

それにしても、同級生が先生か… カオスだな〜

「前任の飯田先生が寿退職されたため、後任の先生が来るまでの代役の方をお呼びしました。皆さんは驚かれるかもしれませんが、彼も立派な教員なのでご了承ください。」

へへ。後任が来るまでの代役か…にしてもクラスの上育科生が“彼”という単語に過剰反応して気がするな。やっぱり元女学校なのが影響してるのか？

「ところで深閑先生。栗須君はどこへ行ったのでしょうか？先ほどの授業はしっかりと受けていたのですが…。」

それにしても朋美の猫かぶりはさすがだな。いかにも優等生…って感じた。

「それも含めて理解できると思います。では、入ってきてください。」

?意味がわかんねえぞ、おい。

……そう言われて入ってきた代役は意外な奴だった!!

S i d e : 栗須

「というわけで今日から後任が見つかるまで、代役を引き受けることになりました、栗須くじす 真二まにです。よろしくお願いします。」

クラス中がポカーンとしてるな。やばい、おもしろすぎるww

「あ、あの…… 私の目がおかしいのでしょうか？」

腹黒さんも驚いてるな。大学卒とは言っただけ、本当かどうかは疑ってたのか？

「いや、正常だと思えますよ、彩京さん。では質問がある方は挙手をお願いします。」

予想通り腹黒の手が上がる。にしても手を挙げる姿にも気品が感じられる辺りはさすが上育科生といったところか？

「では、彩京さん。」

「なぜ栗須くんが代理の教員と紹介されたのでしょうか？」

「言葉の通りですけども？私はアメリカで大学を卒業し、国際教員免許を取得しているので、教員として活動しても構いません。特にこの白麗陵は、私立学園ですからある程度の自由もききますし、問題はありません。」

法律上は問題ないらしい。前世にはこんな便利な免許はなかったんだがな。

「それと、今の私は教員なので『栗須くん』という呼び方は頂けませんよ、彩京さん。」

「す、すいません。栗須先生。」

「では、ほかに質問はありませんね。では授業に移ります。」

さて、前任の飯田先生の授業を受け継ぎますか！

――授業終了後

「おい、栗須！なんで先生なんかやってるんだよ。驚いただろうが。」

授業終了直後に秋晴が話しかけてきた。

「俺もいきなり依頼されたんだよ。一応免許があったし、勉強面なら余裕があったから引き受けただけだ。」

「そうか。で、定期テストはどうなるんだ？お前が作るのか？」

「後任が決まらなかったらな。勿論、不正行為がないように特別室で作るらしいけど。職員室でも自室でもまずいからな。」

「そうか……。にしても本当にアメリカの大学卒業してたんだな。少し疑ってたんだが……」

「やっぱり疑ってたか。まあ、そんな感じに見えないだろうし、当然と言えば当然だな。」

自分自身のことを言うのはおかしいが、普通の高校生に見えるからな。そう考えて当然。

……そういえば、深閑に呼ばれてたな。すっかり忘れてた。

「すまん秋晴。ちょっと用事を思い出したわ。行ってくる。」

「了解。行って来い。」

さて、どの教室に行くんだったかな？

「何か悪いことをしたか、俺？」

「いえ、そうではありません。この教室に来てもらったのは、これからの授業についての注意事項をするためです。」

「ならよかった… 指導室に呼び出されたから、まずいことをしたのかと思っただぜ。」

「では確認事項ですが、貴方は第一学年時に行われる情報の授業を3クラス週一回で受け持ってもらいます。」

「ここは前回の話し合いで説明されたな。」

「ここからが補足になるのですが、これから本来授業を受けるべきところで授業を行うことになると思います。その部分で単位を落とされては本末転倒です。なので特別課題を行ってもらい、それによって単位取得とみなしたいと思います。」

それは助かるな。補修授業とか受けてたら、面倒くさいからな。

「了解だ。他にはもうないか？」

「それと… 授業の進め方は前任の飯田先生のカリキュラムに従ってもらいたいのですが、授業方法は問いません。」

？どつという意味だ？

「つまりは、今日のように、『同い年であっても教員と生徒だから』と言って壁を作る必要はないということです。」

「壁を作ったつもりじゃなかったんだがな。まあ深閑がそう感じたんなら、多分みんなが感じたことなんだろうな。気を付ける。」

「あくまでする必要がないだけで、するかしないかは判断に任せます。」

そういう風に壁を作るのはやっぱりよくないな。深閑の助言は毎回役に立つ。

「いえ、ありがたい助言をありがとうございます！」

やっぱり礼を言うべきだな。にしても参考になったな。

「い、いえ……あくまでアドバイスなので。そこまでされると困ります……。」

そこまでされる？……うわっ！深閑の手を握り締めてるし。無意識だったな。

「すまない。いやだったよな、男にいきなり手を握られて。」

「……………嫌ではなかったのですが……むしろもう少しぐらい……（ボソッ）」

何を言ってるのか聞き取れなかったぞ？深閑は一人でぶつぶつ言い始めたし、顔も少し赤いし、どうしたんだ？

「お、い、深閑？顔が少し赤い気がするが大丈夫か？」

「も、問題ありません。では、これでお話は終わりです。次の授業も頑張ってください。」

「ああ、できる限りのことをさせてもらいますよ。」

次は1 - Bだったかな？まあ、なんとかなるだろう。

S i d e : 深閑

いきなり手を握られてしまいました… 彼は無意識だったのでしょうが、意識してしまいました。修行が足りませんね。

それにしても、彼の能力の高さはどこから来ているのでしょうか？マサチューセッツ工科大学をスキップで卒業する頭脳。この時期にあり得ないほどに完成された肉体と身体能力。そして、執事として必要なスキルを完璧に取得する能力。このうちの一つでもあれば、“天才”と呼ばれるものですが、彼はすべてを持ち合わせている。彼についてももう少し調査を入れるべきですね。

…個人的な目的ではないですよ…？

S i d e : 栗 須

その後

残りの一年生のクラス二つの授業をしたが、やっぱり紹介された時点で驚かれ、スキップしていることを公開するとさらに驚かれた。轟はリアクションが気持ち悪かったから、無視をしておいた。無視された轟はテンションが低かった。あのお調子者が一番怖いのは無関心みたいだな。さすがに可哀相だったから今度相手してやるか。うざかったら殴るが。

にしても人生何がどう役立つかわからないよな。暇つぶしに取った資格がこう役立つとは思わなかった。資格は取っておいて損はないということだな…。

「薫。俺はもう少し授業の資料を纏めてから寝るから、先に寝て
もいいぞ。」

「栗須が起きているのに寝てなどいられるか。」

そういつて背中に抱き付かれた。小さいけど、今はさらしを巻いて
いないせいかな、ふくらみが微かに感じられる気がする… 気がする…

「といつても、もう結構遅い時間だ。寝不足でまたお前が体調を崩
したら、俺は自分のことを恨むぞ。」

「分かった… しかし僕はお前が倒れないかどうか心配だ。だから
おまじないみたいなのをしよう。」

そういつて薫が頬にキスをしていった。一瞬だけの接触だったが、
恋愛経験のない俺がドキドキするには十分だった。

「では、お休み。」

そういつて俺に微笑んだ薫の表情は、とても女らしさを感じた。

「たく… 顔が火照って仕事どころじゃないぞ。」

キスマでしたのに初心すぎるな俺は。でも薫に心配をかけさせるの
はまずい。手早く仕事を終わらせるとしよう。

そう考えて、アンサートーカーをフル活用しつつ五分で終わらせた。

特別編 教師って大変そうな仕事だよね…（後書き）

まず注意事項ですが作中の「国際教員免許」なるものは架空の免許です。実際には存在していません。

話は変わりますが、つぎから本当に本編（三巻）に戻ります。

ちなみに主人公はアンサートーカーをあまり使いません。理由は、ハイジャック時みたいに過信しすぎるのを防ぐ訓練みたいなものです。

というわけでまた次回の更新をお待ちください！

1話 宗教って……（前書き）

3日連続投稿ですが、明日からはまた忙しくなります。更新が遅れるかもしれません。

1話 宗教って……

いつも通りの朝だ。天気もいいし、早く走りに行くかな？

「にしても薫はまだ寝てるのか…。」

一緒に走りに行くかどうか聞きたかったが、寝てるんなら仕方がないな。一人で行こう。でも、なんか薫成分が足りない気がするな。

「よし、寝顔でも覗いて薫成分の摂取だ！」

薫成分は生きる基本なんだよ！たぶん…

起こさないように細心の注意を払い、カーテンを引く。

「ふむ。以前は作務衣だったがつい最近はかわいい系のパジャマを着てるな。いい、すごくいい。かわいいよ、薫。」

薫の体がピクンと反応する。

「あ、朝から、なんて恥ずかしいことを言うんだ!？」

「ありゃ、起きてたのか？」

どうやら起きてたみたいだな。まあさっきの言葉は本気だし、聞かれても問題ないがな。

「おはよう、薫。」

「お、おはよう… って、そうじゃない！何であんな恥ずかしいことを朝から言うんだ！？」

「そう思ったから。」

「思ったことを全て口に出すんじゃない！こっちが恥ずかしいだろう…」

モジモジしてる薫がなおさらかわいい。まあ今回は言葉にするのはやめるが。

「で、起きたんだったら一緒に走りにいかないか？」

「あ、ああ。少し待ってくれ。すぐに準備する。ただし、外で待っててくれ。」

「はいよ、覗きはしないから安心しな。」

さてと、外で待つときますかね？

その後は一緒にランニングして、軽い運動で済ませておいた。

―その日の昼休み

「ああ、ルームメイトがほしい…」

「どうしたんだ、秋晴？」

いきなりそんなことを言われても困る。ついでに言つと薫は絶対に譲らん！

「いやさ、自室で授業のこととか日常的なことを話す相手がないつていうのはな… 携帯もないし、結構さびしいんだよ。」

なるほどな。一人暮らしの寂しさみたいなものか？

「慎吾君を譲ろうか？迷惑かもしれないけど…」

おいミケ。轟をペットみたいな扱いで受け渡すんじゃない！一応、人間だ！

「迷惑？なんかあったのか？」

その質問は愚問というやつだよ、秋晴。

「急に歌いだしたり独り言に自分で突っ込んだり… それはまだしも、この前なんか、部屋に戻ったら鏡の前で裸でポーズングしてたんだよ！おまけに『明日の朝まで裸で過ごすんや〜』とか言い出して… 裸のまま、勉強したり、逆立ちしたり、踊ったり… もう人と人は永遠に理解しあえないんじゃないかって……」

ミケが鬱状態に… このままだとよくないかもしれない… 秋晴の部屋に轟をねじ込むべきか？

「ま、まあいつか分かり合えると思うぞ！」

「そうかな…？」

「お、おう！秋晴もそう思うよな？」

「あ、ああ。大丈夫だと思うぞ…。」

いかん、この話題は暗すぎる… だれか助けてください！

「なんやなんや？暗い顔で？もつと明るくいかんと、人生損するで！」

元凶が何を言うか！まあ、空気が入れ替わったのには感謝してやるう。

「それよりすごいで。オレ、さっき『カーテンウォール』の生徒さんを見たんや！」

カーテンウォールか… この後へディエ先輩と秋晴の事件があるんだっただか？

「ええっ！？それ本当！？」

おお！カーテンウォールの話題にミケ復活！

「……カーテンウォール？」

秋晴は分かるわけないよな。

「カーテンウォールっていうのは… ほれ、あれのことだ。」

そういつて薄絹のような幕で囲まれた一角を指さす。

「あの一角はな、宗教上の理由で食事姿を見られてはならないような戒律のためにつくられた一角なんだよ。理解できたか、秋晴？」

「ああ、それは分かったが、あの一角を使ってる奴はいるのか？」

「一人だけな。あ、でも、正確に言うなら二人なのか？」

「どういう意味だ、栗須？」

「それはだな、秋晴。二年の生徒にイスラム教系のアフラム教っていう宗教を信仰してる留学生がいるんだよ。その宗教は制約が多くてな… だから、生まれた時からお付きの侍女がいるらしいぞ。」

「ふ〜ん、まあなんとなくは分かった。」

「しかも一切の雑事は侍女さん任せなあかんらしいわ。よっぽどの富裕層しか帰依出来へんのや。自分でやるのはNGなんやと。」

「滅茶苦茶だな。」

「まあな。普段から人目は避けてるらしいな。授業は机ごとを薄い幕で囲って受けるし、体育はほぼ見学。徹底しているよな。」

まあ、徹底しすぎてる気もするがな。

「さすが名門って感じだな。そんなたいそうな奴までいるとはな。」

「他にもいるぞ。30代以上続く名家とか、小国のお姫様とか。」

「うわ、そんなのもいるのか？」

「ああ、単なる金持ちのお嬢様が集まってるわけじゃないってことだ。」

にしても、アイシエ先輩イベントはどうしようかね？

― 数日後の昼休み

「……そういう訳ですので、本当に申し訳ないのですが「死んでくださいませ！」」

「……はあ？あんだ、何を「おおおっ!?!?」

おゝ、原作通りに秋晴がアイシエフラグを立てたか。まあアイシエフラグは志望フラグと言い換えることも可能だから、厄介なフラグなんだがな。

「な、な、なっ……。」

「避けないでくださいませ。あまり時間が過ぎてしまつと誰かに見つかる可能性が……」

ヒ首あいくちを握った手が秋晴へと迫る。

「そこまでだ。……大丈夫か、秋晴？」

そのヒ首の先を真剣白羽どりの要領で確保する。にしても、あの剣速だと本気で死ぬぞ。

「まったく… お前は何をしたんだよ？ いやなんとなくは分かるが……」

大体わかりますよ。原作読んでるから。

「離してくださいませ。その男を処理しなくては、お嬢様が……」

「話し合いみたいに、もう少し穏便に済ませられないのか？」

「この判断が、最も確実です。ですから、早くその手を……え？」

どうした？ まあ少し力が抜けたから、楽になったな。

「お、お嬢様？……いえ、お優しいアイシエお嬢様がこのような行為を嫌われているのはこのへデイエが十分に存じ上げておりますが……サテンここで彼を仕留め証拠隠滅を図らなければ、出なければお嬢様が……！」

「どうやら、アイシエ先輩が説得してくれてるみたいだな。少し黙って待つとしよう。……にしても、この匕首は持つておかないといけないのか？」

―― 5分後

「……分かりました、お嬢様。」

「うん？結果が出たみたいだな。おそらく原作通りに“結婚”話かな？」

「確認ですが、そちらの貴方は五月末に編入されてこられた従育科生で間違いありませんね？確か日野秋晴という名の。」

「……ああ、そうだよ。間違いない。」

「ドンマイだ、秋晴……」

午後の授業も終わった放課後。腹黒、ドリル、轟、俺、そして秋晴の五人はカフェテラスに集合していた。まあ、昼休みの食堂である二人に連行されて、カーテンウォールの中に入っていったんだから当然の結果か？

「ちゃんと話す……その代り、協力してくれ。」

「協力ってなんですか？」

「協力っていうより相談って感じた。まずは説明したいと思う……ってそんなに睨むな、そのドリル。」

「誰がっ！………フン、まあいいですね。このままでは日が暮れてしまいます、さっさと話すがいいですね。」

「なんつつーか……色んな不幸な事故があつてアイシエ先輩の裸を見ちまつて、そうしたら戒律がどうこうって婚約を迫られてるんだよ。」

「まあ秋晴、そういうな。死ぬよりはましだろ？」

殺されるよりはましだけど、あんまり知らない相手との結婚も嫌だな。

「いつか何か突拍子もないことをしでかすとは思っていましたが……。」

「……婦女暴行未遂で訴えられても仕方ありませんわ、この女の敵」

「正しく謎のベールに包まれつつたのを無理矢理に剥ぎとるなんて…やるなあつきー、うらやま……グベフツ!!」

とりあえず轟は殴っておいた。これ以上参加してもメリットはなさそうだったし。

「とりあえずだ、俺たちで秋晴のために解決策を授けよう…っっていうことだ。」

「アーフラム教は不便かつ理不尽らしい。連行された時も男の前を歩いちゃいけないとか言っつて前を歩かされたしな。他にも基本的に人と話したりは禁止だし、素顔を見せるのは禁止、食事を見られるどころか自分で食べるのも禁止。代わりに従者がすべてをこなすらしいぞ。」

「そして、素肌をみせていいのは宣誓を行った特定認可医か生涯の伴侶…まあこの場合は秋晴のことだな、だけなんだとさ。」

「ベタな展開だとは自分でも自覚してるんだがな…」

「普通に話し合ってみたんですの？」

ドリル… しなかつたわけないだろ…

「『行方不明と不幸な事故で天国行きのどっちがいいですか』って聞かれたんだよ… 死人とは結婚できないからな。」

俺の目の届く範囲なら助けられるが、常に近くにいるわけじゃない。どうにかしないといけない。

「とりあえず、時間稼ぎしてもらったんだ。けど、そう長くもない。三日しかないんだ。何かいいアイデアはないか？」

原作通りの解決策を伝えるべきか？でも、秋晴のアイシエ先輩フラグを潰しかねんしやめておくべきか…？

「そういえば… 将来を誓った相手がすでにいるっていう設定はダメなのか？」

「秋晴、それは無理だ。彼女の国は一夫多妻制の国だしな。第一に相手はどうするつもりだったんだ？」

「私はしませんわよ、そんなくだらない真似。」

「フレイムハートさんは逃げ腰ですね。」

腹黒… ケンカ売るなよ…

「ちょっと、誰が逃げ腰ですよっ！？」

「あら、違うんですか？てっきり彼女役を演じる自信がないのかと思いました。」

「その程度で臆するわけありませんわっ！」

「ああ、それじゃあハデムさんと張る自信がないんですね。おそろくですけど、相当の美人でしょうし…」

「な、な、なっ……！」

いい加減にしるよ、おい！

「ケンカは後にしていただけませんかね、お嬢様方。それ以上の口論はお見苦しいだけだと存じ上げますが？」

「……………」

「ま、まあセルニアはあれだろ、俺の相手がやりたくないだけなんだろう？ 第一、効果がないんだから、相手役の話なんかしなくてもいいだろ？」

「裁判沙汰なら勝てるかもしれませんが、結局はヘディエさんの信仰心と力技の前にねじ伏せられるかもしれませんね？」

「そうか……………」

「……………なあセルニア、いい案ないか？ 身分違いの結婚なんて〜みたいな納め方はダメなのか？」

「……………そういうことですの。」

まあ、ヨーロッパとかだとそういう話は結構あるだろうな。生粋の日本生まれのお嬢様だな。

「確かにいつの時代にもメイドやフットマンとの不義の話は存在しますし、婚姻関係に発展することもありますわ。大抵は暗黙の了解で外に困うものですが、まれに後妻に納まることもあるようですわ

ね。それは社交界の笑いの種や蔑みの対象になる、スキャンダルと言えますわね。」

「おお……！」

「——ですけど、宗教国なら家の名誉よりも戒律が重視されますので、苦い思いを胸に秘めても、反対する親族はいないでしょうね。」

「……………おお。」

秋晴のテンションがアップダウンしてるな……

「何か、何かないのか？次につながる一打だけでも……………！」

「そんなに焦らなくても、落ち着いて構えていれば大丈夫ですよ。」

「……………根拠は？」

「特にありませんよ。」

嘘付け。あるんだろうが。

……………この気配は……来たか。

「こちらに居ましたか、旦那様。」

「誰が旦那様だ。あの話は絶賛保留中だろうが。」

「お嬢様の意向なのです、仕方がありません諦めてくださいませ。私も浜辺に打ち上げられた藻屑以下のゴミ野郎としか思えない相手

を旦那様と呼ぶのは…… 栗須様…… その殺気はどういう意味ですか？

「友人を侮辱するような相手に対する当然の態度ではありませんか？」

「……………」 (睨み合い)

「お、おい！と、ところでお前は何のために来たんだ？」

「……そうでした。アイシエお嬢様が旦那様と過ごしたいと仰っております、ですからご同行くださいませ。」

「……………」、分かった。それじゃあ、行ってくる。作戦会議し足りないから、できれば残っていてくれ。」

そういつて、秋晴は連れて行かれたのだった。頑張れ秋晴。原作通りならたぶん大丈夫だ…… たぶん……

――次回に続く

1話 宗教って……（後書き）

というわけで、話が続けるのに更新が遅れるという最悪の事態です。極力頑張りますので、待っててください。

最近、毎回のごとく薫が出てきてる気がする…。メインヒロインになりつつあるのかな？作者自身でもわかりません。もしかしたら、薫メインの3股関係になるかもしれません。今は、保留しますが。

ちなみに今回の話の中で本来はみみなが出てくる場所に栗須が出てきたのは、秋晴とみみな仲が原作通りではないからです。みみな秋晴に対する認識は「怖そうで、無理やり抱き着いてきた人」というかなり悪いイメージを持っています。そんなわけで、みみなは不参加でした。みみな押しの方はご了承くださいm(_____)m

では、次回更新をお待ちください！

2話 主人公の頭のよさっぴていまいち伝わってこないよね…（前書き）

前編よりも短いな

それはそうと、お気に入り登録数が500件だと……!?

50件もしくは5件の間違えじゃないんですか？違うんですか！

というわけで、そのうちに何かしらで記念物語を書く予定。（予定は未定ですw）

2話 主人公の頭のよさっぴていまいち伝わってこないよね…

あらすじ：・秋晴、エロハプニングw

・秋晴、九死に一生を得る

・秋晴、解決策考案中

「お、帰ってきたか秋晴。」

「あ、ああ、ただいま…。」

なんだ？出ていく前より若干老けたような気がするぞ？

「で、どうだった？」

「そうや！どんなエロエロで男心がくすぐられるイベントがあったのか、一から十まで、しっかり聞かせてもら…：ギュボン！」

轟退場（本日2回目）。決まり手はスカイアッパー（by栗須）。

いつの間に復活してやがった？本当にゴキブリ並みの生命力だな。

「あのバカは放っておいて、実際どんな話があったんだ？お前にとつていい話か？悪い話か？」

「…あまりいい話じゃないかもな。あのお嬢様は、結婚に文句はないそうさ。むしろ運眼さえ感じるとか言ってた… いや書いてたか？」

「筆談かなんかだったのか？」

アーフラム教は、自分で人としやべるのも禁止だったな。本当にめんどくさい宗教だな。

「そつだ。従者が席を外してたから、筆談だったな。」

「…つて、そんなことは、今は重要じゃない。これからどうするか
が重要なんだつた！」

「……。でも実際、俺はどうすればいいんだ、栗須？」

「それを話し合うんだろ？」

「いやさ、基本方針だけでも決めておくべきだろ？朋美もドリルも、
いい案ないのか？」

「…私の髪を掘削機扱いなど…！やはり許せませんわ！あなたによ
うな蛮人にするアドバイス等ありませんわ！」

「まあまあ大変ですね、秋晴くん。では、フレイムハートさんはア
ドバイスを出せるだけの知識がないそうなので、私がアドバイスし
ましようか？」

「キーン！アドバイスぐらいできますわよ！やって見せますわ！」

「無理なさる必要はありませんよ、フレイムハートさん？」

「無理などしていませんわ！確かアーフラム教は、時代の変化に合
わせて少し内容が変化した部分があったはずですわ。そこから攻め

ていくのはいかがでしょうか？」

いい線ついてるな、ドリル。内容まで教えてあげたら、100点満点だったのにな。

「そうなのか…。アーフラム教を調べてみるのも、一つの手か？戦に勝つには、まず相手をよく知る必要があるしな。」

「戦って…、大げさだな。まあ孫子には、『彼を知り己を知れば百戦殆からず』って言葉もあるぐらいだしな。」

「どういう意味なんだ、栗須？」

「まあ意味は、『敵の実力や現状をしっかりと把握し、自分自身のことをよくわきまえて戦えば、なんと戦っても、勝つことができるものです。なにか問題を解決するときも、その内容を吟味し、自分の力量を認識したうえで対処すれば、うまくいくものです。』ってことだ。」

まあお前の場合は、自分のことができることを見極めて、相手の事情を把握したうえで最善を尽くすべきだろうな。」

「「「……………」」」

なんで、みんな黙る？変なこと言ったか、俺？

「な、なんだよ？」

「…いや、栗須が頭よさそうな発言したからびっくりしただけだ…」

…！俺、すでに大卒！

「アメリカで大学卒業してるって言っただろうが！まだ信じてなかったのか！？なんなら卒業写真持ってこようか！？」

「いや、分かってはいるんだがな…。」

「だが…？」

「…頭よさそうな雰囲気が出てないかな…」「」

Orz 泣いてもいいですかね…？

「…何でだ…？」

「だってな、お前いつもバカみたいな行動とるし、（主に従育科の体力づくり授業）」

「授業中は基本的に授業内容とは別のことをしていますし（深閑の担当授業はまともに受けてます）、」

「頭の良さを確認できるような出来事がありませんでしたから。」

「…はつきり言って、知性的キャラではないな（ありませんね）（ありませんわね）」「」

「それは俺が、バカっぽい、ってことか……？」

「え〜と…まあぶっちゃけると、そうかもな…」

.....。

「お、おい、栗須？」

.....。

「ちょっとやりすぎちまったか？栗須の魂が帰ってこないぞ……。」

そのショックから立ち直り、現世に復帰w したのは夕方のことだった……。何故か自室に戻っていたが、どうやって戻ったのか分からない。しかも、茫然自失の俺を見た薫は半泣き状態だった。心配かけた意味でも、いろいろと苦い思い出になった……

「すまん、薫。心配かけて。」

「何があっただ？」

「.....。」

「い、言いたくないなら、別にいいんだ……。」

「いや、言うよ。薫、お前にとって俺って知性的キャラというよりも、バカっぽいキャラに見えるか？」

「僕にとって、栗須は……好きな人であって、知性的とか、バカっぽいとかは特に感じない……。」

……………。

やばい、薫の発言可愛すぎるだろ……（もちろん表情、仕草も含む）。俺の悩みってなんだったっけ？もうどうでもよくなっちまったな！

「~~~~~」

「く、栗須？ど、どうしたんだ？」

「いや、別に……。幸せだな、と思ってさ。」

好きな相手に好かれているのって、最高に幸せだよな。

「そ、そうか。ならよかった。」

幸せだな~~~~~。

「そろそろ飯の時間だな。」

幸せな時間は過ぎるのは早いもので、びっくりした。

「そうだな。じゃあ行くか、薫？」

「ああ。ところで、日野も誘うのか？」

薫と日野は友人の友人的な紹介で知り合い程度にはなった。同じクラスだし、仲がいいことは悪くない。

「そのつもりだ。」

「じゃあ、日野の部屋によって行こう。」

「……なんで開かないんだ？」

いつもならドアが開くか、返事くらいはあるのに、無反応なのはおかしいぞ……？原作通りに、アイシェ自室侵入が起きているのか？

「薫、ちょっと外から確かめてきてくれないか？」

「ああ、分かった。」

そういつて、薫は外に向かって歩いて行った。

「……おい、これはどういうことだ、ヘディエ先輩？」

「おや、まさか分かっていたとは思いませんでした。」

「ちっ！やっぱりお前の差し金か。なら、早く強行突破しないとな。」

「通すとお思いですか？お嬢様のためなら、何人たりとも通すわけにはいきません。」

そういつて、匕首を構えるヘディエ。ならこっちも、少し本気を出しましょうか。

S i d e : ヘディエ

はつきり言つて、舐めすぎていたようです。あのくそ虫の知り合いならば、大した実力はないと思つていたのですが…

「ほら、足元がお留守だよ。」

そういわれて、ギリギリのところ回避する。防戦一方… 予想もしなかった事態。ですが、お嬢様の願いならば、かなえてみせる！
しかし、一瞬の隙も見当たらない…！

「はっ！」

私は一瞬の隙を突き、匕首を彼の喉元に向けて突き出す。彼ならば致命傷にはならないだろうが、軽傷では済まないはず…！

Side：栗須

「残念でした。」

一瞬の隙…に見えただろうな。俺が意識的に作り出した“隙”に引つかけてくれた。これで、終わりかな？

「な……………！！！」

大きく開かれた眼。やっぱり、“隙”に騙されたか。

そう感じつつ、手刀を首に向けようとしたとき、「パリーン、ガシヤーン」という音が、秋晴の部屋から聞こえた。

二人の動きは止まる。

「ようやくか…、薫。」

「…どういう意味ですか？」

「窓側から侵入したんだよ、大地薫が。」

「しかし、先ほどは外から確かめて来い…とだけしか言っていなかったはずですよ。」

「薫と事前に打ち合わせしとけば、いくらでもやり方はある。そちらの動きはある程度、予測出来てたんでな。」

秋晴の事情はある程度まで伝えてあったから、俺が事前に侵入するように頼んでおいた。予測は原作知識によってだがな… せいこいw

「では、お嬢様は!？」

「早く行くべきだろうな？ほら急いだほうがいいんじゃないか？」

「ちっ！お嬢様!!!」

そういうのが先か、物凄い速度で秋晴の部屋に入ってしまった。

俺？部屋の中に入れるわけじゃないじゃん。原作通りなら、夫以外の男に肌を見せたら、自殺しちまうんだぞ？部屋に入って誰が得するんだ？

「頑張れよ、秋晴、薫。」

応援だけはしとこうか。

その後― in 自室

「…。栗須、ある程度分かっていて、僕を部屋の中に侵入させたな…?」

「まあな。ああ動くのは分かっていたし、本当の男だったらまずいからな。」

「確かに、最善かもしれないが、もしばれたらどうするんだ!？」

「まあ、心配するな。家業を継がされそうになったら、力づくでも

OHANASHI しに行つてやるから。」

「“お話”の意味に不安が残るんだが…。でも、栗須に頼つてもいいんだな?」

「もちろんだろ。それとも俺の所に“永久就職”するか?」

「な、な、な、な、な、な！？」

慌てているかつ可愛い薫が落ち着くまで、10分近くかかったとだけ報告しておく。

ちなみに、原作通りにアイシエ先輩は秋晴を狙いつつ一年間を過ごすみたいだ。事故でもOKなものな。ある意味一途な先輩だよ、本当に。

2話 主人公の頭のよさっぴていまいち伝わってこないよね…（後書き）

というわけで、アイシエ先輩の説得は丸投げしました。だって主人公が部屋にいたら、アイシエ先輩自害してしまいますので…

ちなみにヘディエVS栗須における力では

実戦経験は若干ヘディエの方が上。
戦闘能力はかなり栗須の方が上。

よって栗須の優勢で進みました。

原作通りなら次は四季鏡姉妹ですけど…必要かな？あの二人に需要なかったしな…
勝手に秋晴が解決したことにしましょうか？

読みたい人がいたら、書きますのでコメントください。なかったら飛ばすかもしれません。

では、次回更新をお待ちください！

3話 Summer Vacation! (前書き)

原作の第7話？何それおいしいの？

すいません、あそこは完全スルーします。理由は、余計なフラグ立ての回避と、家族ネタの時は栗須の話が重たくなるからです。四季鏡姉妹単体だと話を作りにくいですね。

すいません…

3話 Summer Vacation!

「もう少しで夏休みだ〜!」

「そ、そうだな。でもいきなりどうしたんだ、栗須?」

「夏休みだぞ、薫!あの、夏休みが来るんだぞ!」

「そのハイテンションの理由がわからない…。」

「…………!そうか、アメリカ生活が長いから夏休みの期間を間違えた…。」

「アメリカは日本より長いらしいな。」

「そうだ、だいたい2〜3か月くらいだな…。日本では1か月だけだなんて…。テンション下がるな…。」

「ま、まあ1か月はあるんだからいいじゃないか。それに、ぼ、僕とデートしたくないのか?」

そういえば、まともなデートは今までにしたことがなかったりする。俺が教員の仕事を引き受けてから休日もそれなりに忙しくて、外にデートに行く余裕がなかったのが主な理由だ。

「もちろんしたいし、絶対に行くぞ!とところで、夏休みの間は、どれくらいの間は実家に帰るんだ?予定も決めないといけないし、把握しておきたいんだが。」

「盆になったら、1週間程度帰る予定だ。あとは基本的に白麗陵にいる予定だ。栗須はどうなんだ？」

実家に帰っても一人だしな……。盆になったら墓参りに行くのは当然だが、それ以外の間に実家に帰るのは、正直気が進まない。

「……いや、俺は実家には墓参りに行くくらいで泊まらないと思う。だから、夏休みのほとんどはここにいるかな……？」

「僕はなにか聞いてはいけないことを聞いてしまったのか？」

どうにも、俺が暗い気持ちになったのがばれたみたいだな。ポーカ―フェイスでごまかしたつもりだったんだがな……。

「いや、ただな……。」

「ただ……？」

「実家に帰るっていうのは、両親の問題もあつてな……。」

「両親と仲が悪いのか？」

「いや二人とも、もうここにはいないんだ……。去年の冬に事件に巻き込まれてな……。」

「……………」

二人の無言が続く……。こんな雰囲気は好きじゃないな、よしこんな雰囲気は変えるか！

「まあ、踏ん切りはついてるんだ。あとは俺自身の問題さ。だから気にするな。」

「で、でも僕は栗須の彼女なんだから…。」

「その気持ちは嬉しいけど、やっぱり自分の気持ちを整理するのは自分自身だけにしか出来ないことだから。でも、支援はしてほしいかな？」

「支援？具体的には何をすればいいんだ？」

「…そうだな。たとえば、従育科のメイド服を着て俺にご奉仕してくれると俺の気持ちの整理に役立つかもな。」

「何を言ってるんだ、貴様は！？第一、“ご奉仕”は栗須がされたいただけじゃないのか!？」

「チツ、ばれたか。」

やっぱり、薫とはこういう明るい雰囲気でご過ごしたいな。和むし。

「とじろで、あそこにいるのは日野じゃないのか？」

「うん？ああ、そつだな。セルニアと彩京もいるし、しかも少し揉めてる感じだな。」

「行ってみるのか？」

「当然。あんな面白そうなことしてるのにスルーするという選択肢は、俺の中には存在しない！」

「はあ、本当に物好きだな…。」

さて、どんな話をしてるんでしょうね？楽しみだな。

「何やってんだ、お前ら？」

「おう、栗須か。いやな、次の従育科試験の話だな。」

「次の従育科試験？ああ、あの2泊3日の間、パートナーにお供するやつか。」

「そつだ。」

「あら、大地君もいらっしやっただんですか？ちょうどよかったです。」

腹黒く。薫をパートナーに指名するのか？まあ、事情をある程度知ってるあいつはベストかどうかは置いておいても、悪くないパートナーか？

「なんだ…？」

「その試験のパートナーを引き受けてくれませんか？」

「い、いや……泊まりとなると、僕は……。」

「あ、もちろん即答で無くてもいいですよ？無理強ひもしませんし、駄目ならば遠慮なくそう言ってくださいね？」

そういつて、混乱する薫の耳元で何かを囁く。

——薫の表情が目に見えて固まった。

「……………分かった。その誘い、ありがたく受けさせてもらう。」

やっぱりOKしたか。まあ、腹黒なら悪いようにはしないだろうし、安全か？

「俺も試験パートナー探さないといけないな。」

「栗須くんは、問題ないのではないのでしょうか？」

「どつという意味だ？」

「毎回、結構な数のパートナーカードをもらっているようですし、それに…。」

「それに…?」

「ほら、来ましたよ。行ったほうがいいんじゃないですか?」

そういつて、俺の後ろ側を指さす腹黒。その先には…

「よう、みみな。こんなところでどうしたんだ?」

腹黒が指差した先には、みみながいた。ちょっと慌ててる感じがしたが、どうかしたんだらうか?

「え、え〜とね…。ちょっと栗須君にお話が合ってたね…。」

「お話?何か俺に用でもあったのか?」

「う、うん…。あ、あのね…。」

「ふむ、どうした？」

「きよ、今日はいい天気だね!？」

そんな大声で言わんでも…。確かにいい天気だが。

「そうだな。」

「そうじゃなくて!今日は頼みごとがあっってきたの…。」

「なんだ？」

「え」と、今度のね…従育科試験のパートナーでもう決めたのかな…?」

「まだ決めてないけど、それがどうかしたのか？」

「(良かった…)だ、だったら、み、みみなをパートナーに指名してくれないかな？」

「それはうれしい申し出だけど、泊まりがけだぞ?みみなの両親はOKしたのか？」

みみなが男を連れていきなり実家に帰ったら、両親がびっくりするだろうな。両親の許可が無いと、さすがにまずい気がする。

「そ、そこは一応許可は取ったよ。パパもママもいって言ったもん!」

なら大丈夫かな?

「分かった。なら喜んでパートナーに指名させてもらいます。」

「う、うん！」

みみながすごい笑顔なんだが、どうしたんだろうか？

みみなをパートナーに指名した後で、薫に尋問された。その後、小さな声で「みみな先輩か…。僕は何か手を打つべきなのか…？」と呟いていた。意味はよくわからなかったが。

――夏休み

東京駅からJR長野新幹線で軽井沢駅まで1時間ちよつとで着いた。みみなの実家は軽井沢ではないが、軽井沢にはみみなが絵を描くための別荘があるんだそうだ。絵を描くだけのためとは、すごいな。気温は都内に比べたら信じられないくらい涼しいし、駅からはすぐらしいので歩いていくことにしたんだが…。

「おい、みみな。やっぱり歩くのはつらいんじゃないか？」

「そ、そんなことないもん…。」

といつても、1km過ぎたあたりから息が荒いんだが…。荷物はすべて俺が持っているが、体力のないみみなには長すぎたか？

「無理すんなって。ホレ。」

「な、何をするの！？お、降ろして〜！」

「暴れるなって。落ちるぞ。」

「…う、うん。」

肩車でみみなを担いだら少し抵抗されたが、疲れていたのかすぐに大人しくなった。それにしても、軽いな。

「で、あとどれくらいかかるんだ？」

「も、もう少しで着くはずだけど…。」

「そうか。ならこのままいくぞ。」

「え、え、このままいくの？は、恥ずかしいよ…。」

まあ19歳の女の子が肩車されるのは恥ずかしいかもしれないな。

「でも歩くのはつらいだろ？」

「そうだけど…。でも少しぐらい我慢できるし…。」

「我慢はよくないぞ。人に頼るってことも覚えないと。」

「でも、栗須くんはつらくないの?」

全然辛くないな。みみなは軽いし、第一、ラカンボディーならこの10倍でも問題はないだろうしな。

「いや、全然。むしろ余裕すぎて訓練にもならないくらいかな?」

「そうかな…。ならいいけど。」

「じゃあ、出発〜進行〜!」

「きゃ、キヤーツ!」

少しスピード出しすぎたか? まあ怪我しなければ大丈夫だろ。

「で、ここがみみなのお別荘か?」

「そ、そうだけど…。歩くのが早すぎるよ！？みみな、壊れちゃうかと思っただよ…。」

「すまん、すまん、ついな。みみなが反応が良かったもんで。止まらなかつたんだよ。」

「う。次からは優しくしてね…？」

「勿論。それじゃあさっそく、別荘に突入しますか。」

「え！…ち、ちょっと待って〜。」

ピンポーン。呼び鈴を鳴らす。別荘の中に誰かいる気配があるから、だれか出てくるだろう。

「あら、みみな帰ったの……？」

別荘内から出てきたのは、20代くらいの小柄な女性。誰だろうか？メイド？

「く、栗須くん！降ろして〜！」

「あ、すまん。忘れてた。」

そういって、ゆっくりとみみなを下におろす。

「仲がいいんですね。娘のみみなが楽しそうでしたです。」

”娘”？というとは…？

「ああ、申し遅れました。私はみみな之母の桜沢まりなです。みみながお世話になっていました。」

「ど、どうも、桜沢みみなさんの従育科試験のパートナーを務めさせて頂いています、栗須真二です。3日間よろしくお願いします。」

「ふふふ。そんなにかしこまった態度でなくてもいいですよ。」

「そ、そうですね？でも礼儀は重要なので。」

「まあ、立ち話もなんですから、中に入りなさいな。」

「ありがとうございます。」

それにしても、19歳の娘がいるとは思えないな……。みみなは口リつぽさは遺伝なのか？

そんなくだらないことを考えながら、俺、みみな、まりなさんの3人は、別荘の中に入っていった。

― 続く。

3話 Summer Vacation! (後書き)

みななの母は架空設定です。もし原作で出てきたら、内容をいじります。

この後は、みみなと…… ハーレム絶賛進行中です。

次の更新をお待ちください！

4話 期待の重圧（前書き）

前回の続きです。まだまだ続きますよ。

4話 期待の重圧

あらすじ…夏休み突入

・みみなのお別荘へ

「みみなは、学園でうまくやっていますか？」

「うん…。どうでしょうか？まあ、悪くはないと思います。」

「ふ、二人とも、そういう会話はやめてほしいかも…。」

まあ、こんな会話は本人の前でするものではないな。ちなみに、みなのお父さんは海外出張中で帰ってこれないらしい。

「ところで、みみなのお母さん。」

「私のことは、まりなと呼んでもらっていいですよ。」

「では、まりなさん。今回の従育科試験の趣旨には、もちろんパートナーのお供という役割もあるのですが、実際に働く使用人の方々が主人に対してどのように接し、どのくらいの仕事をこなしているのかを視察するという意味も込められています。なので、できれば実際に働く姿を見学させていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

「勿論、良いですよ。章子^{ちやうし}さん、来てください。」

「何かご用でしょうか？」

そう言っただけ現れたのは、20代後半ぐらいの女性。服装はメイド服。

「こちらの方は、栗須真二さん。みみなの通っている学園の従育科生よ。今回は、使用人の仕事を見学したいそうだから、見せてあげてちょうだい。」

「分かりました、奥様。私は、早川^{はやかわ}章子^{あきこ}と申します。以後、お見知りおきを。」

「こちらこそよろしく願います。さっそくで悪いのですが、仕事内容を見せてもらえますか？」

「勿論でございます。ところで、お嬢様はいかがなさいますか？」

そう言われたみみは少し悩んでいるようだった。

「え〜と…。特にすることはなさそうだから、部屋で休んでいようかな…?」

「栗須くんがいないと面白くないものね?」

そうまりなさんが言った瞬間、みみなの顔が真っ赤になった。どうしたんだ?特に恥ずかしいことは言われてなかったと思うが…。

「そ、そ、そんなことないもんっ!ただ、ちょっと疲れたただけだもんっ!」

「ふふふ。そういうことにおいてあげるわ。」

まあ確かに歩き疲れているだろうから休むべきかもしれないな。でもずっと休むのも退屈だろうな。どこかへ付き合っただけのものも、従育科生のパートナーとして、みみなの友達として、当然だな。

「みみな。俺の見学が終わったら、みみなのお供をしようか？どこか行きたいところがあったらだけど。」

「じ、じゃあ、絵を描きに行きたいかな…。」

「了解。終わったら、みみなを呼び行くから、待っていてくれ。」

「う、うん。分かったよ。」

さあ、まずは見学だな。

「でも、先に昼ごはんにしましょうね。」

「ありがとうございます。」

確かにちょうどいい時間だった。気分的には見学のノリだったけど、そういわれるとお腹が減ってきたな。

「では、ご案内いたします。」

出てきた料理は、本格的でおいしかったとだけ言っておく。

―見学中。（昼飯）PM3:00ぐらいまで）

「…ここは、どうしてこのような感じになってるんですか？」

「ここはですね、もしも外れた時などに危険がないように配慮しているからそうなっているんですよ。」

「なるほど。」

章子さんの説明は分かりやすい。しかも丁寧に細かいことまで教えてくれるから、とてもためになる。深閑が今回の課題を出した理由がよくわかるな。

ちなみにこの別荘には、常駐の使用人はいないそうだ。今、この別荘にいる使用人は3人。1人は主人お付の専属メイド、つまり章子さんのことだ。残りの二人は、期間限定の雇われ使用人だ。といっても、ほとんど毎年同じ人を採用するから仕事内容を一々説明する必要はほとんどないらしい。

「…といったところでしょうか？基本的な仕事は以上です。この後に本来は、夕食の仕込があるのですが、今日は奥様がお嬢様に手料理を作って差し上げたいそうなので、今日の仕込はありません。」

「そうですか。優しいお母さんですね。」

「ええ、奥様はお嬢様をととても大切になさっていらっしやいますか

ら。旦那様も言うつまでもありませんが。」

「親バカっていうやつですか？」

「奥様は、そうでもないかもしれませんが、旦那様は…。」

「なんとなくわかりました。」

「ええ、つい先日も…っと、これは口が滑りそうになりました。それはそうと、そろそろお嬢様をお迎えに行かれてはいかがでしょうか？」

「ちょっと内容が気になりますね…。でも、みみなを待たせすぎるのもよくないので、もう行きますね？」

「そうしてあげてください。」

にしても、先日は何があったんだらうか？ちょっとおもしろそうだったから聞いてみたかったな…。

「危づく口が滑るところでした…。」

危なかったですね。本人の前で話すような内容ではありませんし、しつこく聞いてこなかったので助かりました。

「それにしてもあの時は大変でしたね…。」

お嬢様からの“とある”メールを見た時の旦那様はご乱心かと思いました。確かあの時の内容は…

From: みみな

タイトル: パパへ

本文:

今日は、白麗陵の期末試験の日だったよ。そろそろ夏休みだね。

前にもメールに書いた栗須くんが仲良くしてくれているので、つい最近の学園生活はとても楽しいよ。それにこの前も栗須くんに助けてもらっちゃったよ…。助けてもらってばかりで、少し申し訳ないけど…。

今度の夏休みには、従育科の試験の一環で栗須くんも一緒に別荘に行くから会ってくれるところうれしいかも。それじゃあ元気でね。

みみなより

…という内容でした。旦那様は、両親に頼りつきりだったお嬢様が頼れる“男性”ができたことが気に入らない様子でした。というよりは、むしろ嫉妬でしょうか？

今回もその男性に会いたくないがために海外に出張したぐらいですから、よっぽど悔しかったのでしょうか。

といっても、奥様はかなり歓迎されているみたいですが…。

「おい、みんな！こっちの見学は終わったぞ。」

みみな部屋の前でそう叫ぶと、部屋の中から反応があった。

「ち、ちょっと待って！すぐ出るから。」

少し慌てた感じの返事が返ってきた。そんなに慌てなくても待つのに。

「お、お待たせ…。」

― 数分後

両手に絵描きセットを持ったみみなが部屋から出てきた。まあ、大
体読めてたけどな。

「どこかに絵を描きに行くのか？」

「うん。いつも絵を描くところが近くにあるんだよ。そこに行こう
かなと…。」

「了解。それと、その荷物重いだろ？持つよ。」

実際、重そうにしてたしあのままだったら目的地に着く前に力尽き
そうだったし…。

「あ、ありがとう…。」

「いって。それじゃあ行くぞ！道案内よろしく。」

「じゃあ、みみなについてきてね？」

「おっ。」

そういつてみみなが歩き出したけど、歩幅が小さいから簡単についていけるな。

「ここがみみなのお気に入りの場所だよ。」

「へ〜。確かにいいところだな。」

その場所は学園のみみなのお気に入りの場所に似た雰囲気があったが、こっちのほうが格段に落ち着いた雰囲気だった。

「ここは学園の秘密の場所に似てるな。」

「う〜ん、みみなとしてはあそこがここに似ているって言うほうが正しいかな?」

ああ、そういうことか。

「ところで、晩飯までそんなに時間があるわけじゃないけど、描かなくてもいいの?」

「これから描くよ。」

今回は見学しておこう……。前回みたいなムンクの叫びみたいな作品はもうごりごりだ……。

「みんな、楽しいか？」

「え？た、楽しいよ？」

「そうか、ならいいんだ。」

つい最近のみみなは絵を描いているときもあまり楽しそうに見えない。気のせいかもしれないが……。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「いや、つい最近のみみなは絵を描いているときもそんなに楽しそうに見えないというか……。勘違いだったらすまん。」

「……………」

「図星みたいだな……。」

「何かあったのか？」

「…えくとね…。ついでに最近は悩み事があったね…。」

「どんな悩みだ？俺が聞いても構わないなら聞かせてほしい。」

「みみなはだれのために絵を描いているのかなって…分からなくなつて…。」

「自分のためじゃないのか？」

「普通はそうだろ？勉強だつてそうだし。」

「最初はね、そうだったんだよ。でも、みみなが有名になってからは、観る人のために描いているんじゃないかと思うようになって…。」

「周りからの期待が重すぎるのか？」

「ちよつとね…。」

「ちよつとどころではなさそうだけどな…。」

「みみなは好きなようにするのが一番だと思うぞ、俺は。描きたくないときは描く必要はないし、描きたい時は自分の描きたいものを描けばいい。みみなはまだプロとして活動してるわけじゃないんだから。」

「で、でも、みみなは絵を待っている人たちがいるんだよ！そんな人たちがいるのに、描かないなんていう選択は選べないよ…。」

期待にこたえることへの義務感か…。プロの絵描きなら期待に応える義務はある。でもみみなはまだ学生だ。持たなくてもいい義務感を待ったのは、周りの大人（おそらくだが両親は過剰な期待はしてないだろうけど）の影響かな？

「そんな身勝手な期待は放っておけて。待つのは勝手だけど、みみなが無理にそれに合わせる必要はないんだよ。第一、そんな無理をして作った絵が本当にいい絵なのか？」

「で、でも…。」

「でも…じゃない。だったら聞くが、みみなの両親は『絵を描け！』って言うってくるのか？」

「言うてこないけど…。」

まあ、聞いた話と会った感想を総合すれば、言うてこないとは思っていたがな。

「だろうな。たぶんだけど、みみなの両親が願っているのは、みみなの健康とか幸せとか、そういうものであって、みみなが描いた絵で好評価を得るとかじゃないと思うんだが。」

「……………」

「描きたくないときに周囲がうるさく言うてきたら、俺が黙らせてやる。それでも、まだ無理をするか？」

「本当にみみなの好きなようにしていいのかな…？」

みみなは、すぐるような目で俺を見る。今にも泣きそうな感じだ。

「いいに決まってるだろ。むしろ、今までよく頑張ってきたと思うよ。」

そう言ってみみなを抱きしめてやる。しばらくすると、みみなは子供みたいに泣き始めた。安堵の涙だろう。みみなの心は周囲のプレッシャーで限界が近かったんだろうな…。友達なのに、そんなことも見抜けなかったのか、俺は！情けないな…。

しばらくして、みみなが泣き止んだと思ったら、みみなはすでに眠りについていた。

「泣き疲れて寝ちまうとか…本当に子どもみたいだな…。」

泣き疲れて寝てしまったみみなの顔は穏やかな表情だった。

「さて、帰りますかね。」

前回の従育科試験の時と同じようにおぶって別荘に帰る。にしても、本当に軽いな…。

別荘に帰ると、まりなさんと章子さんが迎えてくれた。章子さんにみみなを預けて、その間にまりなさんに事情を説明した。

「本当にありがとうございました。」

「い、いえ、友達として当然のことをしただけのことです……。」

「友達……ですか……。」

「どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません。（みみなは、栗須さんに好意を抱いているけど、二人の仲は、まだまだみたいね。）」

「そうですか。ところで、みみなは？」

「夕食の準備ができたので、起きてもらったほうがいいのですが……起きそうにありませんね。無理に起こしてもかわいそうですし、この感じだと明日の朝まで寝たままでしょう。ですから、二人で夕食をいただきますしうか？」

「でも、その料理はみみなのためにつくられたのでは？」

「まだ機会がありますし、夫も含めて3人そろって食事をするのもいいと思いませんか？」

「分かりました。」

夕食の間、まりなさんにみみながの学園生活についてかなり聞かれた。まあ親としては当然だろう。でも、俺についての質問も多かった気がする。のは気のせいかな？しかも結構深いところまで聞いてくるし…。その質問の中で、彼女がいるか、いないかを聞かれたときに、「います。」と答えてしまったのは、ミスだった。薫は学園では男子ということになってるんだから、まずかったな…。

「それにしても、この部屋暑くないですか？」

「そんなことないと思いま…！栗須さん！それはワインですよ！」

「ああ、これ、ワインなのか？ジュースだと思ってた…。結構、飲んだんだが大丈夫か？」

ああ、フラフラしてきた…。

「だ、大丈夫ですか、栗須さん？」

「らいじょーぶです（大丈夫です）！もんらいありません（問題ありません）！」

「急性アルコール中毒にはなりそうにありませんが、凄く酔ってますね…。……………これはいい機会でしょうか？」

「ろーしましたか（どうしましたか）？」

「栗須さん。もしみみなが栗須さんに告白してきたら、どうしますか？」

「みみなが… うん彼女がいるので、いい返事は返せないかもしれません。でも…。」

「でも？」

「みみなと彼女が納得できりゅ形であれば、できりゅ限りのことをしたいでしゅね…。グー。zzz」

S i d e : まりな

寝てしまわれましたか…。私の目から見てもみみなが栗須さんに好意を抱いているのは明らかです。娘の恋路を応援するのは当然ですから、情報は多いほうが良かったのですが…。

「しかしさっきの話から考えると、その彼女さんがOKすれば、みみなも栗須さんと付き合えるということでしょうね。これだけいい人ですし、みみな以外の女性がいるのも当然でしょう。でも、みみなには頑張ってもらって、栗須さんを奪い取ってもらいましょうか。」

しかし、みみなな性格を考えてみて、考えを改める。

「いえ、みみなに略奪愛は無理そうですね…。でしたらもう、妾のような存在でもいいでしょうか？みみなな幸せが一番ですし。」

みみなが幸せなら、世間体やその他なんてどうでもいいことですね。

「そうになると、残る問題は…彼女さんの説得と夫の説得くらいでしょうか？」

夫は力づくでもYESと言わせてみせるので大丈夫でしょう。彼女さんのほうはみみなな頑張り次第ですね。応援していますよ、みみな。

みみなな恋路を（勝手に）応援する母親の顔は真剣だった。

| 続
く

4話 期待の重圧（後書き）

というわけで、ハーレムに一步前進です。親（母親のみ）公認ですし。

今回は、熱海ですよ。みみなの水着姿……………。

ハッ！また妄想世界に逝ってしまった。危ない危ない。

では、また次回の更新で！

5話 そうだ熱海に行こう…（前書き）

熱海…… なんか松岡修造にぴったりだと思っるのは作者だけでしょうか？（ちなみに作者は修造が大好きですww）

では本編どうぞ！

5話 そつだ熱海に行こう…

前回のあらすじ…・夏休み突入

・みみなのお別荘へ

・お酒でダウン…

「…朝か？」

俺は何時の間に寝ちまったんだ？やばい、記憶がない…。

「夕食の途中ぐらいからの記憶がないな…。って、あれ？」

ベッドの中に、何かいる気がする…。サイズは小さめ。ペットとかぬいぐるみとかだろうか？

…！！みみなだ。なぜに、俺のベッドの中にみみなが…！？

「にゅう…。あむ。」

親指に吸い付かれた…！？

「チュパッ、ペロ、チュポン」

なんとか抜けた…。普段は見た目も言動も子供っぽいのに、さっきのみみなのはやたらエロかった…。

「みみなが起きる前に抜け出そう…。」

みみなが起きたら、俺は社会的に抹殺される気がする……。自分がで
きる限りの気配遮断をしつつ、ベッドから抜け出した。

「というか、ここみみなの部屋だし……。」

廊下に出て初めて気が付いた。昨日の夜に何が起こったのか気にな
る……。

「おはようございます、まりなさん。」

「あら栗須さん、おはようございます。よく眠れましたか？」

「それなんですけど、昨日の夜の記憶がないのですが、何かありま
したか？」

「栗須さんは、間違えてワインを飲んでしまわれたんですよ。すぐ
に寝てしまったので、覚えてなくて当然ですけど。」

「……。すいませんやっぱり全然覚えてないです。それと、俺はど
うやって寝室まで移動したんですか？」

「章子さんに運んでもらったんですが、何か問題でもありましたか？」

「いえ、全然……。」

間違えて運ばれたんだったら、しらを切れば問題ない！誰にもばれてないはずだ！

「それならよかったです。みみなもよく眠れたと思いますし。」

どういう意味だろう？なんでそこでみみなの名前が出てくる？

「みみながよく眠れた」というのはどう関係しているんですか？」

「みみなは抱き枕があったほうが、眠りがいいのよ。だから、栗須さんに代わりをやってもらったの。」

……。抱き枕代わり？しかも、朝のパニックの原因が分かったぞ……。

「あ、あの……。みみなは女性ですし、俺も一応男性です。同じベッドの中はまずかったのでは？」

「栗須さんなら大丈夫ですよ。」

何の確信があって、“大丈夫”という言葉が出てくるんだろうか？

「栗須さんなら“責任”を取ってくれそうですし。（先にみみなが起きていれば、責任を取らせることもできましたのに……。いえ、まだチャンスはありますね。）」

その時のまりなさんの笑顔は、腹黒の笑顔によく似ていた気がする…。

「お、おはよう…。」

「おはよう、みみな。」

今は7:30を少し過ぎたところ。俺が起きたのが、7:00くらいだったから、危ないところだったな…。

「朝起きたばかりの所だが、みみなに質問です！」

「な、なになな？」

「熱海に行くか？」

「……へ？」

キョトンとした顔だな。まあいきなり『熱海に行こう』とか言われ

ても意味わからないだろうな。

「いや、朋美がだな、『フレイムハートさんの実家のある熱海に遊びに行きませんか?』ってう誘いのメールが来てな。どうする?」

「く、栗須くんはどうしたいのかな?」

「俺か? まあ、海にはいききたいかな?」

「なら、行くよ…。(みみな、色んな意味で小さいから水着に自信がないけど、栗須くんが楽しそうにしてるのに、断るなんてできないよ〜)。」

「おう。一応のために準備はしてもらってたから、すぐに出かけるぞ! 昼前には着きたいからな。」

「う、うん。分かった。」

朝飯を食ったら、即行動だな!

朝9：00に出発。新幹線を乗り継いで、2時間後の11：00には熱海に着いた。毎回のごとく新幹線を使うのは、それが最速だからだ。みみなへの負担を減らす意味では正解だと思う。熱海駅からは、車で移動。というか、腹黒の車に便乗させてもらった。

「栗須くんの研修時の様子はどのような感じですか、桜沢さん？」

「うーん、頑張っていると思うよ？」

何故に疑問形？普通に頑張っているんだが…。

「そうですか。ところで、大地君が栗須くんのことを心配してましたが、大丈夫だったんですか？」

この野郎…。薫が女であることを知って聞いてくるか…。

「大丈夫だと思うが…？」

「それならよかったです。」

うわ、薫が若干疑ってる。大丈夫だって、みみなとは何にもなかった、あるにはあったが不慮の事故だから！

「にしても、まだ着かないのか？」

早く話題を変えよう。それがベストな判断だ。

「もうすぐではないでしょうか？ほら、あそこに見える建物らしいですよ。」

あと5分ぐらいで着きそうだな。

チリリリリ…

腹黒がセルニアの家のベルを鳴らす。使用人が出てきた。アンナっていう名前だったかな？

「セルニア〓伊織〓フレームハートさんの学友の彩京朋美と申しますが、セルニア〓伊織〓フレームハートさんは御在宅でしょうか？」

「中へどうぞ。」

4人全員が中へ通される。さりげなくスリッパが用意されていたあたりを見ると、アンナ？さんの有能さがわかる。

「お嬢様、お食事のところ申し訳ありませんが…。」

「なんですの？もう済みましたから構いませんわよ？」

「その、お客様がお見えになられています。」

「……………客、ですって？」

「食事が済んでいるのなら、遠慮はいりませんよね？」

はい、腹黒がダイニングに突入。残った3人も合わせて中に入る。

「ど、どうして彩京さんが……！？それに、桜沢さんまで!？」

「あら私たちがクラスメートのお宅へ来るのがそんなに意外ですか？」

「フレイムハートさんが日本にいる間に——と思ったので、桜沢さんと栗須くんを誘って、少し急ですけど遊びに来たんですよ。お邪魔でしたか？」

「……よくもまあぬけぬけと、そんなセリフが出てきますわね。」

「私だって女ですし、多少は気を使いますよ。だってフレイムハートさんが、はしたなく朝早くから走り回って強権発動をさせてまで男の子を自宅に招いている最中ですから。」

「なananんっーなんですってえ!？」

どうでもいい口論はいいかから、早く泳ぎたい。そういえば結構長い間、海で泳いでない気がするな……。最後は確か……前世か？こっちに転生してから、海で泳いだ記憶がない!？」

「んで、わざわざこいつからかいに遊びに来たってか？暇だな、お前らも。」

さりげなく俺も暇人扱いかよ、秋晴……。

「ええ、暇なんですよ。ですからフレイムハートさんのお宅を拝見
——というより、1つ提案とお願いをしに来たんです。」

「……………お願い、ですって?」

フレイムハート家所有の島を貸せて内容なんだろうけど、よく考え
ると、いきなり押しかけてきておいて『島を貸しな。』っていう
のは中々に凶々しい話だな。

「ええ。せっかく夏休みに入ったことですし、海で水遊びしたくな
ったんです。でも今は試験中で、海外に足を運ぶ暇はなくて…でも
1人だけ近場にプライベートビーチを所有している人に心当たりが
あったものですから。」

暇じゃなくなった理由の試験を希望したのはお前自身だろうがっ！
というツツコミはさておき、早く泳ぎたい！

「……………つまり、島を借りたいと?そういうことですね?」

「いいえ、一緒に遊びましょうということですよ。勿論、大地くん
と秋晴くんと栗須くんも含めた、ここにいる6人全員ですけれど
——という提案です。」

「俺たちもか。……………まあ、お前らの傍にいないといけないんだから、
そくなるんだらうけどよ。」

その通りだ、秋晴。遊ぶ最中も一応試験なんだぞ。

ドリルはちょっと疑うような感じで腹黒を見てるな。まあ、日ごろ

の行いの所為だろ？

「良い返事がもらえなくても当然ですかね？突然ですし、何よりも脱がないといけませんし。いろいろとお手入れも必要でしょう？」

「そんなもの必要ありませんわよっ！いつでも、体の隅々まで手入れが行き届いていますもの、当然ですわ！」

「あら、そうなんですか？見たところたくさん食べていたようですけど……ああ、パレオで隠せば大丈夫ですね？」

いつまで続くんだ、この口論は？早く泳ぎたいんだが（2回目）。

「でだ、結局はどうなんだ？島に一緒に行くのか、行かないのか、どっちなんだ？別に、お前の水着姿には興味ないから、早く決めてほしいんだが？」

やばい、本音が出た。腹黒が爆笑しそうなのを我慢してるし、秋晴なんかは軽く笑ってるし。みみなは……オロオロしてるな。大丈夫だ、これは喧嘩じゃないから。これは……からかってるだけだ！

「キーツ！言わせておけば……。その庶民！何を笑っているんですの！？主人が辱められているというのにつ！」

「いやな……プツ。すまん、すまん。」

ドリルがつつむいて、何かぶつぶつ言い始めたぞ。一見すると、危ない子だな。

「………そうですか、よく分かりましたわ。そこまで言うのなら、見

せてあげますわっ！私の真の姿をっ！」

“真の姿”って、お前は魔王にでもなるつもりか？

「それでは、行くということでもいいんですか？」

「——行きますわよっ！いいですわ、貴女方を、フレイムハート家の所有する島に招待しますわよっ！」

よっしや！これで泳げる！

アンナさん（やっぱりアンナさんだった）の運転できた、フレイムハート家所有の島。熱海港から中型クルーザーで移動すること約10分。周囲3kmぐらいの島に着いた。

「おー……なんつつーか、素晴らしいな。」

「そうだな、秋晴。」

いい天気だし、浜風は気持ちいい。ただ……

「薫、本当に大丈夫か？」

「……………大丈夫だ。全然平気だ。」

虚勢だけど、あの（・・）水着に着替えるのはなく。ストライプの全身を隠すタイプの水着：囚人服水着？は流石にきつすぎる。黒歴史確定だろ…。かといって、従育科の制服（長袖）のままというのものなく。でも、試験中は原則制服だし、しょうがないか…。（秋晴と俺は着替えることを命令されたという体で着替えています。主人の命令の方が優先だからな。）

ちなみにみみなと俺の水着は、章子さんが用意してくれました。俺の水着は、なかなかいいセンスだと思います。

「大体、朋美のヤツも何考えてんだか。サイズ違いで同じ水着を揃えればいいのに、どうして大地にはあんなのを用意したんだろ？あいつの趣味か？」

秋晴、その意見はもつともだ。でもなそれだとサイズの問題はクリアできても、性別の問題はクリアできないんだよ…。

「……………知るか。」

そう答えるしかないよな…。そして、そこに…

「秋晴くん、大地くん、それと栗須くん、お待たせしました。」

「……………フン。」

ドリルと腹黒が登場。って、みみなはどうしたんだ？

「栗須くん、キヨロキヨロ周りを見ても桜沢さんはまだですよ。」

「そうか、何かあったのか？」

「いえ、ちょっとですね…。」

「？腹黒にしては歯切れが悪いな…。」

「どうしたんだ？何かアクシデントでもあったか？」

「何と言いますか…。そうですね…。まあ、なんとかなるでしょう。」

「

おい勝手に自己完結するな！意味が分からないだろうが！

「栗須くん。ロッジのほうで桜沢さんが待っているので、迎えに行つてあげてください。」

「おう、分かった。」

なんか引つ掛かるが、まあ行ってみるとしようか。

Side：みみな

「こんなの無理だよ…。」

恥ずかしいよ…。こんなに小さいのに敵いつこないよ…。朋美ちゃんも結構大きかったし、フレ임ハートさんなんか……。

「お、いたいた。みみな、行かないのか？」

「く、栗須くん！？ど、どうしてここに！？」

「いや、朋美が『ロτζジで待ってますよ』って言ってたから。」

朋美ちゃん！なんてことを言っちゃうの！？後で、謝ってもらおうからね。

「なんで来なかつたんだ？」

「だって恥ずかしいんだもん…？」

「何が恥ずかしいんだ？水着、似合ってるんじゃないか？」

に、似合ってる！？栗須くんは胸の大きさにはこだわらないほうなのかな…？

「ほれ、いくぞ！夏と言えば海！行かなきゃ後悔するぞ！」

そう言つて、手を引かれる。王子様に手を引かれるのってこんな感じなのかな？…と思つたのは、絶対に秘密だよ！

S i d e : 栗須

みみなの水着は：かなり似合っていた。水着は白のワンピース型。
若干：かなり、子供っぽいデザインだが、みみなが大人っぽいものを着てもミスマッチだから、これでいいと思う。

ただ、みみなに見とれることはできない！俺にはすでに薫という彼女がいるんだから。うん？とすると、この手をつないだ状態はまずいのでは？

と、考えているうちに元の浜辺に戻ってきた。どこからかきつい視線を感じる。薫がこちらを睨んでいる。すぐに手を離さない！

手を離すと、今度はみみなが不満そうにこちらを見てくる。俺はどうすればいいんですか、神よ？そうすると、薫が近くに寄ってきた。

「ちょっと来てくれ、栗須。」

「ああ、分かった。みみなはあそこの日陰で待っていてくれ。」

「うん、分かったよ。」

そう言って、薫に連行される……。

―謝罪中

「栗須、僕は心が広いほうだと思っているが、流石に目の前でほかの女と手をつないでいるのを我慢することはできないぞ……。」

「本当にすみませんでした。」

絶賛土下座中です！男としてのプライド？何それ、おいしいの？

「全く、どうしてあんなことを……。」

「いやあれは……しょうがなくてだな……。」

「僕という彼女がいるんだぞ、貴様は！」

「重々承知してます……。」

「（全く栗須というやつは……でも栗須を縛り付けるのはどうなん

だろうか？そんなに口うるさく言うと、栗須に嫌われる？そんなのは嫌だ！それくらいだったら、ほかの女性もある程度までなら許すべきか？でも、栗須は僕だけのものにしたい……けど、栗須が離れていったら本末転倒だし……」

薫が何かぶつぶつと呟いているが、何をしゃべっているのか分からない。もう少し耳を澄ませてみるか？

「く、栗須！！」

「な、なんだ？」

いきなり大きな声を出されると困る……。どうかしたんだろうか？

「大事なことを言うからな！」

「お、おう。」

いきなりだな……。

「ぼ、僕は……」

「…僕は？」

「僕は、許せても2、3人だからな！」

「あ、ああ。分かった。」

2、3人？何が2、3人なんだ？意味が分からん。

「さあ、行くぞ！」

結局、何の人数なのかは分からなかった。

余談だが、秋晴は原作通りに砂浜に縦に埋められていた……。『ご愁傷様』

― 続く。

5話 そうだ熱海に行こう…（後書き）

というわけで、まだ続きます。

埋められた秋晴…。ドンマイ…。

そして次こそ、みみなと海を楽しむ！はず…

では、また次回の更新で！

6話 水泳特訓！（前書き）

間違え消してしまったので、再投稿しました…。

バックアップがあつてよかった…。

ただ内容が違う可能性もあるので気を付けてください！

6話 水泳特訓!

前回のあらすじ：・朝からドッキリ ハプニング

・熱海へ行くこと

・薫への謝罪

「じゃあ、俺はみみなのに戻るぞ。今も試験中なんだから。」

「……………分かった。」

薫の目が若干怖かったが、パートナーの近くにいるのも試験の一環なんだから仕方がない…と思ってもらうしかないな。

「待たせたな、みみな。」

「うっん、全然待ってないよ。」

「ところで、これからどうする?」

そういつた瞬間、みみな顔が若干曇る。

「どうしたんだ。もしかして海は好きじゃなかったか?そうだったら、すまん。半ば無理矢理に連れてきたのは俺だし。」

「そ、そうじゃないよ!た、ただ…………」

もしかして、女の子特有のあの(・・)日とかかな?さすがに聞いたりしないけど。セクハラになるし。

「ただ……?」

「みみなが小さい頃から入院生活だったっていうのは、知ってるよね?」

「ああ、知ってるぞ。」

原作知識もあるし、学園内の話題の中で知った内容でもある。

「それでね、治ってからも体に負担になるようなことは控えてたからね……」

つまりだ、泳げないもしくは、泳いだことがないのか? まあ、さっきの感じだと泳いだことがないっぽいけど。

「泳いだことがないのか?」

「水に浸かることしかしたことないんだよ。だから、泳げるかどうか不安で……」

「なら、俺が補助してやるよ。今日はみみなの特訓だな。」

「あ、ありがとう……。」

「じゃあ早速だけど、行くぞ……!」

「わ、わ、わ。待って……!」

まずは、どんな方法で泳ぎ方を教えようかな?

「まずは、このシュノーケルと水中マスクを使って水に慣れる所から始めようか。」

そうやって渡したのは、シュノーケルと水中マスク。息ができる状況で泳ぎ始めようと思って用意した。

「ど、どうやってつけるの？」

そんなに難しいことじゃないと思うのだが……。ああ、水中マスクは水が入ってこないように結構きつめになっているから、みみなのかだと装着できないのか。

「ちょっと待ってる。俺がつけてやるから。」

そういつてみみなの後ろに回り込んで取り付けようとする。む、強く引つ張るとみみなの体がこっちに倒れてきて、取り付けにくいな。

「安定しないな……。そうだ、みみな、ここに座ってくれ。」

「え、え、え、え〜〜！」「うん？」

俺が指差したのは、俺の胡坐あぐらの上。ここに座ってもらえば、こっちに引っ張っても俺の体が支えになって、安定するはず。

「ほ、本当に座るの…？」

少し恥ずかしいかもしれないが、ほかに方法はない気がする。みみなの体がもう少し強かったらこんなことしなくても済むんだけどな…。

「ほら、さっさと終わらせて泳ぎの練習するぞ。」

「う、うん…。」

ちょっと強引にみみなを座らせる。にしても、本当に軽いな。

「今からつけるけど、痛かったり、なにか不都合なことがあったらすぐに言ってくれ。」

「わ、わ、分かったよ…。」

俺の体で支えているから今度はすんなりと装着できた。取り合えずこれで終了。

「問題ないか？」

「……………」

みみなの反応がない。どうしたんだ？

「おい、みみな。大丈夫か。」

「ハッ！だ、だ、大丈夫だよ！」

「お、おう。それならいいんだが、痛いとかキツイとかそういう問題はないか？」

「少しキツイけど、問題ないよ。」

「まあ少しキツイのは我慢してもらわないとな。ゆるゆるだと水が入ってきちゃうし。」

さて、練習を始めますかね。

S i d e : 薫

「さっき、あれほど注意したというのに……クリス……。」

あれはどういうつもりなんだろうか？桜沢先輩を胡坐こまの上に座らせ

て抱きしめる…（薫視点だところ見えてます）。2、3人までは許すとは言ったが、いくら何でも手を出すのが早すぎじゃないのか？

「それにしても栗須はみみな先輩のどこに惚れたんだろうか？」

みみな先輩と言えば……幼女？僕との共通点は…貧乳？

………！く、栗須は、ろ、ロリコンだったのか！？ということ
は、僕の（胸を）大きくしようとしていた努力は無駄どころか、逆効果なのか！？

とうとう、彼女にまで“ロリコン”認定された栗須であった。

Side：栗須

「ほらしっかり足をバタバタしないと。そうそう、その感じだ。」

ただいま、みみなの泳ぎの特訓中。俺が手を握ってみみなの引くというスタンダードな練習法。みみなのは軽いから浮くところは簡単なんだが、力不足であまり前に進まない。こればかりは今日だけで

はどうにもならないな。

「よし、基本は…たぶん大丈夫だ。ただな…もう少し体力つけような…。」

「うん……。」

「もし体力がついたら、今度は息継ぎまで教えてやるからな。頑張ってみよう。」

「分かったよ。もし体力がついたら、よろしくね?」

「ああ。ところで、そろそろ休憩するか?ちょっと疲れただろうし。」

「そ、そうしようかな…?」

じゃあ、浜辺に戻りますかね。暑さでダウン寸前の薫(こっちを終始睨んでた)と砂に埋められてトラウマになりつつある秋晴の所に。

「おっす。帰ったぞ。」

「「……………お帰り……………」

二人ともテンションが低い。

「……………はあ。」

秋晴のため息がこぼれる。やばい、凄く気まずい…………。

「なぐにため息なんて吐いてるの。」

救世主（＝腹黒）が現れた！！

「……………お前はきつと、一生かけて俺にトラウマを植え付けまくるんだろっな…………。」

「や、やだなあ、そんなに気落ちしないでよ。あれはちょっとした冗談、お茶目じゃない。」

あれはちょっとした冗談では済まないと思うのは、俺だけか？少なくとも被害者の秋晴は同意してくれるだろうが。

「……………人はな、土の中で暮らす生き物じゃないんだ……………地中深くのシエルターで生活すると早死にすることになるって聞いたことがあるけど、今の俺なら理解できる…………。」

「……………その、ごめんなさい…………。」

流石の腹黒も反省してるな…………。まあ、あの秋晴の姿を見てもまだ反省しないなら、俺が直々に恐育してやるけどな。

「んで、何の用だ？腹でもすいたのか？」

「そうじゃなくて。遠泳……って言うにはちょっと短いかな？沖にあるブイまで200mぐらいあるらしいからそれにタッチして戻ってくる競争をこれからするんだけど、参加しない？」

「それは栗須たちにも言ってるのか？」

「一応ね。でも、大地君は無理そうだし、別に強制はしないわよ。」

まあ、薫はそろそろ限界っぽいしな。一回、ロッジに戻すべきだな。

「俺はパス。理由は、まあ色んな意味で相手にならないからだ。栗須が参加するんだったら、栗須は速すぎるし、お前ら二人には負けないから、結果が見えすぎてる。」

「俺は参加しようかな。ハンデありだけど。」

みみなの手相手ばかりしてて、俺自身は泳いでないんだよな。

「言うわね。わたしもフレイムハートさんもそこの男子には、負けないぐらい泳げるのに。」

「まあ、短距離でプールなら結果は分からないが、海で100m以上なら従育科の訓練で慣れてる俺らの勝ちだぞ。それと栗須がそこの男子の枠に入ると思うか？」

「……………入るわけないわね。」

不名誉な感じだが、俺も賛成だな。ラカンボディーが一般人のレベ

ルに納まるわけがない。

「で、俺のハングデはどうする？」

結構キツイハングデを付けないと、圧勝過ぎて面白くない。

「そうね……。両手を縄で縛るとかどう？」

腹黒は、からかう意味でそう言ったんだろうが、見当違いだな。

「朋美、そんなんじゃないと思うぞ。栗須だったらその状態でも、おそらく……。高校男子の日本記録ぐらいは出るんじゃないか？」

「知らん。別に、競泳選手じゃないからタイムにこだわったことはないからな。」

腹黒、茫然。かなり泳ぎは速いは知っていたが、そこまでとは思ってなかったんだろ。前回の従育科の授業を見に来たときは、本気で泳ぐところを見せてないからな。

「栗須の能力を考えたら……。両手両足拘束でいいんじゃないか？」

「まあ、妥当だろ？ ついでにおもり20kgで。」

というわけで、ハングデとして両手両足をロープで縛り、おもり20kgを背負うことになりました。

「ま、朋美も精々頑張れ？ 俺の暫定ご主人様は、知能勝負ならともかく体力勝負はかなり強そうだぜ？」

「え、ええ……。」

まだ、驚いてるみたいだな。まあ、一般人からしたら当然の反応か？

「ハッ！ええ、頑張りますよ。わたしが頭でつかちな策士タイプじゃないところを証明して見せるからね。それと先に準備してますから、後から来てくださいな、栗須くん。」

「ほいよ、了解！」

そういつて腹黒はセルニアの所へ戻っていった。

「ところで、薫。」

「……………なんだ？」

「お前は一回ロッジに戻れ。」

「……………しかし、試験中で……………監視……………。」

「それは秋晴が3人とも見ててくれるから大丈夫だ。まあ、飲み物を取りに行ってくるという形でいいから。」

「……………飲み、物？」

「ああ、タオルもついでにあるといいかもしれないな。それと、試験を忠実にこなすのも大切だが、体調管理はもっと重要だぞ。」

「……………分かった。」

そうやって薫はロッジに戻っていった。足取りは結構しつかりしていたから、大丈夫だろう。

「おい、栗須。あっちの準備はできたみたいだぞ？」

「ほんとだな。じゃあ行ってくる。みみなへの監視もよろしくな。」

「分かってるって。ハンデありだからって負けたら、ダサイからな？」

「分かってるよ。」

さて、いざ、勝負！

― 続く。

6話 水泳特訓！（後書き）

お騒がせしました…。

間違えて、新しい話と書き換わっちゃったんですよ…。原因は不明です。

7話 旅行先のメインって、夜だよな。(前書き)

旅行先での夜の雑談って思い出に残りますよね

7話 旅行先のメインって、夜だよな。

前回のあらすじ：・みみなの水泳訓練

- ・主人公、ロリコンですね？
- ・水泳勝負のハンデ決定！

「それじゃあ、これからあのブイまで往復するんですけど……。」

「どうした、朋美？」

「いえ。本当にその格好で泳げるんですか、栗須くん？」

「大丈夫だ、問題ない。」

その格好……両手両足をロープで拘束、背中には20kg相当のおもりの入った袋を背負った姿。常人ならおぼれること間違いなしの恰好だから、心配するのは当然だな。

「そうですか……。なら早速ですけど行きますよ？フレイムハートさんも準備できてますか？」

「勿論ですわ！」

「では、行きますよ。よーい、ドン！」

そう言って腹黒とドリルは駆けだす。海までの距離は3mぐらいしかないが、水深の浅いところは走ったほうが早いだろうから、当然

の判断だな。

「では、行きますかね。」

そういつて体をくの字に曲げる。その反動で飛び上がり、着地。まあ、立ち幅跳びに近い動きだな。距離で言うと、5mぐらい進んだか？（ちなみに高校男子の立ち幅跳びの平均は約220cm。）

「ここからだつたら、泳いだほうが早いな。」

すでに深さは腰のあたりにまで来ていた。さて、泳ぎますかね。

泳ぎ方は、バタフライの手の動きなしバージョン。というかつい最近、バタフライ以外で泳いでない気がするのは、気のせいか？

にしても、少し呼吸がしづらいな……。手が動かせないから上方向に体がいかないんだよね。300mぐらいだつたら息継ぎなしで進めそうだけど、流石につらいし。（世界記録は、213m）

ここは、あれで行くか？バタフライの脚の動き…ドルフィンキック…の強化版！“スーパードルフィンキック”を！

だれだ！？ネーミングセンスないな…とか言ったやつは！いいから、黙ってみておけ！

S i d e : 腹黒

最初のスタートダッシュの差でフレイムハートさんにリードを奪われているけど、どうしようかな？実際の所、これ以上スピードを上げることは不可能だろうし、かなり不利ね…

それにしても、栗須くんは何をしてるのかしら？あれだけ自信があったから、もう少しやると思っていたのに。でも少し気になるから、後ろを確認してみようかな。

……………あれは、なに？

本物のイルカみたいに泳ぐ物体。どう見ても、栗須くんだ…。あれは本当に人間のできる動きなのか、疑問ね…。

スピード自体は、わたしと同じか少し速いくらいだけど、あの恰好であの泳ぎ方なのにあそこまで速かったら十分よね？

S i d e : 栗 須

そろそろ折り返し地点のブイが迫ってきた。腹黒との距離は残り5 m。このペースならいけるか？ただ、ドリルがな……。泳ぎ方を変えらるべきか？

そう悩んでいると、いきなりドリルの動きが止まった。原作通り、水着の上が取れたらしい。ジロジロ見るのは失礼だから、目をつむって泳ぐ。

ドリルが水着を再装着したところだった。目を開けてびっくり！かなり見当違いの方向に泳いでいる。ドリルと腹黒との距離は30 mだが、俺はさらに20 m長い。

今まで通りの泳ぎ方だったら、逆転は不可能。残り210 m。ノーブレスで泳ぐ。これしかないだろ！

さっきまでとはちがい、イルカみたいに空中に出たりはしない。むしろ水中に潜りっぱなし。本気（現状での）の泳ぎを見せてやるよ！

S i d e : 秋晴

「栗須の姿が見えなくなったな…。潜ったか？」

栗須が本気になったということは、朋美の1位も結構危ういな。セルニアも頑張ってるみたいだし、一気に分からなくなってきたぞ。全行程の3/4は終了してるから、ラストスパートってところだな。

その時だった…。

「あ……………?」

あと数メートルで朋美に追いつくところまで来ていたセルニア、突然沈んだように見えた。海面で必死に両手をばたつかせ、まともに顔を出しているのも辛そうだ。

「溺れている、と気づいた時には、もう海に飛び込んでいた。」

S i d e : 栗 須

あともう少しだ、岸まで100m。セルニアの姿が見えなくなったが、腹黒までの距離はもうのこり3mぐらいにまで縮んでいた。

のこり50m。とうとう腹黒の横に並んだ（というか真下）。腹黒は突如現れた俺に驚いている様子だった。あまり顔が見えないから分からないが、動きに動揺が現れていたので、まず間違えはないだろう。

腹黒もラストスパートをかけ平泳ぎからクロールに戻す。しかし、そのスピードは俺には及ばない。

とうとう、足の着くところまで来た。腹黒は4mぐらい後ろにいる。これは勝ったな。

そう思っていた時期もありました…。

ラストにジャンプをしようとしたとき……足を縛っていたロープの一部がほどけ、飛び出していた部分を踏み、派手に転ぶ…。体勢を立て直した時には、腹黒はすでにゴールしていた…。

……………。なぜだ…。

「最後の最後でやらかしたわね。やっぱり間抜けキャラって感じね。

「
グッツ！腹黒の一言が俺の心に突き刺さる…。」

「それにしても、フレームハートさんは遅いですね。それに秋晴もいないし。」

「……！そういえば、ドリルは絶賛溺れ中だった！俺は何かすべきなのか？」

ならば、アンサーターカー発動！

A・秋晴に任せとけ

「……。ならそうしようか……。」

俺が両手両足の拘束をほどいてもらっている間に、秋晴withドリルは帰ってきた。

「ねえ、秋晴っ!？」

「っし……!」

「フレイムハートさんはっ——」

「大丈夫だから落ち着け。まずは寝かせて……。」

「……………う、ん……………」

「お——セルニアっ！おいつ、大丈夫か?!」

意識はないけど、呼吸は出来てるみたいだな。

「大丈夫だな……。たぶんすぐに意識も戻るはずだ。」

「——のんびりしてる場合じゃないですよ、秋晴くん！」

「へ……………?」

ちなみに俺は見守るのみです。

「何をしてるんですか！一刻も早くフレイムハートさんに人工呼吸を！」

「いや、そんな必要はないから……。栗須と深閑の時じゃあるまいし。」

そこを蒸し返すな〜！その後「教師と生徒の禁断の……」とか学園内で噂になったんだぞ！すごく気まずかったんだよ！

「おぼれて意識を失った人には、キス——じゃなくて人工呼吸をするのは常識ですよ！」

「お前、今わざと言い間違えたたる！」

「そんなことないですよ！さあ早く人工呼吸を！そして豊かな胸を揉みしだくようにして心臓マッサージをしないとっ！」

「しないからな！というかお前がやれよ！」

「経験者のほうが安全ですから！ほら早く、フレイムハートさんが起きる前に！」

「起きるんだったら解決してんじゃねえか！」

頭の悪い会話だな…。みみなはみみなでリアルに心配してるし…。放置してても、大丈夫なんだよ。すぐに意識は戻るだろうから。

薫が回復してロッジから戻ってきたころにはドリルの意識も回復していた。

ドリルの家に戻った後は、ビリヤードとかポーカーで遊んだ。勿論罰ゲームありで。

ビリヤードはアンサートーカーを使えば、一発ですべての球をポケットインできるけど、おもしろくないからしなかった。それでも全勝だったがな。

ポーカーは…まあ察してくれ。何回かアンサートーカーを使ったけど、最高役が2・ペアって勝ち目無くないか？彼女を手に入れたところで運を使い切ったか？

でもって風呂。秋晴と入ったんだが、腹黒とドリルが覗きをしてるみたいだった。秋晴は泣きそうだったが、こっちに非はないわけだし、むしろ見せつけるぐらいの勢いで行くべきだろ！実際、何も隠さなかったら逃げ出したし。

夕食時には秋晴が酒を勧められたけど、まあ、なかったことにしよう。あいつに飲ませたら大変なことになるからな。俺も昨日のことで懲りてるから飲まなかったけどな。

そんなことを思い出していると、コンコン という音が鳴った。誰かが俺の部屋のドアをノックしたんだろう。

「どござ、開いてるよ。」

「し、失礼します…。」

みみなだった。どうかしたんだろうか？

「どうかしたか？」

「と、特に用事があったわけじゃないんだよ…。ただ、お話ししたいなって思っ…。ダメかな？」

「勿論いいぞ。にしても今日は騒がしかったな。」

「そ、そうだね…。」

何か言いたげな様子のみみな。

「もしかして、騒がしいのは好きじゃなかったか？」

「う、う、ううん。そうじゃないよ。ただね… こっぴつ風に遊んだのは初めてで…。」

小さい頃から病気だったみみなの苦しみがあふれている感じだった…。

「今回は初めてだけど、まだまだ学園生活は残ってるだろ？その間にいっぱい遊んだらいいじゃないのか？」

「…うん。その時は栗須くんもついてきてくれる？」

「当然。みみなが望むんだったら、いつでもついていくし、どこにでも遊びに行くぞ。」

「あ、ありがとう……。」

そう言っつて、みみなはうつむいてしまった…。

「栗須くんにはいろんな事をしてもらってるのに、みみなからは何もしてない気がして、不公平かな？」

「そんなことないと思うぞ？」

「みみなはそう思ったの！だから……。」

そついつた瞬間、頬に小さくそれでも柔らかさを感じる物体がふれた…。

「な、な、なにを?!」

そつ俺が言っつたときには、みみなはすでに部屋の外へ駆けだしていった。

「ついで最近の女の子は、みみなみたいに消極的な子でも、友達に対しても大胆なことをするんだな…。知らなかった…。」

主人公は彼女ができて、好意に鈍かった…。

S i d e : 薫

今日は栗須と何もできなかった…。みみな先輩と栗須がイチャイチャしていたのを見ていただけ…。これでいいのか、大地薫？いいわけがない！！

そうだ、これから栗須の部屋へ行こう。まだ今日は終わっていない！

「栗須の部屋はこっちだったな…。」

栗須の部屋の前の廊下にさしあたった時、小さな人影が走り去っていくのを見た。あの大きさなら、みみな先輩以外にはありえない。

「どうかしたんだろうか…?」

栗須の部屋の前に来て、なんとなく事情がつかめた…。栗須の部屋のドアは開きつぱなしで、部屋を覗き込むと栗須は何かを考えている風だった。

おそらくだが、みみな先輩は栗須に何か恥ずかしいことをして（もしくは、されて）、逃げ出したんだろう。冷静に考えてみてそのような結果に至ったが、僕の心は穏やかではなかった…。

僕以外の女を許可したが、逆に栗須を奪われてしまうのではないかという不安で、心が支配された…。

S i d e : 栗須

「ハッ!ど、どうしたんだ、薫?」

さっきのみみなの行為について考え過ぎていて、薫が部屋に入ってきていたのに気付かなかった。

「栗須……。」

「何かあったのか、薫?」

「不安なんだ。お前が僕のことを捨てて、ほかの女に奪われてしま
うんじゃないかって……。」

「いきなりどうしたんだ? 第一、そんなことあるわけないだろ?」

「でも不安なんだ……。僕は恋愛事情に疎いところもあるから、いつ
の間にか栗須の心が離れてしまうんじゃないかと、心配で……。」

薫はうつむき、いつもは見せないような“弱い部分”が現れていた。

「大丈夫だから、心配ない。ほら、こっちにおいで。」

「……………うん。」

そういうと、俺は薫を抱きしめた。何が、薫をこっちも不安にさせるのかは分からないが、できることはしてあげたい。（元凶はお前や！by作者）

「栗須……………」

「どうした？苦しいか？」

「そうじゃない。栗須に、だ、だ、抱きしめてもらって不安は減ったんだが…。その……………栗須が僕のことを嫌いにならないという、証拠がほしい……………」

「証拠？」

「そうだ。」

証拠っていうのは何のことを意味するんだろうか？

「具体的にいうと、証拠ってなん……………」

あの告白の時みたいいきなり口をふさがれた……。もちろん薫の口で。

「ん…………ちゅぱっ…………あむ…………」

薫がいきなり舌を絡めてきたが、抵抗はしない。むしろ逆に奪う形で薫の口の中を蹂躪する。

「ふあ…………んっ…………ちゅぽん…………」

長いキスだったと思う……。実際にどれくらいの間、キスしていたのかは分からない。10秒だったのかもしれないし、10分だったのかもしれない。

「…………よし。」

なにが、「よし」なのか分からないが、薫は納得したみたいだ。

「おやすみ、栗須。また明日。」

「あ、ああ。おやすみ……。」

その夜は眠れなかった……。というのは言うまでもない。だって、初めての大人のキス…………やっぱり何でもない……。

翌朝

寝不足と考え疲れて何をしたのか覚えていないが、今は帰りの新幹線の中だ。みみなを軽井沢まで送り届けたら、今回の従育科試験は終了だ。

「く、栗須くん？本当に大丈夫？」

「大丈夫だ。それは置いといて、そろそろ駅につくから降りる準備しとけよ……。」

「一応、できてるけど……。さっきも同じことを言ってたよ。」

やばいな、末期かもしれない。単なる寝不足なら全然問題ないが、一晩中思い出しては、考える……という行為を繰り返していたから、精神的な疲れが大きい。

「……………まもなく軽井沢です。……………」

「ほら、降りるぞ……。」

足取りは若干重いが、なんとか、みみなを無事に送り届けることができた。

ちなみに、まりなさんとみみなからは、

「なにかいいことあったの、みみな？」

とかいう会話が聞こえたが、あまり耳に入らなかった…。眠いZZZ
帰りの新幹線の中で寝てしまったのはしょうがないことだと思う。

7話 旅行先のメインって、夜だよ。 (後書き)

というわけで、3巻の本編終了です。キャラ崩壊とか駄文加減はいつも通りなのでスルーしてください。

次回は墓参りの予定。作中は盆ですからね。シリアス回になるのかな？

結構先の話になりますけど、4巻最後の仮装では栗須にどんな仮装をさせましょうか？

アンケートってほどではないですけど、なにか好みの衣装があればコメントしてください。

女装もありだし、普通に仮装でもいいかもな…。

では、次回の更新で！

特別編 墓参り（前書き）

ものすじ~~~~~く短いです。すいません…。

ゆるい言ひ、甘味のかな。

特別編 墓参り

俺は、都内のある墓地に居た。右手には水の入った桶、左手には花束を持っていた。

「さて、まずは掃除しますかね？」

前回ここに来たのは入学式の前だから、4か月ぶりかな？4か月もあれば、墓石に汚れはつく。

道具は、もともと実家にあつたものを使っている。基本的に、夏休みは白麗陵で過ごす決めていたが、流石に実家の掃除や墓参りはしておきたかったので、3日間だけ実家に戻ってきていた。

「こんなもんかな？」

とりあえずきれいになったと思う。

「あとは…花とろうそくと線香だな。」

花の茎を斜めに切り、花筒の水の中に切り花延命剤を入れる。これで花が長持ちするはずだ。花は墓地の管理人が回収してくれるらしいから、問題ない。

それから、持ってきていたガスライターでろうそくに火をつけ線香にも火をつける。これで準備完了だな。

「父さん、母さん……俺は元気でやってるよ。そっちはどんな感じかな……？」

「そういえば、俺にもとうとう彼女ができたんだよ。俺みたいなのにはもったいないぐらい、いい彼女だけだな……」

「学校生活は、アメリカの時とは違う雰囲気の中で学習できて、新鮮な感じかな。卒業したら、俺は何をしたいんだろうね？自分でもわからないや。アメリカ時代の経験から、技術者になるのもいいし、今の学校の経験を活かして執事になるのもいいし……。技術者と執事か……。職業が違い過ぎて比較できないな……」

「つい最近はず……すごく楽しいんだよ……。でもさ、それが怖いんだ……。いきなり、この幸せが奪われるんじゃないかって……。父さんや母さんみたいにいきなりなくなるんじゃないかって……。そう考えると……。苦しいんだ……」

「分かってはいるんだよ……。現実的にそんなことは簡単には起こらないってことは……。でもやっぱり不安なんだ……」

「でも……こんな、情けない考えしたら、彼女や、友達に、嫌われちゃうかも……。もしかしたら、『何、言ってるんだよ。』ってバカに、されるのかな？」

俺の目からは自然と涙がこぼれていた……。

「だからさ……、こんな、情けない、考え、とか、言葉、とか、涙、とかは、ほかでは、出せない、から、せめて、ここでだけ、でも……。両親の前、なんだから、これくらい、許してよ……。……。」

そのまま俺は泣き続けた……。

それから、どれくらい経ったかは分からないけど、俺が泣き止むまで結構な時間が過ぎたと思う。

「じゃあ今度は、冬休みにまた来るから。もうあんな情けない姿は

見せないようにするから。心配しないでね。じゃあ。」

そう言つて、墓地を去る。次は一人じゃなくて、薫と来たいな。両親への報告…には、まだ早すぎるけど、彼女の自慢はしたいからな。

それから、また荷物を詰めなおして白麗陵に戻った。薫の携帯にメールしたら、「僕もあと2、3日で帰る」って書いてあった。薫が帰ってきたら何をしようかな…？……………そういえば、薫とまともなデートをしたことがなかったような気がする。誘ってみようかな？

「早く帰ってこないかな、薫。」

墓参りは湿っぽくなったけど、まだまだ夏休みは半分残ってる。これだから楽しみだな。

特別編 墓参り（後書き）

というわけで、次回からは4巻…といってもかなり内容は変更する予定。

だって腹黒と秋晴のデートとか書いても二次創作の意味ないですから。

では、また次回の更新で！

1話 太鼓の達人（前書き）

ようやく4巻です。

それと、そろそろ夏休みが終わりそうです…。更新速度が1/3ぐらいになりそうですが、極力頑張ります！

1話 太鼓の達人

夏休みもすでに半分以上を消化したお盆過ぎ。

薫も寮に帰ってきて、節度あるイチャつきをしていたんだが、いまだにデートに誘えていなかった。理由は、なんか照れくさいからだ。今までにデートに誘ったことなんてなかったから、今更どうという理由で誘ったらいいのか、分からない。

まあ要するに、一言で要約すると、俺がヘタレ だからだ…。自分で言ってる、情けなくなってきた…。

そんな夏休みを過ごしていたある日のことだった。

「日野がな…彩京と、で、デートするらしいんだ。」

原作のあの話かな？その秋晴と腹黒のデートを、ドリル、轟、四季鏡の3人がストーキングする話。

「そうなのか。」

「ああ……。」

これはもしかして、『僕もデートに行きたいな。』という前振りなのか？ いやたぶんそうだろうな。これもいい機会だし、どこかに誘ってみようかな？

「じゃあ、俺たちも明日どこかにデートしに行くか？」

「！？う、うん……。」

驚きつつそう答えた薫の表情は若干にやけていた。やっぱり期待してたんだな。

「どこか行きたいところはあるか？」

「……………く、栗須の行きたいところなら、どこでもいい……。」

行きたいところか……。結構あるんだが……。まあ最初だから、普通にショッピングとかでいいかな？

「街をぶらぶら歩きながら、ショッピングとかはどうだ？」

「いいと思う。でも……………。」

「どうした？何か問題でもあったか？」

「いや……、服装はどうしようかな……と思って……。」

そういえば、女性物の服は持ってないかもしれない…。必要はないだろうし…。

「女性用の服は一枚も持ってないのか？」

「いや、あるにはあるんだが…。」

「なら問題ないだろ？」

「く、栗須に見られるのが…は、恥ずかしい…。」

顔を真っ赤にしてそう呟く薫。かわいいな。

「俺は薫の女性らしい服装も見てみたいな。」

「…本当か？」

「勿論！」

「じ、じゃあ、それを着ていく。」

「いや、着ていくのはまずいから。途中、どこかで着替えたほうがいいだろう。」

学園内で女性用の服を着た薫と待ち合わせるのはまずい。男装がばれる要因になるし、ならないにしても、変な噂になる。学園内を男の服装で出て、須野原に着いたら着替えるべきだろう。

「なら、男物の服で校門前に集合ってことで。時間は、そうだな、9時ぐらいでいいか？」

「その時間で問題ない。」

「なら、寝坊するなよ？それと、服を持ってくるのを忘れるなよ？」

「わ、分かってる。」

やばい、明日のデートがめちゃくちゃ楽しみだなぁ。

― 須野原の駅前

俺は一人、駅前にたたずんでいた。薫は着替えるためにいったん別れて、俺は着替え終わるのを待っている状態だ。にしても、どこで着替えているのか想像できない…。トイレか？男子トイレにしろ、女子トイレにしろ、問題がある気がする…。まあ、余計な考えはないことにしよう。今は、これからのデートに集中すべきだ！

「ま、待たせた…。」

そう言っただけで帰ってきた薫は、別人のようだった…。ただ、服装に見覚えがあるような…。？……………！！この服装は…、ウィッグをつけていないところと白のポーチがプラスされたところを除くと、

原作8巻の罰ゲームデートの時の服装じゃないか？あれは同じクラスの小島の服の借り物だった気がするが、どうして同じなんだ？まあ似合ってるからいいけど。

同じ服の理由は薫が似た体形の女子（＝小島）の私服を真似したからです。薫にはファッションについての情報が不足していたので、身の回りから得た情報でこの服装を選んだんですね。

「に、似合ってないか…？」

俺が考え事にふけて何も言わなかったから、薫が心配そうに、そう聞いてきた。

「目茶苦茶にあってるぞ、薫。やっぱりかわいいな。」

「！？そ、そうか…。なら、いいんだ。」

そっけなく言ってるけど、顔はにやけてる。

「今は…十時半か。まずは軽く遊んで、飯っていう流れでいいか？午後の予定は、昼に決めればいいし。」

「僕は、それでいい。」

これから、初デートの開始だ！！

「まずはどこに行くの…… どうした、薫？」

「で、デートなんだから……。」

薫はそう言っつて、右手を突き出す。理由は分かったけど、少しからかってやるの。

「握手か？」

「ち、違う!？」

「分かってるつて。ほら、これでいいだろ？」

そう言っつて、俺の左手で薫の右手をつかむ。手のつなぎ方はもちろん“恋人つなぎ”だ。

「あ、うん……。」

照れくさいけど、悪くないな。うん、悪くない。

「で、最初はどこに行く？」

「く、栗須の好きなところで構わない……。僕はいまいちごいった繁華街に慣れていないから、どこに行ったらいいかわからないんだ。」

「

「そうだな…。俺の趣味になるけど、ゲームセンターはだめか？」

「いいぞ。僕も一回行って見たかつし、ちょうどいいと思う。」

ゲームセンターはどこだったかな？地図は頭に入れたつもりだったけど、すっかり覚えてないな…。しょうがない、久しぶりにアンサーカーを使うか。

Q・一番近くのゲームセンターまでの道のり

A・200m直進、のち右折。さらに50m進んだ先の右手側がゲームセンター

……………神様にもらったチート能力なのに使い方が……………。何のためのチートなんだか…。

「じゃあ、こっちな。行くぞ。」

「あ、ああ。」

薫の手を握りながらゲームセンターまで歩いていく。

「ここがゲームセンターなのか？」

「そうだぞ。もしかして初めてか？」

「存在は知っているが、来たのは初めてだ。」

「じゃあ、一通り体験してみるか？」

「ああ、してみたい…。」

入ってすぐの場所に設置されていたゲームは……『和太鼓の鉄人』。ぶつちやけていうと、ゲーム内容は、『太鼓○達人』と同じらしい。“らしい”というのは『和太鼓の鉄人』をやったことがないからだ。『太鼓○達人』は結構やりこんだんだけどな。

「お〜『和太鼓の鉄人』だ。まずはこれからやってみようかな？」

「『和太鼓の鉄人』？」

「まあ、流れてくる譜面に合わせて和太鼓をたたくゲームかな。見たほうが早いな。」

そう言つて、100円を投入する。100円で2回か。（もちろん一回目をクリアすればの話だが。）

この手のゲームをするのは久しぶりだし、譜面が分からないと、“おに”は厳しいから、最初は“むずかしい”でいくべきか？

「むずかしさを選ぶドン！」

「じゃあ、まずは“むずかしい”にするかな。」

「曲を選ぶドン！」

さっきからスルーしてるけど、本当に『太鼓○達人』のパクリだな、おい！心の中でそう思ったが、口には出さなかった。そして曲のリストを見る。

……………『夏祭○』『KAGEKIYO』『トルコ行進○』

……………完全に『太鼓○達人』だろ…。

「じゃあ、『夏祭○』にしようかな…。」

「頑張れ、栗須！」

譜面が同じだったら、フルコンは確実なんだけどね…。流石にそこまで……………

結論？一緒でしたけどなにか問題でも？なんなのこれ？！もう、『太鼓○達人』でいいじゃん！何で名前だけは微妙に違うんだよ！

「……………二回目は慣れたから、レベルを上げるかな？」

“おに”の出し方も一緒だったから、問題なかった……。選んだ曲は『きたさいたま2000』……。前世だったらクリアできるかできないかの瀬戸際だったけど、肉体チート（反射神経、動体視力も含む）の力でどこまで伸びるか楽しみだな

「始まるドン！」

「フルコンボだドン！」

……………チート補正やべえ。軽くハイスコア出たし、“可”の数は3。もう少して全良だったな。

「く、栗須！すごいな！」

そんなキラキラした目で俺を見ないで……。俺の実力じゃないんだ。

「だ、だろ？」

「ああ、すごかった。僕もやってみていいか？」

「だったら、二人プレイにするか？」

「二人でもできるのか？」

「太鼓が二つあるだろ？」

「ああ、本当だな。」

今度は200円入れてスタート。

「やり方は分かるな？」

「さつき、栗須の動きを見ていたから大丈夫だ。左の丸の所に赤い丸がきたら真ん中を叩いて、青い丸がきたら縁を叩けばいいんだろ？」

「そうだ。大きい丸の時は両手で叩くと得点が高いぞ。まあ、詳しく言うともっということは歩けど、基本操作はこれくらいだし、大丈夫だろ。」

コンボとか連打とかもあるけど、別にハイスコアを目指すんじゃないから知る必要はないだろう。

難易度は“ふつう”。薫が初心者ということを考えての結果だ。まあ素人でもクリアできるはずだから、大丈夫のはず。

おかしいな…。薫の運動神経なら問題ないはずなんだが…。

「どうしてなんだ……。僕はどうしてクリアできなかったんだ、栗須？」

理由は分からないけど、タイミングがずれてる…。しかも早すぎたり、遅すぎたりが半分ずつ。アドバイスしにくい…

「クリアできなかった理由はいまいち分からないから、体で覚えるしかないだろうな。」

「具体的にはどうすればいいんだ？」

「うーん…。こうすればいいかな？」

「な、な、な、な、な！？」

薫を後ろから抱きしめる形で両手を握る。後ろから薫を操作して、タイミングをつかんでもらう…という作戦だ。

「まずは俺がリードする形で演奏するから、力を抜いておいてくれ。で、慣れたところに俺は離れるから。」

「わ、わ、わ、分かった。」

「始まるドン！」

さあ、今度は薫をクリアに導いて見せる！

やばいです……。主に俺の理性が……。よくよく考えてみると、この体勢ってかなりまずいよね。薫の柔らかさとか温かさ（体温）とかいい匂いとか、かなり直に伝わってくる。

正直いって、離れるタイミングを失った感じはある。すでにノルマクリアまでもう一步の所。すでに離れているべきなんだろうけど、離れたくないな。

「く、栗須……。離れなくてもいいのか？」

「離れたいか？」

……って、何を聞いてるんだ、俺は！？こんな公衆の面前で……結構な人が見てる！？（お似合いなカップルがイチャイチャしてるので嫉妬の視線が半端じゃないです。）

「は、は、離れたくない……。」

返事するんだ……。まあ、俺も離れたくはないから、このまま最後まで行ってしまう方がいいか。

「フルコンボだドン！」

「……………」

クリアはしたけど、もうどうでもいいやそんなこと。今、重要なのは、いつ離れるべきなのかだ。

「く、栗須…もう離れたほうがいいんじゃないか？次のゲームも遊びたいし……。」

「そ、そうだな。」

そう言って薫から離れる。そしてまた手をつなぐ。

「じ、じゃあ次は…シューティングゲームなんかどうだ？」

「ま、まかせる。」

二人とも顔が真っ赤なのは、言うまでもないことだ。

それから一時間くらい遊んだ。クレインゲームで薫にぬいぐるみを取ってあげた時に、物凄く喜ばれた。頑張ったかいがあった。

「そろそろ昼時だな。飯にするか、薫？」

「そうだな、そうしよう。」

「何か食べたいものはあるか？」

「く、栗須の好きなもので…。」

さっきから“栗須の好きな〜”ばかりな気がする。気を遣う必

要はないんだが。

「気を遣わなくてもいいんだぞ？」

「……………僕はこういう街中に出かけたことがほとんどないから、何にしたらいいか分からないんだ。」

なるほど。なら、なんでも食べれそうなところがいいな……。だったらファミレスかな？

「ファミレスでいいか？」

「あ、ああ。そこにしよう。」

今回もアンサートーカーを使用して、移動する。

着いた先は全国展開されている有名チェーン店。名前は……まあ、さっきの“和太鼓の鉄人”から察してくれ。

「いらっしやいませ、2名様ですか？」

「はい。」

「では、こちらにどうぞ。」

昼時にもかかわらず、すんなりと席に座ることができた。ラッキーだな。

店員が去ってから、二人でメニューを見る。俺は“ハンバーグ&海老フライ ランチ”にするか。

「薫、決まったか？」

「……………まだ決まってない……………」

「何を悩んでるんだ？」

そうやって薫を見る。さつきから、“チーズINハンバーグセット”と俺と同じメニューの“ハンバーグ&海老フライ ランチ”の二つを凝視している。

「俺は、“ハンバーグ&海老フライ ランチ”を頼むから、分けてやるよ。」

「……………だったら、この“チーズINハンバーグセット”にする。」

これで決まったな。オーダーが決まったので、ブザーを鳴らす。

それから店員にオーダーを伝えて、暇になった俺たちは、午後の予定を立てる。

「午後からはどうする?」

「買い物を…。栗須に服を選んでほしい…。」

センスないかもしれないけど大丈夫かな?服にあんまり興味がなかったから適当なんだが。

「センスないかもしれないけど、いいのか?」

「栗須が選んでくれた服なら、どんなものでも構わない…。」

「なら、午後はウィンドウショッピングだな。」

「あ、ああ…。」

午後も楽しみだな!

― 続く

1話 太鼓○達人（後書き）

というわけで、初デート前編でした。

もとは朋美と秋晴のデートですけど、原型のかけらもありませんね
ww

どうでもいい話ですが、太鼓○達人の曲名が隠しきれていない物も
あった気がしますが、気にしてはダメです。

では、また次回の更新で！

2話 ゴルゴとアイスと青春中（前書き）

昨日、更新できなくてすいませんでしたm()m
理由なんですが……寝すぎました。一日の3/4は寝てました。
流石に寝すぎですね……。二度寝+昼寝って……。

それはそうと、栗須がsになります。鬼畜ってほどではないですけど。

では初デートの続きをどうぞ！

2話 ゴルゴとアイスと青春中

前回のあらすじ：・初デートだ！

・和太鼓の鉄人をプレイ

・某ファミレス（〓ガス〇）で食事

「お待たせしました。“ハンバーグ&海老フライ ランチ”と“チーズINハンバーグセット”になります。ご注文は以上でよろしかったですでしょうか？」

「大丈夫です。」

「ではごゆっくり。」

店員が若干、ニヤニヤしているのが気になったが、まあそんなことはどうでもいいか。

「じゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

そう言って食べ始める。そういえば、午後は買い物メインで決まったが、どの店に行きたいんだろうか？

「薫。服を買いだいたいって言ってたけど、どこか行きたい店とかあるのか？」

「……………UNIQLO……………」

なんでUNIQLO！？もっとおしゃれな服が置いてある店がある
だろー！！

「な、なんでUNIQLOなんだ？」

「ほかの店の服は余計な装飾が多い…。いざという時の動きの邪魔
になる……………」

そこで忍者の家系が影響してくるのか…。確かにUNIQLOはコ
ストダウンのために、余計な装飾はカットしてるけどさ…。

「きよ、今日は違う店に行ってみようぜ…。UNIQLOだったら
全国にあるし…。」

何わけのわからないことを言ってるんだろうか、俺は…？

「く、栗須がそう言うんだったら……………ほかの店に行ってみる。」

流石にUNIQLOはな。いや、悪くはないけどな。

そんな感じで、昼は過ぎて行った。ちなみに、エビフライを分けた
時の薫の表情は、子供みたいだった。（食事の支払いはもちろん俺
持ち。別にそこまで高くなかったから、どつってことないけど。）

―須野原駅前

「さて、まずはどの店に入るかな…。」

普通は複数の店を巡るんだろうけど、薫は一つの店に1時間以上はかかりそうな気がするから、最初から一つの店に絞った方がいい気がする。（原作8巻のクレープ屋の迷い具合を参考にしてください。）

「この店なんかどうだ、薫？」

指差した店は、駅前の店の中では小さ目の店。パッと見て、薫に似合いそうな服が多そうだし、店が小さいから薫が不要に悩まなくても済む。

「い、いいと思う。」

「なら、入るぞ。」

薫にくつつくようにして店に入る。離れすぎると、女性服の店に入ってきた変態 だと思われちまうからな…。

「いらっしやいませ。」

入った店内は、ごちゃまじりとした雰囲気だけどセンスのある内装で、なかなかいい店だな〜という感想だった。というか男子に詳しいこ

となんかわからん。それと、店内にいる店員達（3名）も必要以上に干渉してこないし、いいと思う。」

「じゃあ、まずは店内を歩いてみて、気になったものがあれば立ち止まってみる…って感じでいいか？」

「あ、ああ……………」

もうすでに、服のほうに意識がいつてるんですね、薫…。まあ、いいけどね。

店内をゆっくり歩きつつ服を物色する、薫。たまに本人のストライクゾーンの服を見つけては、サイズ（BWHのうちB）を見て元に戻す。何とも言えない雰囲気になる…。

そして店内もそろそろ見て回ったかな〜と思ったその時だった。薫の目が今日一番の輝きを見せた。かなりお気に召したようだ。サイズもセーフだったみたいだな、あの様子だと。

「試着してみるか？」

「い、いいのか？」

何か悪いことでもあるのか？彼女の可愛い姿が見れるなら、いくらでも待つだろ。

「当然。試着室は…、あっちだな。というか、一つしかないのだよ。」

まあ、そんなに大きい店じゃないから一つで十分なのかもな…。

「ほれ、行くぞ。」

早く、着替えた姿が見たいものだ。

やばいです…。狭い密室（試着室）に薫と二人きり…。しかも薫は半脱ぎ状態というオプシヨン付き。薫とは反対の方向を向いているとはいえ、理性も状況もやばい…。

何故このような状況になったんだろうか？詳しく思い出してみようか…。

あれは――薫が着替え始めた直後のことだった。

「いらつしゃいませ。」

誰かが店の中に入ってきたみたいだ。まあ駅前の店なのに、客が俺たちしか居なかったっていうほうがおかしいのか。

「なんか、可愛い服が無いかな？」

声の主は……同じクラスの岡（ ）さんだ。どうやら一人みたいだが、これはまずくないか？

岡さんと遭遇。

女性服専門店にいる男＝俺。

女装癖のある変態もしくは単なる変態扱い o r z

話し合いによる解決を試みた場合

話し合い

彼女の付添であると説明。

薫登場

薫は女装癖があると思われるか、最悪の場合、男装がばれる。

……。どれもまじな道がない……。話し合いで嘘をつきようにも、男がこんな店にいる理由なんて限られるから却下。どうしようか？
そつだ、こういう時こそアンサーターカーの力を……

「こつちはどうかな？」

！！！！？？？？

岡さんが来ちゃったよ、おい！！

そつだ、見つからなければいいんだ！！隠れる場所は……ここしかないのか……。

……というわけで、密室で二人きりだったのでした。

「モロモロゴ~~~~~（栗須~~~~~）」

薫の口は押えています。俺の手で。うるさくてばれたら、まずいで。

「少しの間だけ静かにしてしてくれ、薫。」

小さな声でそう伝えると、薫の抵抗がなくなった。俺の声から真剣さをかんじたんだろう。

「やっぱり見当たらないか。次の店に行こう……。」

薫が、岡さんの声を聴いて固まる。ようやく状況がつかめたんだろう。

足音に意識をやりつつ静かに待つ。薫との接触はあくまで考えないようにする……。

……柔らかいな……。ハッ！俺は何を考えているんだ！！

「ありがとうございます」

店員の、この声で安堵する。どうやら岡さんは出て行ったみたいだ。

「じ、じゃあ、俺は外で待ってるから……。」

「……………あ、ああ……。」

これは土下座確定かな……？

― 数分後

「着替え終わったぞ、だが、その前に……………」!

薫が絶句。さてその理由は…?

答え、俺がガチ土下座をしているから…でした。

「く、栗須!?!べ、別にそこまでする必要は…。」

「大変申し訳ございませんでした…。以後、このようなことがないように気を付けます…。」

「だ、大丈夫だからな…!少し恥ずかしかったが、理由は分かるし、しょうがないことだからな!」

本当にいいんだろうか?彼氏とは言え、許されるんだろうか?

「本当にいいのか…?」

「あ、ああ。それよりも…………服の感想を…………。」

そういわれたので、顔を上げる。薫の服装は、ライトグリーンのワンピース。余計な装飾がないタイプだが、むしろその方が薫に似合っていると思う。

「どうだ……………？似合っていないか…？」

「……………いい。」

よく見ると午前中に着ていたものより、丈が短い。薫の中ではかなり攻めたほうなんだろうな。

「うん、すごくいいよ、薫。かわいいし、似合ってる。」

「……………!?!?!?!?!」

こういう褒め言葉に過剰に反応する薫を見るのは、つい最近の楽しみの一つだ。寮の部屋でも、たまにいきなり褒めて楽しんでいる。

「そ、そうか…。だったら、これを買おうかな？」

「うん、似合ってるし、買うべきだな。」

「分かった。着替えるから待っていてくれ。」

そう言って、試着室に戻っていきこうとしたんだが、このままでよくないか？

「買ったと思ったら、このままでいいだろ？」

「は、恥ずかしい……………」

「なら、そのままです。」

「……!!??」

恥ずかしがる薫を見られるのなら、このままでOKですよ。

「すいませくん、店員さん!」

「はい、なにかご用でしょうか?」

「この服なんですけど、買った後にそのまま着て帰っても大丈夫ですか?」

「もちろん大丈夫です。」

「なら、お願いします。」

そのままレジのほうに向かう。「やっぱり着替え…」とか言っている薫も引きずっていく。

「5,250円になります。」

自分の財布から1万円を出す。事前に、結構な金額をおろしておいて正解だった。

「お釣りの4,750円と、彼女さんが着ていた服です。」

手渡された袋の中にはさっきまで薫が着ていた服が入っていた。

「わざわざすいません。ありがとございました。」

「いえいえ、これも仕事ですから。では楽しいデートを。またの来店をお待ちしております。」

「ほら、行くぞ、薫。」

「う〜……。恥ずかしい……。」

「やばい、すごく可愛い……。いますぐお持ち帰りしたいけど、デートを楽しんだ後からでも遅くはない!!」

「そろそろ三時だな。何か食べようか?」

「……………本当に着替えたら、だめなのか?」

「勿論、だめだ。」

「……………ハア。だったら、何か甘いものが食べたい……。」

「甘いものか……。今日は暑いし、アイスなんてどうだ？」

「……………それでいい……。」

そっけない返事だが、その言葉とは裏腹に、体は物凄く行きたくさな感じたな。

「こっちだぞ、薫。」

毎度おなじみ、高性能ナビゲートシステム、通称アンサートーカーの出番だ！

……………どこでチート能力の使い方を間違えたんだろうか、俺は……。

着いた先は『ゴルゴ30アイスクリーム』……………色々と間違っている気がする。気にしたら負けだな。

「で、薫は何にするんだ？」

「……………。」

「決まっていってことか…。」

まあ、薫ならそうなると思ったけどな。

「初めてなら普通に“バニラ”とか“ベリーベリーストロベリー”とかにしておいたらどうだ？」

「……………そうする。」

ならその二つのダブルで決定だな。

注文では、薫用の“バニラ”と“ベリーベリーストロベリー”のダブルと、俺用の“キャラメルリボン”と“抹茶”のダブルを頼んだ。

「立って食べるのはあんまり好きじゃないし……………、お！ちょうどいいところに公園があるな。あそこで食べようか？」

「あ、ああ……………。」

アイスクリームに集中しすぎだろ…。

「あゝ、つめて〜。やっぱり、夏に食べるアイスは最高だな。」
公園の木陰で涼みながらアイスを食べる。直射日光が当たる場所だとアイスがすぐに溶けるからな。

「……………ペロ……………パク……………ペロ……………」

一心不乱にアイスを食べる、薫。小動物みたいで可愛いんだが、

「おい、薫。ほっぺたに、アイスクリームついてるぞ。」

「……………パク……………ペロ……………レロ……………」

無視かよ…。そっちがその気なら、こっちにも考えがある！

「……………ペロ。」

「!?!?!」

舐めてやったぜ！おいしかった。何がおいしかったかは、言わないが。

「な、な、な、な……………!?!?」

「アイスがついてるって言ったのに無視するからだ。おいしかったぞ。」

薫は顔を真っ赤にして、ごまかすようにアイスを口の中に掻き込む。

……もう少しぐらい、いたずらしてもいいよな？

薫のほうが先にアイスを食べ終わる。一心不乱に食べてたし、掻き込んでいたから当然だな。俺の方は、下の段の“キャラメルリボン”が残っている。

「薫、“キャラメルリボン”もいるか？」

俺の方を見ていた薫が、物凄い勢いで顔を縦に振る。

「そうか、なら、アーン。」

そうやって差しだしたのは、俺の口withアイス。まあ、食べたのなら、口移し というわけだ。

顔を真っ赤にしながら悩む、薫。食欲と羞恥心の天秤がぐらついてるんだろう。

結果：食欲の勝利！

「ん…………あむ…………レロ…………ちゅぱっ…………ぶはっ。」

人生二回目の大人のキス。味はキャラメル味。

「うまかったか？」

「……………味なんか分かるわけないだろ…………。」

ご尤もな意見だ。今度は普通にあげるか。

その後はごくごく一般的な「アーン」をした。顔を真っ赤にしなから口を開ける姿に萌えた…とだけいっておく。

「アーン」って普通は女の子にしてもらってもんじやないか？と思っただのは余談だ。

― 続く。

2話 ゴルゴとアイスと青春中（後書き）

というわけで、いろいろと問題のある回でした。

ゴルゴ30アイスクリームって…

ゴルゴ重視なら サーティ（＝30）じゃなくてサーティーン（＝13）だし、

アイスクリーム重視なら 一個足りないし…。

どんな店なんですかね？マナーの悪い客は狙撃されるんですかね？

どうでもいい話をしました。

次回で初デートは終了の予定です。

では、次回の更新で！

3話 ボウリングバトル！（前書き）

どうも、ネット麻雀ばかりし過ぎて更新が遅れがちの作者です。
すいませんm(_____)m

四暗刻単騎が出て調子に乗ってました…。今度からは自重します…。

10月からは、リアル（学校、サークル等）>更新>>>>>>>
ネット麻雀 で行きたいと思います。よろしく願います！

3話 ボウリングバトル！

前回のあらすじ……食事の続き（िंगス）

- ・ 薫の服を買う
- ・ アイスクリーム！

薫にアイスを食べさせた後、しばしの間公園でゆっくりすることに
した。勿論、薫のひざまくらの上で。

「次はどうしようか、薫？」

「……そうだな。」

今は三時過ぎ。六時ころには須野原を出たいから、三時間も残って
いない。

「カラオケとかボウリングとかいろいろ候補はあるけど……。」

「このままゆっくりするのは、ダメなのか？」

「若いんだから、こういう時は思いっきり楽しむべきだろ？ そうだ
な……、今日はあんまり動いてない気がするから、ボウリングで遊ぶ
か？」

「僕はボウリングをやったことないんだが……。」

「なら、ちょうどいい。俺が、手取り足取り教えてやるよ。」

原作だったら、服装のせいであんまり上手くいってなかったよな？

「……………じゃあ、しつかり教えてくれ。」

なら、早く移動しないと。時間は有限なんだから。

「というわけでやってまいりました、ボウリング場！」

「……………誰に話しかけてるんだ、栗須？大丈夫か？」

「そう言わなければいけない気がしたんだ。」

「そ、そうか……………」

前にボーリングをしたときは確か……………小学生の時だったか？ハイスコアは180だったかな。なんでパーフェクトじゃないかって？ボウリングは身体的なスペックよりも、技術が重視されるから練習しないと無理なんだよ。

「移動時間とかを考慮すると、二時間もないから……」
「2、3ゲームくらいかな？まあ、やってる途中で決めればいいか。」

「もう二時間もないのか……。」

「まだ二時間もあると思うんだよ。じゃあプレイヤーネームを決めるぞー！」

「自分の名前のままはダメなのか？」

「別にいいけど、違う名前のほうが面白いと思わないか？俺は……
“モンブラン”にしようかな。栗須の“栗”関連で。」

「そんなものなのか……。僕はどうしたらいいんだろうか……？」

薫のプレイヤーネームか……。名字の大地から“アース”とかは……
……厨二だな。

「そうだな……。薫は……」
……
「“かおる”でいいんじゃないか？」

「さっき、『違う名前のほうが面白いと思わないか？』って言ったのは、どこのどいつだろうな？」

「……………記憶に『ぞいません』。」

思いつかないんだからしょうがないだろ……。

「別に“かおる”でいいんだがな。」

「じゃあ、早く投げに行くぞ。」

フロントにプレイヤーネームを伝えて、指定されたレーンに移動する。

「まずはボウリングシューズとボール選びだな。薰の靴のサイズは何センチだ？」

「靴のサイズは大体23・5センチだ。」

「なら借りてくる。」

靴の貸出場で23・5センチの靴と自分用の27センチを借りる。

「ボールは自分の感覚次第だから、自分で選ぶしかないな…。ちょっと持ってみる。」

選んだのは11ポンドのボール。本来なら重すぎるかもしれないが、鍛えられている大地にとってはこれぐらいがちょうどいいはずだ。

「よく分からないが、悪くはないと思う。」

「最初のゲームは練習のつもりでいいからな。色んな重さとかタイミングとかを試してみよ。」

ついでに俺もボールを選ぶ。俺の場合は、一番重い16ポンドの一本選んだ。これでも軽すぎる気がするんだけど…。

「コツは、一番前のピンを斜め横からあてる感じでやることと、投げる時はピンを見るんじゃなくて手前の黒い三角形を目印にして投げるといいぞ。」

「分かった…。」

「まずは、見本を見せるから。」

そう言って、まずは一球目を投げる。右端から投げて、手前の黒い三角形：スパットの右から2と3個目の間を狙う。

うまい具合にいつてストライクになる。久しぶりだけど上手くいつてよかった。『見本を見せる』とか言ってるガターだったらダサすぎるにもほどがあるよな…。

「よし！ほい、ハイタッチだ、薫！」

パチン！といういい音が鳴る。

「最初なんだからあんまりスコアは気にするなよ。」

「あ、ああ…。」

そうやって投げられたボールはぎこちないフォームから投げ出され、ガターになる。

「もう少しリラックスしたフォームで投げないと。どうかしたのか、薫？」

「す、す、スカートが気になる…。」

そういえば、原作でも似たような場面があったな…。

「普通に投げれば問題ないはずだし、変な投げ方をする方が危ないぞ。転倒とか。」

「わ、分かった。次は気にしないで投げてみる…。」

二投目はまともなフォームで投げる。倒れた数は6本。さっきに比べたら段違いだ。

「み、見えなかったか…？」

「全然。それとボウリング自体のアドバイスをすると、もう少し左に投げたほうがいいと思うぞ。」

「分かった…。」

そんな感じで1ゲーム目は過ぎて行った。薫は徐々にコツをつかんできたみたいで、後半はスペアやストライクも取れていた。(スコア：栗須192、薫102)

「2ゲーム目は……軽く勝負してみるか、薫？」

「でも、僕は栗須には勝てないと思うぞ。」

「ハンデ……そうだな、30点差以上つくかどうかで勝負するか？」

「いいだろう、それだけの差があれば僕にも十分勝機があるぞ。」

実際の所、薫の後半のペースを維持できればいい勝負になると思う。

「じゃあ、負けた方は勝った方の言うことを一つだけ聞くこと。ただし、権利は今日のみ有効。」

「分かった……！」

さあ、盛り上がってきたな！

――第10フレーム

先攻の薫は166で終了。一方の俺は…

「三連続ストライクで逆転か……。」

勝つためには残り29点。第9フレームは9本しか倒せなかったのがいけなかった。

「さすがの栗須もここまでか？」

若干ドヤ顔の薫。ほっぺをグニョグニョしてやりたい…！

「なら、俺の隠された力を見せてやろう！」

そう言つて左端から投げたボールは、大きな弧を描いてピンに吸い込まれていった。

「な、な、な……………」

ストライク。しかし、今まではストレートボールを投げていた俺がいきなりカーブボールを投げてストライクを取ったことに薫は驚いているようだった。

「どうだ。これが俺の本当の力だ！」

…………… 格好つけてみたが、内心はドキドキだった。

「（ストライクになってよかった）。レーンのコンディションは毎日違うからぶつつけ本番とか自殺行為だろ…。」

カーブボールの曲り具合は日によって変わる。でも、なんとなく投げたくなかった。

二投目…ストライク。レーンの状態は一投目でつかめていたから楽

だった。

「……………」

薫は黙り込んでじっとこちらを見つめる。

三投目…。コースは前の二球と変わらない。いったか…？

ピンに当たる…。そこにピンは残っていなかった…。

「よっしゃあ〜！」

危なかった〜。もう少しで負けるところだった。

「……………」なんで最初から本気を出さなかったんだ？」

本気…か。実際は違うんだよな〜。

「最初から本気だったさ。カーブボールは慣れてないから連続して成功させるのは難しいんだよ。それに、俺の実力だとカーブボールでスペアは取れないし、スペアチャンスの度にストレートに切り替えてたら調子が狂っちゃう。だから、使わなかったんだよ。」

1ゲーム単位で考えるなら、俺の場合はストレートで投げたほうが点数が高い。これは事実だ。

「まあ、というわけで、罰ゲームな。」

「……………」言はない。」

「まあ、内容は白麗陵に帰ってのお楽しみというところで。そろそろ時間だし、帰るか。」

「……………分かった。着替えていくから、また駅前で待っていてくれ。」

「了解。」

―再び、須野原駅前

「待たせた……………」

「それでもないよ。それにちょうどいいタイミングでバスが来た。」
「実際は全然待っていない。とある（…………）場所に寄っていたからな。」

「本当だな……………。ところでその袋は何だ？」

「まあ、ちょっとしたお土産みたいなもんだ。」

後でのお楽しみってやつだ。

「そうか……。」

「ほら、そんなことより早くバスに乗らないと。行くぞ、薫。」

「ま、待ってくれ。」

そのまま、白麗陵の近くまで行くバスに乗る。バスの中は俺たち以外の乗客は数人しかいなかった。なんとなく無言が続いたが、薫に話しかけてみることにした。

「それにしても今日は楽しかったな、薫。」

返事がない。どうかしたんだろうか？

「薫？どうかし……。」

「スー……スー……スー……。」

「寝てるのか……。昨日は興奮して寝れなかったみたいだし、当然か。」

4時くらいまで起きていたみたいだしな。どうして、分かるかだつて？俺は興奮して一睡もしてないからだよ。

「また今度一緒に出かけような……。」

気持ちよさそうに眠る薫の顔を眺めつつ頭をなでる。そんな感じで

時間は過ぎて行った。本音を言つと俺も眠りたかつたけど、寝過ぎしたらまずいから我慢だ。

「そろそろ着くぞ、薫。起きろ。」

「……………?」

「起きたか。そろそろバス停に着くから準備しろ。」

「わ、分かった。」

バスがバス停に到着。料金を支払って降りる。

「今日の晩飯は何にしようかな。よし、和食系にしよう。」

「……………さっきまでデートだったのに…もう飯の話をするのか…?」

「すまん、すまん。ところで、薫。」

「なんだ?」

「罰ゲームは忘れるなよ?」

「……………分かっている。」

罰ゲームが待ち遠しいな。

― 自室

夕食や風呂を済ませあとは寝るだけになった。その前に罰ゲームがあるがな。

「……というわけでこれを着けてくれ。」

「……………なんだ、これは？」

「見てわからないのか？」

「……………猫……。」

薫には、猫のコスプレ衣装を手渡した。これは、帰る直前にとある（……）場所で購入しておいたものだ！

猫耳＋肉球＋尻尾（黒猫）の三点セット。これを装着してもらおう。

「ほら、早く着けるんだ。罰ゲームなんだから。」

「くっ……………。分かった…。」

そんなに嫌なのかな？かなり似合うと思うんだが。

「……………これで、どうだ？」

……………完璧だ。パーフェクトだ！

「完璧だな。よし、今の薫は猫だから、語尾に『にゃん』とつける
じよ。」

「わ、分かった…にゃん…。」

……………くはっ！これは、愛でるしかないな。

「こ、こら、何をするんだ、にゃん…！」

「モフモフしてるぜ…。はっ…。」

愛でてみた。猫みたいに体温が高いし、小柄だから、抱きしめるの
にちょうどいい。夏だけど、くっついていて心地いい。やばい、寝
不足で眠くなってきた…。

「……………眠い。このまま寝る。」

「ちょっと待つんだにゃん！離せ〜、離すんだにゃん！」

「……………断る。このまま猫抱き枕になりなさい。罰ゲームだから。」

手の中の“猫抱き枕”をいじりながら、深い眠りに落ちて行った。

「にゃ、にゃめ〜！？そ、そこは……にゃ〜ん！」

薫が何かを言ってるみたいだが、もう聞こえなかった。

翌朝、目が覚めると“猫抱き枕”を抱いたままだった。どうやら薫は逃げ出さなかったみたいだ。（実際は逃げ出せなかっただけです。）

「……………寝顔、可愛い……。」

薫の寝顔は天使みたいだった。朝から良いものが見れて、最高だ！

いたずらとして、いろんなところを撫でたり、くすぐったり、舐め……なんでもない。そんなことをしていたら、薫が起きた。

「おはよう、薫。」

「……………にゃん……。」

顔を真っ赤にした薫がそう呟いた。……………昨日の続きを再開するか
な。

「にゃ、にゃ……………ん!!」

朝から寝でてやった。昨日の2倍ぐらいの勢いで、寝でてやった。

それから2時間ぐらい、薫の「にゃ〜ん!!」という悲鳴は続いた
らしい。

3話 ボウリングバトル！（後書き）

最初は、「ボウリング」を「ボーリング」って書いていました。

「ボーリング」だと穴掘りになっちゃいますね（^ー^；）

自分で気付けてよかったです。

似たような間違いで「ガター」と「ガーター」がありますね。ボウリングの”G”は「ガター」が正解らしいです。

「ガーター」だと女性のストッキングを止めるバンドになっちゃうんですね。自分で調べてみて、勉強になりました。実際は「ガーター」って言ってますけど。

どうでもいい雑学でした。

ではまた次回の更新で！

4話 ナツメ(クロウメモドキ科の落葉高木) (前書き)

甘さは0ですね。まあそんなときもあります。

4話 ナツメ（クロウメモドキ科の落葉高木）

『はいはい、生徒の呼び出しですよ。高等部一年従育科の
日野秋晴さんと栗須真二さんは、至急事務室のとなりにある応接室
まで来ちゃってください。……え？もう一回言っの？』

楓さんの放送で呼び出されたが、どういう要件だろうな？秋晴は従
姉妹の棗なつめが来ているんだらうけど、俺には心当たりがない。

お、秋晴と腹黒とドリルだ。あいつらのほうが先に着いてたみたい
だな。

「あつくん、久しぶり！」

秋晴が女の子に抱き付かれた。

「おま……………なつめ…？」

「にやつ、疑問形なの！？久しぶりだからって酷い！でも許してあ
げるねっ。」

どうやらあの子が日野棗みたいだな。ここは茶化すべきか？

「おゝ、お二人さんお熱いね。ヒューヒュー（棒読み）」

「……………『あつくん』？」

「……………どつという関係ですの……………？」

女性陣は怖いね。早めに言い訳しておいたほうがいいぞ、秋晴。

「これ、あれ、親戚。従姉妹で、棗。日野、棗。」

「彼女じゃないのか？（棒読み）」

「……………親戚ですつて？」

「従姉妹さん……………ですか？」

「栗須！？お前いつからいたんだよ！つて、そんなことより、何とかしてくれよ！」

そんなこと言われても…。種をまいたのはお前なんだから、自分で処理しなさい。

「知らんがな。というか、そつちの子はお前の従姉妹の日野棗さんだ…ということしか分からんかったぞ」

俺の言葉で棗さんはこつちに振り返って、

「初めまして、日野棗です！あつくん……………じゃなかった、うちの秋晴くんがどんな所で暮らしているのかを見に来ました！」

秋晴の腕をしっかりと抱いたまま、自己紹介された。一応俺も自己紹介しておくか。

「俺は秋晴と同じクラスの栗須真一。よろしく。」

「よろしく!」

テンション高いな。まあ、いい子だっていうのはすぐに分かったけど。

にしても俺は何で呼ばれたんだ？

「あれ、栗須くんは……。まちがえちゃった!栗須くんはこっちですよ。」

横から楓さんの声があった。その先にいた人は……………

「こんにちは、まりなさん。今日はどうされたんですか?」

「こんにちは、栗須さん。今日はですね、少しお願い事がありました……。」「

「どうされたんですか？」

「みみなに…渡してもらいたいものがあるんです。」

「はあ……。」「

直接、渡してあげればいいんじゃないか？どうして俺が呼ばれたんだらうか？

「このポーチを渡してもらいたいです。」

「どうして私が…？いえ、もちろん協力しますが。」

「その………。夫とみみなが揉めていまして…。みみなが呼び出しに応じない可能性が高いんです…。」

揉めている？気になるけど、プライベートなことだし聞くのはやめておこう。

「なるほど。それで私を呼ばれたんですね。」

「それで、お願いできますか？」

まりなさんにはお世話になったし、断る理由がない。

「任せてください。確実に届けます！」

「ありがとうございます。」

さて、みみなはどこにいるかな？アンサートーカーで答えを出してもいいけど、原作だとこの後で秋晴たちと合流しているから、それに着いていけばいいか。」

「お、栗須の用事は終わったのか？」

「いや、これからみみなにお届け物だ。秋晴、お前の方は？」

「俺はこれから棗に学園内を案内することになった。」

「ふ〜ん。まあちょうどいいや。俺も着いていくぞ。」

「おい、届け物はいいのか？」

「まあ、大丈夫だ。どこにいるのかは分からないから、学園内を探す予定だったんでな。」

「そうか。じゃあ、行くか。」

そんなわけで、学園内ツアーが始まったのであった。

「——それにしても、あつくんも酷いよね。」

「い……………いきなりなんだよ？」

「いきなりなのはあつくんでしょ！？あたし、あつくんが白麗陵にいるなんて全然知らなかったんだよ？夏休みなのに全然帰ってこないから変だなー、とは思ってたけど、パパもママもすっかり教えるのを忘れてたって言うし……………もうっ。」

「まあ、秋晴くんってば最低ですね。お嫁さんになりたいのなら、もう少し女心理解しておいた方がいいですよ？」

もうお嫁さんネタはやめてやれって、腹黒…。

「これだから粗雑な男は駄目ですわね。紳士のたしなみという身に付けておいて当然のことですら満足にできないなんて、問題外ですわ！」

ドリルを装備しているなんて、問題外ですわ！

「まあ、聞く限りではお前が悪いな。さっさと謝っとな。」

「……悪かったよ。勢いで決めたことだったし、編入してから結構バタついていて余裕がなかったんだ。反省してる。」

「むっ……反省してるんならいいんだけど。女の子にはちゃんと優しくしないとダメなんだからね？」

「あーいよ、分かってる分かってる。」

「あつ、でも不用意に優しくし過ぎるのもダメだからね!？」

まあ、ほどほどにすることだな。秋晴には分かってなそうだけど。

「……え?どうしろと?」

「やっぱり無し、今の無しね!」

本当にいいのかそれで?しっかり分からせておいた方がいいと思うぞ。自分の好きな人が無意識に惚れられるかもしれないんだぞ?

(薫という彼女がいながら、みみなや深閑を無意識に落としている奴が何を言ってるんだ!! BY作者)

なんか変な声が聞こえたような……。気のせいかな?

「ねねっ、あつくん。そういえば従育科って普段どんなことしてるの?」

「あ?」

「執事さんやメイドさんになる為の科なんだよね？それってどーすればなれるのかなって、実は興味津々だったりするのね。」

「あー……………それは、だな…………。」

秋晴が俺のほうをチラ見する。まあ、あの授業はな…………。

「い、いろいろあるよな、栗須！」

最悪だ！あいつ、俺に話を振りやがった！？

「そ、そ、そうだな。今はまだ体力づくりの授業が多かったかな？執事やメイドだけではなくてすべての職業においての基本は体力だし、こんな感じだよな、秋晴？」

「あ、ああ…。他には奉仕活動としてウェイターみたいなことしたり…。あと、車と船の運転の仕方を習ったりしたかな、うん。」

「へええ、すごいね！」

「船は2級と特殊の船舶免許を取ったから、大型じゃない船で岸からあまり離れない場所までなら運転できるぞ。車の方は18歳になったら免許を取りに行くらしいんだけどな。授業の一環で。」

「ふああ…。他とはやっぱり違うね。」

「違うというよりはでたらめだな。あれなんかはいい証明になると思うぞ。」

そうやって秋晴が指差したのは、白麗陵の寮。

「なっ……に、あれ？あれ、寮？それとも書き割り？」

「あんなでつかい書き割りがあるわけないだろ。中はどうなってるかわからないけどな。そこらへんは朋美かドリルに聞いてくれ。」

「そうですね、屋敷タイプの寮には露天風呂があるよう……」

腹黒が説明している間に秋晴が近くにやってきた。何か用でもあるのか？

「そういえば栗須は桜沢先輩に届け物があるんじゃないか？寮まで来たんなら、確認して来いよ。ここら辺で待ってるから。」

そう言われたら行くしかないな……。この後でみみなに会うのは、ほぼ確実なのに……。行かないと不自然だよな。

「……………行ってくる。」

結果？いなかったよ。分かってたけどね……。

「お、戻ってきたな。」

「……ただいま。自室にはいなかったよ。管理人さんに確認してもらったから確実だ。」

「そうか。なら、次は花園に行こうぜ。」

「おう……。」

といつても花園は寮から結構近くにある。

「俺はよく知らないけど、結構いろんな花があるらしいぞ。季節ごとの入れ替えで、今だったら、向日葵、トケイソウ、サフィニア、マリーゴールドとかだな……。あとは名前が分からないけど、どれもきれいに咲いてる。」

「へええ〜、楽しみ……。あつ、凄い！空気の匂いが変わったよ！？」

「ここの世話つて、あつくんやクリスくん達がやってるの？」

なんか、“栗須”の発音が外人ぽかったような……。まあ、漢字を知らなかったらしょうがないのか？

「いや、庭師みたいな役割のメイドさん達がやってる。春先からは世話の仕方とかを教えてくれるらしいけど。」

「ふうん、執事さんってそんなこともするんだ？」

「普通はしませんわよ。」

ここで口を挟んだのはドリル。まあドリルがこの中で一番詳しいだろうな。

「実際はしないけど、統括役として評価をするにはある程度知っておく必要があるってことだ。ま、庭園のある家なんて少ないし、あつても趣味レベルのものらしいから俺たちの出る幕はないけどな。」

「私のイギリスの実家にはどこに出しても恥ずかしくない、それはもう美しい、自慢の庭園がありますわ！」

へえ、そうか。で、どうした？

全員がドリルの自慢をスルーしているうちに庭園内に着いた。

「ほえ〜〜……………」

「すごい数だろ？種類も数も多いから世話が大変だけど、近くからでも遠くからでもきれいに見えるように計算されているらしいぞ。」

「あつくん達は何を手伝ったの？」

「ガチな肉体労働。草ぬきとか腐葉土運びだな。」

「ガチ”ってほどではなかった気がする。トレーニング不足だよ、
秋晴。」

「何度来てもここは綺麗でいいですね。間をおいて来ているので、その都度違う花々が迎えてくれるからそう思うのかもしれないけど。」

「朋美はたまに来るのか。そっちのドリルは？」

「ッ、来ませんわよ！美しい花は好きですわ、けれど虫がきらいですのよっ！」

「虫は仕方がないだろ。蜂とかの危険な虫は対処してあるから、危険はないんだし……。」

お嬢様方に怪我を負わせるわけにはいかないから、何かしらの対策を講じているらしい。

「蜂と言えば……。小学生の頃に、蜂に刺されて死んだ男の子の映画の話をクリックスメートにしたら、蜂を見てすぐに逃げ出したり、蜂除けに目立たない色の服を着るようになったりした子がいましたね……。秋晴くん、あれはだれでしたっけ？覚えてます？」

「ああ、覚えてるよ！というかお前も覚えていつてるんだろうが！」

「あつくん、落ち着いて！よく分からないけど、泣きそうになってるよー!？」

秋晴のトラウマがえぐられてるな……。

でも、一言だけ言いたい。目立たない色の服、つまり、黒の服とかが一番危ないぞ。今更だけどな。

「……………お？」

まあ事実を端折って伝えるとそうだけだな。

「まあまあ、落ち着いて。事故みたいなものだから気にしなくても大丈夫だよ、棗さん。」

「そ、そうなんですか、クリスさん？」

「そうなんだよ。だから心配する必要は……」ところで旦那様。つておい！」

いきなり会話に割り込んでくるなよ！

「こちらの女性は、どなたですか？」

「つ、妻の日野棗ですっ！うちのあつくんがお世話になってます！」

「———どういふことで……邪魔しないでください、栗須さん。」
いつも通りのヒ首を指で挟んで確保する。邪魔するに決まってる。ろ。

そのまま膠着状態が続く。俺に敵意のあるやつだったら反撃するが、敵意は秋晴に向けられてるから、反撃はしたくないし……。困ったな。

「ちっ、残念ながらタイムアップのようです。」

そういつとヒ首にかかっていた力が抜ける。どうやらアイシエが指示を出したみたいだな。

「大丈夫か、栗須？」

「全然、問題ないな。それと棗さん。」

「は、はい！」

「冗談は、ほどほどにしておいた方がいいよ。あの二人にはあの手の冗談は通じないから。」

「わ、分かりました！」

本当に分かったのかね？

「それで、この暑いのにあんたらは花見か？」

「いいえ違いますよ豚——じゃなくて、旦那様。不肖ながら私がこの一角でハーブを栽培しているので、その世話をして来たところです。お嬢様にご足労願うのは不本意ですが、心優しいお嬢様が是非と賛同をして下さいましたので、こうして過ごしていたのです。」

「それは分かったんだが、暑くないか？ただでさえ真夏日なのに、そんな恰好で土いじりなんて。」

「問題ありません。アイシエお嬢様とこのヘディエが育った場所は中東の砂漠の多い地域でしたのでこの程度の暑さは平均気温です。湿度も高く、夜は一転して冬のような寒さの土地で空調設備など使用なさらなかったお嬢様ですよ？この程度の暑さ、なんら障害になりません。」

その言葉に反応するようにアイシエが秋晴に微笑みかけ……横に倒

れて行った。ヘディエが地面に倒れる前にキャッチしたからよかつたけど、受け身を取らずに転ぶのは危険だぞ。

「そ、そんな！？アイシエお嬢様がこの程度の暑さで……ハッ！まさか4年間の日本での快適生活で体が文化慣れして、現代人テイストに！？」

「あゝ、意外と適応するものだからな……。」

それだけじゃないと思うぞ。さつき、“育った場所は湿度が高い”って言ってたが、所詮は砂漠地帯の中では、の話だろ？日本の湿度を甘く見たらいけないぞ。それに“空調設備は使わなかった”っていうのも、砂漠地帯の家は自然に暑さを緩和するように作られているから、あんまり参考にはならないと思うぞ。

そう考えていると、ヘディエはアイシエを担いでどこかに去って行った。

「行っちゃったな……。まあ、いい厄介払いができたと思うべきか？」

「人の不幸を喜ぶなんて、なかなかいい趣味ですね、栗須くん？」

「お前にはいわれたくねえよ、朋美。」

腹黒は常に人の不幸（主に秋晴の不幸）を楽しんでるだろうが。その文句を言いたかったが、どうやら秋晴たちのほうで話がまとまったみたいだ。

「ほらほら、あつくん次、行くよ〜〜〜」

「…そうだな。次に行くか。」

「どうやら次に進むみたいだ。そろそろ、みんなが来るな。」

「—— 続く。」

4話 ナツメ（クロウメモドキ科の落葉高木）（後書き）

次回はみみな登場！

いい加減、深閑に出番を！と考えていますが、なかなか機会がありません…。

頑張ります！

ではまた次回の更新で！

5話 孔明の囃（b yまりな）（前書き）

ほとんどオリジナル展開です。

秋晴の話は、腹黒に任せて放置しておきました。

5話 孔明の農（byまりな）

前回のあらすじ：・みみなへのお届け物を預かる

- ・白麗陵の異質さを再確認
- ・中東生まれの女性が暑さで倒れる

アイシエが倒れた後、俺たちは小一時間くらい庭園や温室を歩いて回った。温室の中は地獄だと思いきや、空調設備で一定の温度に保たれていた。資源の無駄遣いだな。見て回った後は、すぐに美術館に移動することになった。

「見えましたわ。あれが白麗陵の誇る美術館ですよ。」

「わ〜〜、また凄い建物だねえ。よく分からないけど、なんだがギリシャっぽい雰囲気があるよねっ。」

「俺にはお前の感性が分からないけどな。あと海外知識も。」

あの建物は…バロック建築を意識して建てられたはずだ…。そんな話を授業で聞いた気がする。秋晴の返事が否定的なものもそのせいだろう…。お嬢様二人組も残念そうな目になってるし、何とも言えない状況だな…。

「俺もまだ中に入ったことがないんだけど、昔の芸術家の作品とかはあんまり置いてないらしいぞ。うちの生徒作品とかが飾ってあるらしいけど、それでいいのか？」

「だからいいんじゃない！だってつまり、桜沢みなさんの作品があるってことよねっ？」

「ええ、ちゃんとありますよ。」

「美術館がある以上、当然ですわね。」

「そういえば、あの子供先輩は有名人だったな……。」
秋晴、“子供先輩”って………なかなか特徴をとらえてるな。

「まあ、みならの作品はテレビで放送されることもあるし、雑誌のインタビューに応えたりしてるしな。かなりの有名人だよな。…見た目はそう見えないかもしれないけど……。」

俺の言葉の意味の分かる、秋晴、腹黒、ドリルは苦笑い。棗は意味が分からないって顔をしている。

「……あら？噂をすれば何とやら、ですね。」

「なん………？」

ひよこひよこことこちらに歩いて来るのは、まぎれもなくみなだ。五人も固まっていると目立っていたのか、みみなどは俺たちに気が付いたみたいだ。

みみなはこつちに気が付いた後、俺たちのほうに向かって小走りでもやってきた。そんなに遠くないのに息を切らしているのは、みみなだからしょうがない。

ただ、熱海の旅行の後は、体力をつけるためにトレーニングをしているらしい。いい心がけだと思う。にしても、そんなに自力で泳ぎたかったのか…。

「こつ、こんなところで何してるの？もしかしたら、美術館に行くつもりなの？」

「ええ、そうなんですよ。こちらにいる方が秋晴くんの従姉妹さんで、今校内の案内をしているところなんです。」

そう紹介された棗は……男だったら、間違いなく通報されるような表情だった…。さらに手をニギニギして、セクハラ準備完了！といった感じだ。

「かつ——可愛いっっっ！」

「わぶっ………！？」

みみなが棗にホールドされた。まあ、頑張れ、みみな……。

「凄い凄いつ、この子凄いや物凄く可愛いよ?! きゃああつ、もう手とかちっちゃい!」

「ゃ、あ、う………!?! ちゃ、止めっ——」

「ほらほらあつくん、見てこのラブリーさ！もうこれはこのままお家に連れて帰るしかないよね！？」

「いや落ち着け、それは拉致という名の犯罪だから。」

正式な犯罪名は“未成年者略取及び誘拐罪”かな…？みみなは19歳だったからそういう名前の法律に引つかかる……ってリアルに考える必要はないか。

「ところで、棗さん。さつき話に出た“桜沢みみな”ってどんな人か知ってるのか？」

一応、聞いてみよう。たぶん知らないだろうけど。

「勿論知ってるよ！国民栄誉賞や人間国宝に選ばれるかもしれないって言われてるくらいだしっ、でもこの子の可愛さもそれに匹敵するよ！？」

まあ、みみな本人の写真は雑誌に出てなかったから、実物がどんな人か知らないんだろうな。

「棗さんが揉みくちやにしてるのが、その桜沢みみなだよ。」

「……………にゃ？こ、この子が？」

「み、みみなは、みみなだよ？」

「は、初めまして！あたしあつくんの従姉妹で嫁な棗って言います！それで私、みみなさんのファンなんです！」

「ふにゃ？……あり、がとう……」

「わくく凄いつ！本物のみみなさんだよ！可愛くて小さいけどみみなさんだよ！？」

「棗、桜沢は年上の人なんだから失礼なことをするなよ……」

秋晴がやんわりと注意したが、棗の暴走はなかなか止まらない。

「い、いくらみみなが大人だからって、お、怒るときは怒るんだからっ」

赤くなりながら大きな目に涙をためているから、全然、怒っているように見えない。迫力のかけらもないな……。

「はいはい、落ち着け二人とも。特に棗さん、今の態度は社会的に見てOUTだから。通報されてもおかしくないから。」

俺が棗さんに注意すると、ようやく棗はみみなからすこし離れた。かなり名残惜しそうにしていたが……。

「ところで、みみなはこれから絵を描きに行くのか？」

「そ、そのつもりだけど……？」

「そうか……。実はな、みみなにお届け物があるんだが、それが終わるまで持っていた方がいいか？」

そういって、まりなさんから預かったポーチを手に持つ。

「う〜ん……。」

みみなは悩んでるみたいだな……。今日の服装と鞆のサイズからして、荷物は手に持つことになりそうだから、邪魔は邪魔。ただ、俺に迷惑が掛からないかどうかを気にしてるみたいだな。

「そついえば、栗須は桜沢の荷物届けがメインだったな。ここからは、俺たちだけで案内するから、そつち側に着いて行けばいいだろ。執事候補なんだから、それぐらいしたらどうだ？」

「そつしようかな…？みみな、俺がいたら邪魔かな？」

「そ、そんなことないよ……。でも……………本当にいいの？」

「勿論！従育科試験でいつもお世話になってるし、これくらい当然だ！」

「なら、……………お願いしようかな……。」

よし、これで話はまとまったな。

「じゃあ、早速だが行くか？いつもの場所で描くつもりなんだろう？」

「う、うん……………。」

やっぱりな。予想通りだ。

「それ。じゃあ、行ってくる。棗さん、これからの見学も楽しんで行けよ！」

「うん！今までありがとうね。クリスマスくん。行ってらっしゃい
！」

そんなわけで、これからは秋晴たちと別行動になった。

Side: 秋晴

「行っちゃったね…。」

「そうだな。」

まあ、あいつにとってはこの見学案内は、“ついで”だからな。

「ところで、桜沢さんとクリスマスくんって仲が良いの？」

「仲は良いぞ。それがどうかしたのか？」

「え〜とね…。前に読んだみなさんのインタビューが載っていた
雑誌の中に、『一番好きな場所はどこですか？』っていう質問があ

ってね。」

まあ、よくある質問って感じだな。

「その質問がどうかしたのか？」

「うん。その答えがね、『今、気になっている人の隣』って書いてあったんだよっ！あれってクリスくんのことなのかな？って思ったの。」

たぶんそうだろうな……。朋美もドリルも声に出して肯定することはないけど、同じような結論に至ったように見える。

「さあな？そんなことは、本人にしか分かんねえよ。」

興味本位の質問だから、真面目に答える必要はないだろ？

S i d e : 栗 須

「じゃあ、俺はゆっくりしてるから、みみなは好きなだけ絵を描いていてくれ。」

「それなんだけどね……………」。

「どうかしたのか？」

「うん。今日は栗須くんの絵を描かせてほしいかな…？」

簡単にいうと、人物画のモデルってことか？

「別にかまわないぞ。ポーズとかとるべきか？」

「う、ううん。リラックスしてきてくれたら、それでいいよ。」

「了解。」

近くにあった岩に腰掛け、絵を描き始めたみみなに話しかけた。

「ところで、みみな。俺なんかを描いて、おもしろいのか？」

「え……………？ど、ど、どう…かな？」

みみなが物凄く動揺している。

「すまん、変な事聞いちゃったな。今の質問はなかったことにしてくれ。」

「う、うん……………」。

何とも言えない雰囲気のまま、みみなの絵は進んでいく…。

Side:みみな

折角、栗須くんの絵を描くんだから、いいものを描きたい…！だから集中して…

「ところで、みみな。俺なんかを描いて、おもしろいのか？」

“おもしろい”？どちらかというと……“しあわせ”なのかな？自分の…す、好きな人を得意な絵で描ける。みみなにとってはしあわせかな…。でも、そんなこと言えないよ……！！

「え……………？ど、ど、どう…かな？」

う……、なんて言えばいいか分からないよ…

「すまん、変な事聞いちゃったな。今の質問はなかったことにして

くれ。」

「う、うん……………」

自分の本当の思いを伝えるべきだったのかな…？でも、もし、伝えてダメだったら…。みみなはまた一人になっちゃうのかな…？

そんなのはイヤだよっ！みみなをみみなとして見てくれる、大事な人が、いなくなる…。怖いよ…。

Side：栗須

「みみな、どうかしたのか？」

「……………な、なんでもないよ……………」

さっきからみみなのおかしい。うつむいたままだし、表情が暗いように感じる。

「何か悩み事か？」

父親と揉めたって言ってたし、その影響もあるのかもしれない。

「……………」。

「一人で考えてるだけじゃ解決しないことかもしれないぞ？それに、言うだけで楽になるかもしれないし。」

みみなは、しばらくの間考えた後に、ゆっくりとしゃべり始めた。

「栗須くんは……………みみなのことを嫌いになることは…あるのかな……………」

嫌いになる？何を根拠に言ってるんだ？

「そんなネガティブなこと言ってるら怒るぞ。嫌いになるわけないだろ。それとも、これからのみみなは、俺に対して嫌われるようなことばかりするつもりなのか？」

「そ、そんなわけないよ！」

「だったら大丈夫だ。自慢じゃないが、俺は人を見る目はあるんだぜ！みみなはいい子だ、それは間違いないね。」

というか、だれがどう見ても、みみなはいい子だ。

「で、でも……………栗須くんがいなくなったら……………また一人……………」

あゝ、そういうことが。確かに、みみなには俺以外の友達は、まだ……………いないな。

「大丈夫だ。すぐに俺以外の友達もできるし、もう一人になること
もないぞ。」

そう言いつつ、みみなを撫でる。

「あ、ありがとう……………」。

それから10分近く、頭を撫でていたんだが、止めるタイミングを
失った…。そろそろ止めようかな？と思って手を離そうとすると、
みみながいきなり悲しそうな顔になる。どうすればいいんだろうか
…？

「みみな、そろそろ絵を描く作業に戻らなくていいのか？」

「今日は…………いいんだよっ！だから、もう少しこのままで……………」。

「そうか……………」

なら、このままでいいのかな…。

そして2時間後……………。

結局、俺はずっとみみなを撫で続けていた。

そろそろ帰った方がいい時間になったから、お開きになったが、時間には余裕があったらまだまだ続いていたんじゃないだろうか？

そこからは、みみなを寮までエスコートして、解散という流れになった。

それにしても、あのお届け物のポーチの中身は何だったんだろうか？原作では何も触れていなかったから、イレギュラーなのか？

Side: みみな

寮に戻って、一息ついた後、ママからのお届け物を確認することにした。

「ママは何を……………!?!?!?!?」

栗須くんから預かったポーチの中身は……………

?…針(極細)

?……ひ、避妊具(コールドム)

?……に、妊娠検査薬…!?!?

……………このうつつから想像できることって……………そういうことだよね…プシユ〜

こんなもの、恥ずかしすぎるんだよっ!でも、きっといつかこれを使う時が……………

それからしばらくの間、いろいろと考えてしまったのは、みみなは、しょうがないことだと思っただよ…

——その頃のまりなさん

「みみなはしつかりと、あれを受け取ったかしら？」

あの3種の神器があれば、結婚までの流れは完璧よ。みみなが実行できるどうかは怪しいのだけれど、もしかしたら使ってくれるかもしれないわね。できればすべて使って欲しいのだけれど、最悪は避妊具だけでも……。

本音を言つと、一番良いのは、避妊具以外の使用なんだけれどね。

「みみな。幸せのためには、手段を選んでいてはダメなのよ。」

私はみみなの幸せを願っているのよ。頑張っつてね。

(言葉だけを聞けばそこまで間違っているように聞こえなくもないが、人間として大いに間違った行為を推奨しているのは、親としてはどうなんだろうか…？ B y 作者)

5話 孔明の農（byまりな）（後書き）

というわけで、

お友達作りのフラグ、妊娠的な何かのフラグ が立ちました。

今回はコスプレですけど、いまだに栗須の仮装が未定です。ホスト風にでもしようかな？

では、また次回！

6話 コスプレ喫茶 前編(前書き)

難産でした…。

それと、主人公の容姿設定が詳しく(?) になりました。詳しくは主人公設定をお読みください！

6話 コスプレ喫茶 前編

「さあ、今日はとっておきのイベントデーですよー！」

開口一番、学園内一の残念な大人である楓さんが無駄にハイテンションでそう言った。

「本来はこの時間を使って深閑ちゃん考案の『秋は名月 杵臼背負って兎跳びパラダイス』を実行する予定だったのですが、急遽変更になりましたー！ちなみに命名したのは先生で、中止になってちよっぴり残念ですよ。」

近年のスポーツ医学の発展で、兎跳びがいかに危険なトレーニングなのかが分かってきたのに、本気で実行するつもりだったのか？トレーニングとしては効率が悪いうえに、柔軟性が低下するし、関節や筋肉を傷めるスポーツ傷害を引き起こす可能性が高いそうだ。根性論でどうにかなる時代は終わったんだと、深閑に伝えておくべきか？

「——さてさて、白麗陵に従育科が出来て早半年がたちました！いや、月日の流れは早いものですよ。テレビでも紹介されましたし、規模の大きなパーティーの席でもそれなりに話題になっているようですし、出だしとしてはかなり上々なんじゃないかな、と思うわけです。」

話題になっているのは、なっているだろうけど、それがイコール成功とは限らないんじゃないか？

「なので、そろそろ一発、従育科の実力を披露するいい頃合いなの

ではないかと！そう、日頃から行っている特訓の成果というやつを
アピールする時期なのですよー！」

「……………実力……………？」

「……………特訓の成果って……………？」

「体力づくりと極限状況からの生還の二つしか習ってないのに……
…？」

「アピールって。何すんの……………？」

「あ、オレ土下座なら自信あるで？七色のバリエーションで芸術的
に決めたるわ。」

「……………それ得意なの慎吾君だけだから。」

まあ、まともな授業は数えるほどしかなかったのは、事実だな……。
成果を見せるとしたら……無人島で一週間生活！みたいな状況し
か思いつかない。

「ふふー、皆さん忘れてるようですね？授業だけが授業ではな
いのですよ？」

「……………と、言つと？」

反射的に秋晴が聞き返したが、よく考えてから物をしゃべる癖をつ
けるべきだと思う。考えることをやめた人間に、未来はないぞ？

「皆さん、奉仕活動の一環で給仕をしているじゃないですか。そち

らの成果を見せて貰おうということなのですよー」

まともな意見だが、この後の一言が楓さんの残念さなんだよな……。

「というところで、皆さんには男女の衣装を逆転しての、仮想喫茶をやって貰いますー!」

はあ~~~~~……………。

「……………なんだって?」

秋晴、聞き返すだけ無駄だ。お前の耳はおかしくない、正常だ。おかしいのは楓さんの頭の中だ。

「要するにですねー、男の子がメイドさん、女の子が執事さんになって給仕を試みよう——という試みなのですよ。」

「それはだれが得するんだ……………?」

ついつい、口を挟んでしまった。

「え、少なくとも先生は大満足ですよ？」

お前だけかいつ！…ってツツコミたいけど、我慢だ、我慢！

「なんで普通にやらないんだよ……。」

秋晴のつぶやきは当然だ…。

「だってですよ、週末に門戸を開放して大勢に見て貰おうと思ったら、ダメ出しが出たんですよ。なら、サプライズがないと面白くないじゃないですか!？」

全員、絶句……。くだらなさすぎる……。

「……………あの、やるとしたらいつやるんですか？」

ミケが若干ためらいながら質問した。結果を知っている俺としては、むなしくてしょうがない……。

「思いついたが吉日というわけで、今日やっちゃいます!」

「今日かよ!？」

秋晴のツツコミ。

その後も、楓さんの説明は続いたが……………結局、仮装をやる羽目になった……。

「本当にこれなのか……………」

俺に与えられたコスプレは……………チャラ男っぽい服とヘアワックス。

「なんでだよ……………」

栗須の呟きはむなしく更衣室に響いた……………。

S i d e : 深閑

「ところで深閑ちゃん、どうして栗須くんの服装はあれなんですか
〜?」

「……………黙秘します。」

……………理由を言うのは、なかなか抵抗がありますね。

考えてみますと、栗須さんの服装（私服も含む）はいつもしっかり
しています。しかし、“地味”の一言で片づけられてしまうことは
否めません。

しかしです、素材自体は良いものを持っていると……………なんでもあ
りません。

教師が生徒に対して、このような期待を持っている、などという事
実はありません。ありえませんが。

……………早く来ないでしょうか……?

S i d e : 薫

「——誰だ、貴様！」

僕が振り返った瞬間、見知らぬ男性が、そこにいた。

「いや待てっ、それはあり得ないだろ！さっきまで普通に会話してたし——っていつか分かれよ！？クラスメイトの顔を見忘れるな！」

「な……………日野か？本当に日野か？」

「疑う余地もなく俺だ！」

本当に、あの日野秋晴なんだろうか？声は似ているが、見た目だけでは判断しにくい。

「くっ……………先に教室に戻るからな！」

「え？あ、待っ——」

あの恰好だと、誰なのか認識されずに警備部に通報される気がする

んだが……。大丈夫なのか？

「まあ、秋晴なら大丈夫だろう……。」

僕の後ろから栗須の声が聞こえた。もう着替え終わったのか？

「もう着替え終わったのか、栗……。す……。」

「な、なんだ？」

……。かっこいい……。いつもの栗須とは全然雰囲気違って……。かっこいい……。

「い、いや、なんでもない……。」

「そうか。ところで、どこか変なところはないか、俺？」

「いや、ないと思う……。」

いつもは地味な感じなのに……。今日の服装と髪型に変えると、テレビに出てきてもおかしくないレベルだぞ！

「そうか、ならよかった。あんまり自信がなかったんだよ。」

「……。栗須。」

「どっかしたか、薰？」

「……。コスプレというからには、“キャラ作り”が重要なんじゃないか？」

「と、言ひと？」

「僕は、口調をホストみたいな感じにした方がいいと思う。」

「ふむ……。一理あるな……。やってみようか。」

どんな感じになるんだろうか？ 気になってしょうがない。

「薫、君はいつ見ても美しいな……。」

栗須はそう言うと、僕の手を取り体を引き寄せた。そしてそのまま、耳元で呟かれる。

「このまま持ち帰ってしまいたいな……。愛してる、薫……。」

.....。

「お、おゝい、薫！ 大丈夫か？」

.....その後、気が付いたら5分以上経っていて、栗須が既にいなかったのには驚いた.....。

S i d e : 栗須

薫がいきなり倒れるからびっくりした。まあ、すぐに回復すると思っただから更衣室のベンチに寝かせておいたが、大丈夫だったんだろ
うか？

それにしても、さっきから変な視線を感じる。主に、俺の横を通り
過ぎて行く女子から。

「薫は『変なところはない』と言ってくれたが、心配になってきた
な…。」

別に、薫を疑っているわけではないんだが…。やっぱり、気になっ
てしょうがない。

そのまま教室に向かおうとすると、秋晴、腹黒、ドリルのトリオに
遭遇した。廊下のご真ん中で話し込むのはよくないと思うぞ。邪魔
だから。

「おっす、朋美、セルニア、鳳^{フオウ}さん、秋晴(?)。何やってんだ、
こんなところぞ?」

「お! いいところに来た、栗…す…?」

また、この反応なのか…? 原作では、秋晴が本人だと認識してもら

えずに物凄く落ち込んでいたが、今の俺なら理解できる気がする……。

「……………なんだ、秋晴？」

「……………本当に、栗須なのか？」

「その言葉はそっくりそのまま返してやるよ、秋晴。『本当に、秋晴なのか？』」

「……………orz x 2」

「傷つけあうのでしたら、黙っておけばよろしかったのに。」

セルニア、それは分かっていたんだがな……………。くっ……………。

「それにしても二人とも……かなり、印象が違いますね……。」

腹黒の言つとおり、だいぶ違うかな……。特に秋晴は。

このまま、orzしていてもしょうがないので起き上がる。秋晴の方も似たような結論に至ったのか、ほぼ同時に起き上がった。

「あ、そういうえばキャラ作りを忘れてた……。」

薫に言われたばっかりなのに、もう忘れるところだった。

「キャラ作り……ってなんですか、栗須くん？」

「見た目を変えたんだから、口調も変えたほうがいいって薫に言われたんだよ。まあ、見てろって……。」

自分の中でイメージするのは、店のNO・1ホスト。自分のできる限りの決め顔を作って……

「今日もお美しいですね、お嬢様方。この後で開かれる仮装喫茶ではぜひご指名を。」

気障なポーズとともにそうやってみた。自分ながら、じんましん蕁麻疹が……。

「「「……………」」」

女性陣は三人ともひいているのか、黙ったままである。秋晴は秋晴で、頭を抱えているし……。やっちなったな!!!

「栗須……。その決め顔でそういうセリフを吐かないほうがいいと思うぞ……。」

「やっぱり俺、き、キモいか……!?!?」

「……………無自覚なのが余計にまずいな……………」

やっぱり似合っていないのか……………。

「栗須……。一つだけ言っておく。」

「……………なんだ、秋晴?」

「その顔は反則だ!!」

反則的なまでに気持ち悪いのか？へこむな……。……。

その後、三人が復帰した。若干顔が赤いように感じたが、体調不良か？もしかして、俺のあれが見るに堪えずに……。体調を……。

そんな感じに鬱状態になりながら、秋晴に引きずられて教室へと向かっていった……。早くもトラウマになりつつあるんだが、この仮装……。

この鬱状態から脱却するには薰エネルギー（通称、Kエネ）が必要かもしれない。そういえば、薰はメイドのコスプレだったよな……。

……。メイド……。ふ、ふ……。ふふふふ……。

みなぎってきた~~~~~!!!

妄想だけで復活！そんなことよりも、本物が楽しみ今日の授業が終わった後に、薫メイドには個人的にご奉仕してもらおうかな？もちろん自室で。そうすると、どうやってメイド服を調達するかだが……。

早くも授業後のプランを妄想し始めた俺だったが、まだまだ授業はこれからだということをしつかり忘れていたような気がする。

—— 次回に続く。

6話 コスプレ喫茶 前編（後書き）

というわけで、薫メイドは次回で。

それと、次回のメインは深閑の予定。たぶん…。

一つ言えるのは、原作の話はだいぶ変わります。ということですよ。

ではまた次回の更新で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9495v/>

まさかの転生先！？

2011年10月7日19時47分発行